ひろ本濃高野山
尊れをゝへの
道も絶をて
動なれ世々濃守り城
一筋に以可此とまそ
猶祢ろふ所也

忠凞謹詠」

五大尊ノ秘法御祈禱

祈禱料黄金三枚、竝奉書紙ニ而長三寸巾貳寸程ニ封ゝ、右封中ニ、

主上

公方様・近衛左府殿御年ニ而も認有之候哉、上ハ書、今ノ字、大ノ字、左ノ字認有之、三封共被相渡、右者清水寺者無人之儀、且同寺ニ而修行致ゝ候而者大業ニ相成候間、隱ニ高野山に持下、同所ニ而大切ニ修行可致旨、左府殿被申渡候趣、忍向承歸、此者に夫々相渡申聞候付、高野山に持下り、山内正智院に罷越、右之通祈禱被申出候付、碩學所に披露いさゝ度、可然引廻呉候様相頼、青巖寺ニおゐて、碩學中に及披露、示談之上、山内南院於道場ニ、一七日之間、此もの二も衆僧ニ加り、大護摩を焚、異國退去、五大



三月忠熙再ビ祈禱ヲ命ズ

太元帥ノ秘法祈禱

五月ノ祈禱次第

尊之秘法、祈禱以ゐゝ、

「(朱書)右五大尊之秘法ト申者、本尊波切不動明王ト申、弘法大師唐土より歸朝之砌、船中ニ而彫刻之本尊ニゝて、惡魔降伏之本誓之旨、信海申立候、」

結願之上、右大護摩之卷數持歸、忍向を以左府殿に差出候旨、

一同三月中、近衛殿に忍向罷出候節、前同様、渡來之外夷退去、天下泰平之祈禱修行可致旨、左府殿被申聞、其節者、書下ヶ等無之、祈禱料黄金壹枚被相渡候旨、忍向承歸、右黄金相渡候付、此者儀、高野山に持下、年預増福院に罷越、右之通祈禱被申出候付、碩學中に披露いたゝ度旨申聞、碩學一同呼寄貰ひ、及披露、示談之上、山内西南院之於道場ニ、三七ヶ日之間、異國退去太元帥之秘法祈禱いたゝ候積申談置、

「(朱書)右太元帥之秘法ト申者、本尊太元明王ニ而、弘法大師眞筆ニゝて、敵國散去を主ト致ゝ候本誓之旨、信海申立候、」

此者ニ者、自坊ニ用向も有之、歸京いさゝ居候處、結願之上、右祈禱卷數高野山より差越候付、忍向を以左府殿に差出候旨、

一同五月中、近衛殿に罷出候節、

御内勅之由、渡來之外夷退去、天下泰平之祈禱修行可致旨、左府殿より書下ヶ、竝

「（天書）夷賊邪心、速疾降伏、四海泰平、萬民娯樂御祈之事、
右、四所明神法樂、竝太元明王秘法、三七ヶ日之間可勤修旨、叡慮之趣、宜令承知、可
抽精誠條如件、
安政五年戊午五月廿三日

左大臣忠熙

高野山金剛峰寺
寺務青巖寺
竝衆徒中」

爲御祈禱料黄金五枚御下ケ之旨、被相渡候由、忍向持歸り、右書下ケ・黄金共相渡
候付、此者儀、高野山江持下り、前書年預増福院江罷越、右之通御祈禱被仰出候付、
碩學中江披露いたし度旨申聞、一同碩學一同呼寄貫ひ、及披露、示談之上、高野山
四所明神寶前山王院ニおゐて、三七ヶ日之間、異國退散太元帥之秘法御祈禱いた
し候積申談置、其節も此者ニ老、自坊ニ用向も有之、歸京いたし居候處、結願之上、
右御祈禱之巻數高野山より差越候付、此者儀、近衛殿江持參、左府殿江直々差出
候旨、

一紙貼

四月朝彦親王高野山ニ修法セシメラルル件

一同四月中、青蓮院宮江忍向罷出候節、
朝敵・佛敵退治之祈禱高野山おゐて修行可致旨、此もの竝忍向宛之右宮直書、
「（天書）右直書披ト老、不相覺候得共、大意左之通相心得候旨、信海申立候、
此度墨夷渡來ニ付、先達ゟより、其一山之大衆丹誠を盡おら〳〵祈禱之事、神妙之
至也、猶此度
朝敵・佛敵退治祈禱之事賴入存候、依ゟ判金壹枚差遣候、可然取計賴入候也、
尊融」
三月廿五日

爲祈禱料黄金壹枚被相渡候由、忍向持歸、右直書・黄金共相渡候付、
朝敵ト申文字、昨春以來風聞之趣ニゟ老、右
朝敵之貳字、何歟
關東江拘り候樣被察、不容易儀ト存、其段忍向江相尋候處、外夷之もの共屢渡來、
朝意ニ不叶儀を強ゟ申立候故、外夷を指、
朝敵ト被認候儀ニ可有之、竝外夷渡來屢之内ニ老、耶蘇宗門抔相弘可申老必定之儀、
是則佛敵ニゟ可恐、憚儀ニ無之旨、忍向申聞候付、何樣右樣之儀ニ可有之哉ト心解い
たし、右直書・黄金共、此者儀、高野山江持下、前書年預増福院江罷越、右之通祈禱被申

出候付、碩學中ゟ披露致〳〵度旨申聞、碩學一同呼寄貰ひ及披露候處、碩學之內正智院儀、

朝敵之二字不審を立相尋候付、忍向申聞候通外夷之者共屢渡來、

朝意ニ不叶儀を强ゐ申立候故、外夷を指、

朝敵ト被認候儀ニ可有之、竝外夷屢渡來之中ニ者、耶蘇宗門抔相弘可申者必定之儀、是則佛敵ニゐ、右

朝敵ト申者、全外夷を指、被認候儀ニ可有之旨申聞候處、正智院儀、右之次第ニゐ被認候儀ニ有之候ハヽ、外夷を指、

朝敵ト認難キ儀も有之間敷旨申聞候付、示談之上、前書西南院之於道場ニ、三七ヶ日之內、

朝敵・佛敵退治太元帥之秘法祈禱可致積申談置、尙又其節も此者ニ者、自坊ニ用向も有之、歸京いをゝ居候處、結願之上、右祈禱之巻數高野山ゟ差越候付、此者儀、青蓮院宮ゟ持參、右宮ゟ直直差出候旨、

「右朝敵・佛敵之文言、前書辯解者、此者、忍向申談、表之唱ニゐ、內實深趣意可有之旨、再應及吟味候處、此者儀、青蓮院宮ゟ直直罷出、承歸候儀ニゐも無之候付、忍向辯解之通ト相心得居候得共、同人儀者、外夷一條、關東御所置振等、心底ニ不應由、兼兼相歎罷在候折柄、當春以來、星祭ニゐト者午申、日日近衞殿ゟ罷出、外夷退治之祈禱を承請、又者青蓮院宮ゟも每每罷出候、付ゐ者右兩所ゟ、外夷一條之儀を始、關東御所置振之儀迄、彼是存寄申込、不容易次第も可有之哉、終ニ出寺いたし〳〵、薩州鹿兒島ゟ逃行、同所近海ニゐ溺死いたし〳〵候上者、全ク右次第吟味可相成を恐、一命を果候儀ト相聞、左候ハヽ、朝敵・佛敵之文言ニ付ゐも、忍向意內ニゐ者、深キ趣意可有之哉ニ被察候儀之旨申候付、右體察迄之儀ニ無之、素ゟ深密存居可申旨、再應及吟味候得共、差向一己之申口ニ付、彼是申紛罷在候哉、相聞申候、」

一去午四五月頃ト相覺、忍向儀、青蓮院宮ゟ罷出候節、此者儀、兼ゐ高野山碩學之者ゟ傳授請罷在候太元帥八印ト申、眞言宗傳來秘密之調伏法を、右宮被授度旨被相賴候由、忍向承歸申聞候付、其後高野山ゟ罷越候節、右法他宗之者ゟ傳授致〳〵、苦ケ（ママ）間敷哉、碩學之者ゟ相談いをゝ候處、高位壹人之方ゟ者、他宗ニ候共、授不苦旨、弘法大師之教も可有之旨、碩學之者申聞候付、翌六月中、右宮ゟ此者罷出、右法傳授いをゝ置候旨、

「右太元帥八印之法ト申者、前書太元帥之秘法中之眼目之秘印之旨、信海申立候、」



貼紙二

八月朝彦親王忍向ニ祈禱下命ノ件

修法ニ就キ信海ト高野山寶性院トノ協議

轉法輪ノ法

一同八月頃、青蓮院宮ニ而、天台眞言宗秘密之一字金輪之法を以、夷賊退散、天下泰平之祈禱有之候旨、忍向より及承候旨、

「(朱書)右一字金輪之法ト申者、本尊一字金輪ト申、大日如來ニして、魔障不隣近、帝王之威光を盛ニいさゝ候祈之旨、信海申立候、」

一近衞殿より、外夷退治之祈禱修法之儀、追追被申渡候付而者、去午四月中、此者儀、高野山に罷越候節、右一山門主寶性院に、外夷調伏靈給速ふ處之修法ニ者、何を修シ可然哉相談いさゝ候處、調伏之仕方種種有之候、内ニも轉法輪之法を修候ハハ、靈給速ニ可有之旨申候付、左候ハハ、右法を修候ニ用ひ候本尊金筒拵度候間、貸渡吳候樣相賴候處、右金筒者、同所蓮金院ニ所持罷在候付、貸遣ゝ候旨、寶性院申聞候付、右金筒借受歸京、忍向に及示談候處、同人儀、右金筒所持青蓮院宮に罷出、右宮に入一覽ニ、高野山ニ而借受歸候手續等、委細申述、寫取拵度候間、右入用寄附相願候由之處、承知被致候趣ニ而、忍向儀懇意ニいさゝ候薩州家來原田才輔相賴、同人方に出入いさゝ候油小路二條下ル町刀小道具渡世金津屋源七ト申者に申付貰候由、才輔儀も、兼兼外夷一條苦心罷在候者ニ候哉、右金筒を以修法いゝ、外夷退治相成候者結構之旨申聞、隨喜いゝ、職人飯料等者、才輔喜捨いさし、同人方に細工爲致可申旨申聞、委細忍向より才輔に賴置候由、同八月中頃、出來上り、忍向儀、青蓮院宮に持參、右宮に入一覽ニ候處、暫預り置候旨ニ而被留置、翌九月初頃、忍向儀、右宮に罷出候節、右金筒竝入用代金八兩餘寄附被致候旨被下ケ候由、忍向持歸り候付、右代金者才輔方に差遣、金筒者秘密之品ニ付、人目ニ不拘樣、居間二階天井之内、物入に取仕舞置、此者儀者、同月十五日、當地出立爲御納經江戸表に罷下り、十二月十三日、歸京いたゝ候付、右金筒未タ開眼不致、尤青蓮院宮ニ被留置候内ニも、開眼等有之、右品を以祈禱有之候儀者不及承旨、

「(朱書)右轉法輪之法ト申者、本尊大輪明王ニして、一切之怨敵を摧破いさゝ候祈之旨、信海申立候、」

○中略、

右、信海吟味仕候趣、書面之通ニ而、

朝敵・佛敵之處者、猶此上精精相糺可申積ニ御座候、以上、

未二月　　小笠原長門守

貼書面、四所明神ト申者、高野山之鎭守ニ而、左之明神之由、信海申立候、

紙一　丹生大明神　高野大明神
　　巖島大明神　景比大明神

貼紙二

書面、忍向股肱之侍ニ而、近藤正愼ト申もの有之、此者儀、忍向取計候機密筋、專ラ承知罷在候哉ニ相聞候付、昨年九月、忍向當地逃去候後、引續呼込、一ト通リ相糺候處、何事も更ニ不申立、舌を噛切り、夫より發病、養生中をも種種手を盡シ相糺候得共、覺悟を極メ候體ニ而、終ニ一言も不申立、養生不相叶、先達而相果候儀ニ有之、然ルを以相考候而も、

朝敵・佛敵之文言ニ老、如何ニも深趣意有之事ト相聞申候、

二十四日　幕府、清水家老稻生正興（出羽守）ヲ留守居ト爲シ、町奉行跡部良弼（甲斐守）ヲ元清水附支配ニ轉ジ、勘定奉行石谷穆清（因幡守）ヲ町奉行ニ、小普請奉行佐木顯發（信濃守）ヲ勘定奉行ニ補ス。

〔堀田正睦日記〕（○東京帝國大學所藏本）

五月廿四日、

稻生正興等補任

○中略、

一四ツ御太鼓ニ而出宅、（染帷子・半襟、）登城四半ト二寸前、

但、大和殿同篇（腹痛水泄）不參、

一伺泊方駿河守、

一召出有之、自分

御名代言上、次伊賀殿

御名代言上、次御兩卿方

御對顏、畢而例之通二之間御緣列座、月番被伺

御前、會釋ニ而、

御留守居

元清水附支配

町奉行（跡部甲斐守跡）

安政五年五月二十四日

清水附家老　稻生出羽守
御留守居次席・町奉行　跡部甲斐守
御勘定奉行　石谷因幡守

御勘定奉行
石谷因幡守跡

右

御直ニ、被　仰含之、相濟、掃部殿初、一同横　御目見、

小普請奉行
佐々木信濃守

〔内藤信親日記〕○子爵小笠原長生所藏本

五月廿四日、

○中略、

一四ツ御太鼓ニ而出宅、

一登　城、四半ニ二寸前、

一御機嫌、御側衆駿河守を以伺之、

一大和殿、腹痛水瀉同篇不參、

一御錠口明、被爲

召候旨、泊方安藝守申聞、備中殿・伊賀殿先進、一同奥ニ廻り、太公望御杉戸際、

一御座間御上段

御著座、泊方左右ニ而、今朝之





御名代備中殿・伊賀殿、言上相濟退去、次御兩卿方

御對顏相濟、月番御杜際、外一同其次順々着座、月番被伺

御前、三人目備中殿ニ會尺ニ而、御用人出ル、

御留守居

元清水附支配

町奉行
跡部甲斐守

御勘定奉行
石谷因幡守

清水附家老
稻生出羽守

御留守居次席町奉行
跡部甲斐守

御勘定奉行
石谷因幡守

小普請奉行
佐々木信濃守

右

御直ニ、被　仰含之、披露御取合等、如例相濟退去、次一同横　御目見如例、畢而引、

一廻り出掛、○中略、引掛、中之間ニ而、今日御役替之面々、御禮謁之、

一今日稻生出羽守御留守居被

仰付候付、爲引渡月番中務殿、御廣敷ニ被相越候、

一御用相濟、使遣一同退出、九半打五分廻リ、

〔幕府沙汰書〕○東京帝國大學所藏本

五月廿四日、○中略、

跡部良弼等補任

元清水附支配

御留守居　佐野日向守跡

町奉行　跡部甲斐守跡

御勘定奉行　石谷因幡守跡

右於　御前、被　仰付之、

一溜詰間之爲伺御機嫌登　城、於例席謁掃部頭・老中、

御座間

御役替

御留守居次席町奉行　跡部甲斐守

清水附家老　稻葉(生)出羽守

御勘定奉行　石谷因幡守

小普請奉行　佐々木信濃守

跡部甲斐守





席之儀者、是迄之通、取來御足高、其儘被下之、

右於新部屋前溜、(老中堀田正睦宅)中務大輔申渡之、

公事方

右被　仰付旨、於同所、同人申渡之、

佐々木信濃守

○水戸藩御城書海防部ニモ、マタ本書ト同一内容記事アリ。

〔高麗環雜記〕○東京帝國大學所藏本

五月廿四日、

御座間

元清水附支配

御留守居次席町奉行　跡部甲斐守

清水附家老　稻生出羽守

御勘定奉行　石谷因幡守

小普請奉行　佐々木信濃守



安政五年五月二十四日

五百石高御加增、

右於　御前、被　仰付之、

○安政年錄・溫恭院殿御實紀ニモ、マタ本書ト同一內容記事アリ。

〔墨夷一條所々書取幷風說〕○伯爵橋本實頴所藏本

五月廿四日、御役替、於御前被仰付、

跡部良弼等補任

清水御附　江戸町奉行　跡部甲斐守

町奉行　御勘定奉行　石谷因幡守

御勘定奉行　小普請奉行　佐々木信濃守

御留主居　清水御附　稻生出羽守

〔代官竹垣直道日記〕○維新史料編纂會所藏本

五月廿四日、曇、小雨、

○中略、



一今日御役替、○町奉行跡部甲斐守、清水勤番支配、○御勘定奉行石谷因幡守、町奉行、○小普請奉行佐々木信濃守、御勘定奉行、

○中略、

同廿六日、曇、

一朝五半時出宅、○石谷因幡守に歡申置、

〔村垣範正公務日記〕○村垣範通所藏本

七月十九日、快晴、午後村雨、夕晴、午未風、

一今日出帆之處、送風ニ付逗留、（シラヌシニ在リ）

○中略、

○野州內狀壹通、六月廿九日附、（竹內保德、箱館奉行）

○中略、

織部ゟ野州へ內狀之內、五月廿二日附、（堀利忠、在府箱館奉行）

○中略、

同斷、六月二日附之方、

○中略、石谷町奉行、佐々木其跡、御加增ふく、長崎ゟ在住、家內引連ニ成ル、早々云々、申來

ル、

〔目付〕岩瀬忠震書翰〕○橋本景岳全集所載

岩瀬忠震ノ補任評

○五月二十四日〔稲井藩士〕橋本左内宛

昨日は御紙面、退出展閲、○中略、

○本日は姦黨外に遷轉有之候、後議は又可及姦黨歟、前後錯綜、令人眩目、良工の好手段なるべし、呵々、

○中略、

念四

把志猛特兄

○本書ノ全文ハ、之ヲ五月二十二日ノ條ニ、收錄ス。

〔福岡藩在府家老書翰〕○候爵黒田長成所藏本江戸御用狀所載

○五月二十八日在國同役宛

以御飛脚一筆致啓上候、

少將樣益御機嫌能被成御座奉恐悦候、於當御地、

侍從樣　上々樣益御機嫌能被成御座候、

蟾洲



○中略、

一御勤之廉書拔差上之候、尤御勤御先例朱書之通御座候、

○中略、

五月廿八日

御國　惣　中

江戸御留守方　惣　中

○中略、

本文御用狀之內ニ見ル御勤之廉書拔寫

○中略、

一清水附御家老稻生出羽守殿、御留守居佐野日向守殿御跡被仰付候旨、五月廿四日聞書ニ相見申候、

〔御太刀銀三枚馬代一種三百疋〕　御使者

一御勘定奉行石谷因幡守殿、町御奉行跡部甲斐守殿御跡被仰付候旨、右同斷、

〔朱書〕「右同斷、」

一小普請奉行佐々木信濃守殿、御勘定奉行公事方石谷因幡守殿御跡、右同斷、

福岡藩士幕吏ノ轉任ヲ藩廳ニ報告ス

安政五年五月二十四日

（朱書）「右同斷、」

〔松平忠固日記〕〇子爵澁澤榮一所藏本

六月九日、

〇中略、

一四ツ御太鼓ニ而出宅、

〇中略、

一登　城、四半に二寸前、

〇中略、

一廻り出掛、松溜に列座、〇中略、夫ゟ廻り詰衆伺御機嫌相濟、芙蓉間に列座、

町奉行　石谷因幡守

虎御門外屋敷、家作共差上之、小川丁松平筑後守屋敷被下之、

御勘定奉行　佐々木信濃守

虎御門外石谷因幡守屋敷、家作共被下之、下谷和泉橋屋敷、家作共可差上之、

石谷穆清佐佐木顯發屋敷交附



右兩度ニ、自分申渡、書付相渡之、畢而一同引、引懸、中之間御張紙下、右兩人御禮謁之、

〔福井藩主松平慶永書翰〕〇侯爵伊達宗彰所藏本

〇五月十七日カ　宇和島藩主伊達宗城宛

布答

御密啓拜展、如仰晴陰不定、世態又同、先々閣下御勝常奉歡抃候、陳者、垂示之貴報、左ニ記ス、

〇中略、

四、過日（堀田正睦）櫻閣へ可承存候處、重嶮之難困、當惑之餘忘却仕候、（鈴木藤吉郎）鈴藤之沙汰ハ一向無之由櫻被申候、（久世廣周）關之出勤、全眼痛贋物ニ無之候、又（井伊直弼）愛牛先生之光景如何、櫻之ゑふ〻御聞被成度候ハヽ、明日ニ而も、明後日ニ而も、思召次第、弊舍へ御押掛可被下候、尤御出之半時前計、使介なり、華翰ふり、被遣可被下候、右布答如斯、早々閣筆、頓首、

即

天下柱石大仰望藍山公閣下

憬

又云、〇下略、

幕吏更迭ノ內情ニ就イテ

安政五年五月二十四日

幕吏更迭ニ就イテノ内情

〔松平慶永書翰〕○侯爵伊達宗彰所藏本

○五月二十六日伊達宗城宛

瑤函展讀、先以愈御清安、恐賀不啻、陳者、安島(彌次郎)より貴臣へ申越候書狀御投示、披展仕候、今朝安より家僕迄、右一件申越候ニ付、早速尾臣へ幾日登館可然哉、問合置候間、申越次第、又々可汚貴聽候、

○安書面之通り、從　貴君を尾(德川慶恕)へ一書被遣候ハヽ可然奉存候、尚又被仰遣候御草稿拜見申度候、鈴吉もたまひ相付、跡氏之外轉、愉快とハ乍申、就是風波大動搖候ハヽ宜候得共、關主ハ麼ニ付、夫程ニ不至敗軍、彌桐(松平忠固)之紋所者握權と奉存候、却ゐ無益又大害、

○中略、

○右貴報、如此ニ御坐候、午眠も出來兼、坐几辺徒ニ喫麁烟耳、嗚呼頓首、

即　　永

鶴　君

忝奉存候、尚又奉祈候、

○下略、

〔岩瀨忠震書翰〕○橋本景岳全集所載

鈴木藤吉郎ニ就イテ

○五月二十七日橋本左内宛

○上略、

○昨日は謙次郎(二)罷出、新聞最可驚可笑事共に存候、

○蘭人(クルチウス)も、來る四日に發足之積りに相成候、先差向き外夷之接待も無之、吾輩放逐之時愈來り申候、御一粲々々々、

○中略、

○別に新聞も無之、豐臣氏(鈴木藤吉郎)も最早措手之手段も有之間敷、見斗りは頗る美擧なり、夫に付、絶巓之震災も有之哉の兆も相見へ候、如何有之哉、

○市尹は英雄雋傑之手揃と相成り、定て鴻業韙績も可多と亦一歎、

○作樂(堀田正睦)も死中活を可求と、餘程心配斡旋之樣子に候へども、其功の成否は不可知之勢、呵々、

念七　　桂　痴

端　原　盟　兄

○本書ノ全文ハ、之ヲ五月十六日ノ條ニ、收錄ス。

〔岩瀨忠震書翰〕橋本景岳全集所載

安政五年五月二十四日

○五月二十八日橋本左内宛

復

拝展、如諭新霽至喜、○中略、

○豊氏（鈴木藤吉郎）は此末定ゑ繋獄程の事にも可至と相察申候、前市尹の轉役も、半上落下、高格とも、是迄の通り云々、頻りに流行ものと相成候、賞か罰か、殆不可解者、

○來月四日、蘭人發程、最早小生輩は、愈排撃之時至り申候、來月四日は、猶婢僕の三月四日の如しと一笑、

○此節、（松平忠固）上格の長官、二ヶ條程如何之事有之、昨今所云、セウモフリモナク面折に及置候、更に一層の激勵を蒙り可申哉と甘心致居候、御一粲、垂晩取込、草々布字、

爽快

念八

松懶畏契

○下略

○本書ノ全文ハ、之ヲ五月二十八日ノ條ニ、收錄ス。

（田安家附家老）水野忠徳書翰（○昨夢紀事所載）

○五月二十八日松平慶永宛

鈴木藤吉郎處罰ニ就イテノ世評



（五月二十八日）

一、此日、水野筑州よりも呈書あり、要件を抄出する左の如し、

昨烏（松平忠固）桐閣へ御枉駕之折柄、西議に渉り候處、彌（徳川慶福）鬼方に決定候趣、段々御懇切ニ被仰下、委曲奉拝誦候處、只々悲歎ニむせひ候次第、○中略、

一藤（鈴木藤吉郎）も彌表向と相成候哉ニ被察候、關（久世廣周）宿ニは、一昨日より御病名相變り、御全快無之樣子、全ク彼か所爲に可有御座哉、何共恐入歎息之至ニ奉存候、何事も此節の天色同斷、何れの時にや位育之風景を仰き可申哉と奉存候、

○本書ノ全文ハ、之ヲ五月二十八日ノ條ニ、收錄ス。

〔如坐漏船居紀聞〕○松代藩士山寺源夫雜記（久保衆復所藏本）

戊午六月朔付江戸より來書抄

一先月末、久世樣御不首尾引ニゑ、二日目御胸痛と御病名相變〳〵、迚も御六ヶ敷と申噂ニ御座候處、今日御出勤と申事、全彦根樣之御取持ニゑ、昨日ゟ俄ニ御病症御宜敷、近日御出勤ニ相成候、鈴木藤吉郎の御かふれと申事、右故御出勤ニも相成候由、跡部樣ハ藤吉郎ニ御あさり被成候と申事相違も有之間敷、市中潤澤掛り一件と相見申候、

〔高麗環雜記〕○東京帝國大學所藏本

安政五年五月二十四日

久世廣周ト鈴木藤吉郎

久世廣周ト鈴木藤吉郎

跡部良弼ト鈴木藤吉郎

鈴木藤吉郎
罷免

五月、

右者、此度内寄合出席差留、幷御用聞
御免、諸色潤澤掛　召上、身分之儀者、是迄之通り、
右南町奉行伊澤(政義)美作守御役宅ニおゐて、御目付神保(正興)伯耆守立會、美作守申渡之、
但、御爲筋且御用筋柄ニ寄、與力迄申立候義者不苦旨、同人申渡之、

六月三日、

町奉行御用聞
鈴木藤吉郎病氣付
名代
蜂屋新五郎

其方儀、米・油諸色潤澤取調之御用、幷與力上席之儀差免、
右者、堀田備中守殿依御差圖申渡之、
内寄合之節、被出不及候事、

町奉行御用聞
米油諸色潤澤掛り
鈴木藤吉郎



江戸市中米
穀商入牢

右、南町奉行伊澤美作守申渡之、

七月廿七日、

市中米屋共、昨廿六日入牢被　仰付候風聞承候処、左之通、

關東三組米屋仲買
小網町壹丁目
家主不知
荒井屋
直平

同町
家主不知
嶋田屋
愼藏

芝片門前貳丁目
家持
萬屋
安兵衛

右五人之者、當月廿五日夜、御召捕ニ相成、居宅内諸帳面・證文類御穿鑿有之、北御番所ニ差出ニ相成、同日夕入牢被　仰付候由、

此もの義、廿五日欠落いたし候由、



脇店八ヶ所組地廻り
米穀問屋
龜嶋町
忠七地借
萬屋
勘助
關東三組米仲買
同町
同人地借
美濃屋
留藏

右嶋田屋愼藏父ニ而
當時
渡邊榮藏
淺草花川戸町住居
元町奉行御用聞



右藤吉郎儀者、廿五日夜、北御番所ゟ御召連、使ニ而被出、廿六日御吟味中、揚屋入被　仰付候、

一右直平外四人御召捕、居宅御調之節、藤吉郎ゟ文通幷證文類等有之哉、深御穿鑿有之候ゟ〳〵、

一右一件御吟味筋何故哉、當時下々風聞區々ニ而、突留兼候得とも、是迄藤吉郎取扱被在候仙臺米之由、專風聞仕候、

右密々承探候趣申上候、以上、

七月廿七日

来油諸色潤澤掛

鈴木藤吉郎



〔昨夢紀事〕

五月朔日、〇中略、

一、此頃、岩肥州の左内へ申されたるハ、鈴木藤吉郎たに鞫問せハ、好黨の惡事ハ露顯すへけれハ、伊賀殿も落職になるへけれと、彼は大和殿の腹心なれハ、藤吉郎か事といへは支

取締役

名主

鈴木藤吉郎ノ素性

へ申さる故に、逼りたる事にもなけれハ、延ひ〳〵になれるなり、關閣はあしき人にもあらねと、犯せる罪ハいかにせんと憤られし事あれハ、此藤吉郎を囚へる策やあるへき、水筑州も此者の姦物なるよし申上られたる事あれハ、思ふ由やある承るへしとて、此夕、左内を筑州の許へ遣されたり、筑州も別に思ひよられたる事もなけれと、御大老ハ藤吉郎に關係もあるましけれハ、此人に說きて彼より手を下さハ行はるへくもや、猶岩盥察等へも申談せらるへき由を申されしとそ、此藤吉郎といへるものハ、元房州の百姓より出て浪人の体をなし、一橋殿小普請組鈴木某の養子となれり、生來奸佞にして口才あり、金銀の口入、公事出入の扱ひ等をなして、次第に身上を仕上ケ、驕奢に長せし故、一橋殿ハ御暇となりしか、又五百金を以水戸殿御家人の名目を買得し、葵章の服を着し、往來馬に跨り、旗下の士人に模擬し、居屋壯麗にして婢僕數多召使ひ、婬酒無度、巧みに權門勢家に立入り、近來御家人に御抱入れとなり、格式を定められす、與力の上席に在りて、町方御用聞の役名を汚し、己レか愛憎に任せて、稱譽謗人の進退榮枯を明示する事士大夫ニ及ふ、依之俗流之を尊ひ、之を恐るゝ事鬼魅に等し、賂賄を貪り、金銀を掠取し、非義無道の小人ニ、關閣の金主なるを以て、邸内に出入して言聽かれ、謀行はる、上閣も亦金融を依頼し、其他歴々の諸有司も家計の爲に其扶援を仰かさるを得す、就中大老荷擔の有司に入魂多くして、機

松平忠固非伊直弼ニ紀伊慶福推戴ノ意アルヲ松平慶永ニ告グ

鈴木藤吉郎處分ノ必要

密に參謀して毒計を施す事少なからさるの聞えあり、

○中略、

五月三日、松平伊賀守殿へ御出ありて、御逢對の上、例之御事ハ如何と御尋ねありしに、○中略、伊賀殿、大老ハ紀に決しをられ候へと、○中略、伊賀殿、素よりハ橋とハ存候へと、○中略、紀にも決し候はす、されと萬一紀と決したりとて、夫か爲に御不平を抱かる樣の事ハなくて、依舊御忠誠を盡されん事を希ひ候と申さる、公さありとて忠誠ハ無二申迄もなく候へと、失望の情は慰むへき樣もなからんとこそ存候へ、諸大名とても同し心なるへし、是はさありて後におほし當らるへきものをと仰せけれハ、僕等も其事をのみ痛く恐懼致す事に候へハ、あはれ　公の威力もて鎭め給へかしと申さる故、事の條理をかき亂して、人の心を繫かん事ハ難事とこそ存候へ、たとへられんには、足下の意思は平穩なるへきかと問はせ給ふに、いかてか平らかなるへきと申さる、公夫にて体察し給ふへし、○中略、何事につきても、障害となる鈴木藤吉郎の事ハ御聞及ひも候ひしか、御心も付たるにやと尋ね給ふに、されハ捨置難き事も候へと、彼へ手を下さんにハ、まつ其根たる市尹のかたより、事を始むへくと存候へなと申されたりしとそ、

安政五年五月二十四日

岩瀬忠震土岐頼旨等免黜の風聞

○中略、

五月廿二日、○中略、

一、此夕、左内、岩瀬肥州へ往たりしに、肥州の申されしハ、近來の形勢、朋党ハ根を斷ち葉を枯らさんとの勢にて、危險の時とふりて、肥州も條約調印濟迄も在職無覺束、永井・堀も近々外轉にも成るへき歟、土岐攝津ハいまた波及の沙汰なきよし、當時の人心、正論家ハ朝に立つを愧る勢故、奥御右筆中にも、有志の者は閣老衆へ聞えよかしに、正論の同類ハ追々貶黜、我々ハ幾日比、誰々ハ何日頃、堀田遠からす抔、高談憚る處なき故に、閣老衆も甚迷惑致さるよし、言路ハ熟く閉塞して、誰あつて言を發する者なく、寂然たる事共にて、海防懸りも甚閑暇、伊賀殿ハ鎮定策を得たりと、自得の体にハ見ゆれとも、人心十分離反、御大切の時節に及ひし由、鈴木藤吉郎も追々罪を得へき運ひともなりたれハ、本郷丹州初、奸党に連坐も出來可申候、是ハ聊愉快なるへしと物語られたりとそ、

五月廿三日、○中略、

一、今日ゟ久世大和守殿、御不快にて御登城なし、鈴木藤吉郎の波及と聞えたり、此侯御勝手向殊に逼迫せるを見込、藤吉郎ゟ五萬金を調達し置る抔風評あり、

○中略、



跡部良弼ト鈴木藤吉郎

石谷穆清ト井伊直弼

佐々木顯發ノ評

平岡圓四郎ノ井伊直弼松平忠固排斥策

五月廿四日、町奉行跡部甲斐守殿、元清水附支配へ轉役せり、此人ハ鈴木藤吉郎無二の荷擔ニて、彼者の姦計も多く此人によつて行はれたり、藤吉郎例の數千金を甲州に貸して、交際を固くせしあり、此人外轉の上ハ、藤吉郎も程なく獄に繋かるへしといへり、御勘定奉行石谷因幡守殿、町奉行となれり、此人ハ大老と舊き由緒ある家柄にて、當時も大老の腹心なり、何の伎倆もなき人にて、唯大老の鼻息を仰きて勤めらるゝ迄なり、小普請奉行佐々木信濃守殿、御勘定奉行となれり、此人ハ頗る世才に長するの聞えあり、

五月廿五日夜、左内、平岡圓四郎か許へ往たりしに、○中略、圓四郎に一策あるよしにて申けるハ、町奉行井澤美作守ハ鈴木藤吉郎に關係なけれハ、彼をして藤吉郎を鞫問さすへし、さすれハ關宿始贓罪ある面々は、封書尋ねと成て籠居すへし、上田ハ態と除き置へし、さて京使の議となりたる時、彦根へ姫路を出す伊賀殿の姦計を密告して、彦と上とを離間し、彦の怒に乘して、上の贓罪を發露し、封書尋となならハ、上も亦籠居せさるを得す、是姦を除くの策にして、大老の羽翼を殺いて、孤立とするの術なりと申出せるよしを、左内罷歸りて申上たり、

○中略、

五月廿九日、此夕、堀田備中守殿へ御出ありて、御相對の上、廟堂頃日の景況如何と御尋あ

幕吏免黜ニ關スル堀田正睦ノ評

鈴木藤吉郎ノ素性

りしに、〇中略、永井鴻臚・岩肥州の危ふかりしハ保全を得、鈴木藤吉郎ハ追々鞫問にも及はるへき運ひのよし、大和殿關係の筋もさしたる事もなくて、近き程にハ出仕せらるへき抔の事も、御物語申上られしなり、

〔舊幕府町奉行與力〕佐久間長敬談話〕〇關外全集所載

鈴木藤吉郎は、享和元年辛酉に生れた、「野州都賀郡深岩村百姓藤吉倅」である、「兩親とも幼年の砌相果、迹退轉致し、親類同郡引田村郷士齋藤彌平次方へ引取られ、政之進と申能在候處、彌平次弟にて同村に別宅致居候齋藤三藏儀、一橋殿書院番頭鈴木總右衞門方へ養子に相成、家督濟、小普請入之後、此者藤吉郎、を引取厄介に致し置、成長之後、武術修行の爲、所々遊歴、三十年程前文政十二年己丑の頃、三藏方へ立戻、兼輔と改名、彌平次を里方に致し、三藏養子に成、同人病氣に付退身、跡相續致し、藤吉郎と改名、小普請にて久松町續俚俗矢の倉一橋殿用人飯田倉三郎地所借受罷在候、其頃彼は甥下總國香取郡石守村百姓加左衞門次男卯三郎名前を以て、家號越川屋と申伊勢町清兵衞地借受仙臺米廻米取引致し、其頃町人名前を以て廻船數艘所持致し、諸家勝手向仕送金銀融通專らに致し候處、身分不相應の故を以て、十七六か箇年以前卯年天保十四年癸卯、中永の暇に相成、其後淺草區花川戸町所持地面に付引移、浪人罷在、十年以前嘉永二年己巳、水戸家へ被抱、十人扶持申受、八年以前亥年嘉永四年辛亥、中藏奈



行勝手內用向勤方被申付相勤、病氣に付安政四巳年丁巳三月中願の通永の暇に相成候處、御用の品も有之候に付、町奉行直支配に被仰付、」以上は「安政五午年戊午北町奉行石谷因幡守穆清申付、同組隱密廻大八木四郎三郎取調候鈴木藤吉郎身分探偵書」に見えてゐる、

「安政四年丁巳三月二日阿部伊勢守正弘殿御申渡」の文書は、下の如くである、「鈴木藤吉郎右之者米油取扱之儀に付追々見込之趣申立候得共、當時容易に沙汰に及び難く候、併し乍ら奇特之筋に相聞拔羣御用立候の趣に付、町奉行所御用聽其方共手に付相勤むべく候、之に依て新規三十人扶持下し置かれ、常にも役所へ罷出、席之儀は與力の上に差置かるべく候、」當時藤吉郎は淺草花川戸に住み、金貸を業とし、縞に米相場をなす家持浪人であつた、阿部正弘の命は北町奉行跡部甲斐守良弼方より町年寄に傳へ、名主三郎左衞門、後見吉藏これを承り、三月三日朝五時、藤吉郎は「禮服著用、乘馬、侍二人、馬口附二人、草履取一人、鎗持一人、挾箱持一人、合羽籠持一人」上下九人で跡部の番所に往き、「町奉行所御用聞手附、新規三十人扶持、與力上席」の申渡を受けた、それから公用人が案內して與力番所に入り、詰合與力に面會し、控席の間を定められ、南町奉行所に廻つた、

南町奉行所では池田播磨守頼方が面會し、控席を授け、公用人が與力番所に案內して詰合與力に引合せた、役儀は「御國益御主法諸色潤澤掛」で、續いて「北與力年番方都築十左

安政五年五月二十四日

衞門、吟味方高橋吉右衞門、下役同心四人、南與力年番方吟味方兼帶東條八太夫、吟味方中村次郎八、下役同心四人、南北同心三廻役（刑事係）の筆頭、町年寄一人、町名主苗字御免之者三人」が同掛にせられた、

私（長敬）は年番與力の命を受けて、三月四日に祝儀に往つた、門番がゐる、飾手桶が出てゐる、玄關には受付の侍が三人羽織袴で控へてゐる、正面の棚に鎧其他武具が飾つてある、大抵千石以上の旗本位の構である、私が手札を出して祝儀を述べると、座敷へ通れと云つた、私は辭退して歸つた、

近隣の噂を聞けば、野州邊の人で、米相場で金を蓄へ、諸侯に貸附け、先に水戸家に奉公し、君侯老中等と膝組で話をする人だ、門前で責馬をするときは、町内の鳶人足が鈴蟲の附いた鐵棒で往來人を拂ふ、主人が門を出ると、近隣の者は土下座する、名を謂はずに「橋場の御前樣」と云ふ、追々町の御奉行樣になられるのだなどと云ふ事であつた、其頃川柳に「藤吉ははしばで旗を揚げにけり」と云ふのがあつた、

北奉行跡部良弼が藤吉郎を擧げて行はうとした潤澤の政は、外國と貿易するに先だつて、江戸に諸色取引所を設け、諸色を潤澤ならしめ、剩餘を以て輸出品に充てようと云ふにあつた、藤吉郎は南與力蜂屋新五郎を身方に附けた、蜂屋は前に遠山景元に信任せられた老



吏で、天保中一たび先手組に遷り、又町奉行所に遷つたのである、其女柳は久世廣周の妾である、

然るに南奉行池田賴方、南與力東條八太夫、中村次郎八は潤澤の新法を喜ばなかつた、其理由は諸色の産出高を增さずに、取引所を設けるのは、本末を誤つてゐると云ふにあつた、そこで藤吉郎は東條、中村を擠排しようと謀つた、東條は當時親子共職に居た老吏であつたので、隱居願を出して難を免れようとした、しかし池田はこれを免ずるに忍びなかつた、

私の此間の消息を知つたのは、下の關係があつたからである、跡部は水野忠邦の弟で、私の父健三郎は此兄弟の恩顧を蒙つてゐた、父健三郎が天保改革の時永の暇になり、私が幼年で家を繼いだ時、東條は後見をしてくれた、中村は新役の頃父に引立てられてゐた、跡部の下の北與力筆頭秋山久藏は私の外舅である、それ故此等の人人は皆父と私とに內情を打明けてゐたのである、

東條の隱居願は再三提出せられた、遂に三月十日に至つて、東條は「年番方其外掛役被免、本所方被仰付」、蜂屋新五郎がこれに代つた、

しかし取引所の設立は輒く行はれぬので、藤吉郎は手を束ねてゐることを好まず、「御國

益のため、神田今川橋火除土手取拂、跡地面拂下」の策を立て、蜂屋を「拂下願人」にして許された、川柳に「藤吉が出て今川は亡びけり」と云ふのがあつた、

五月二十一日に池田が留守居次席にせられ、南奉行は故の如くであつた、六月十七日に老中阿部が逝去した、狂歌に「藤吉は大和をかけて伊勢參り、使ひ果して跡部どうなる」、又三幅對見立に「思の外寢入つた三幅對、鈴木藤吉郎、片岡仁左衞門、夏目左近」と云ふのがあつた、

藤吉郎は東條、中村濟排の歩を進めようとした、偶前年罪があつて、江戸拂になつた「無宿林の龜事、龜吉」と云ふものが江戸に還つて、兩國米澤町に近と云ふ妾を住はせ、己れも其家に宿泊し、賭場を開いて、てらかすりの錢を取つてゐた、此龜吉が火附盜賊改與力筆頭中山仙右衞門の家に出入し、中山を介して東條八太夫、中村次郎八と相識になり、盆暮の贈遺をしてゐると藤吉郎に告げたものがある、藤吉郎はこれを跡部に報じ、跡部は定廻役をして龜吉を召捕らしめた、龜吉の家の帳簿、手紙等を押收したが、連累者を出す程の文書も見えなかつた、唯神棚の三方に葵の紋が附けてあつたので、僭上だと云ふことになり、近も召捕られた、跡部は吟味與力服部孫九郎、三好助左衞門に命じて、龜吉を取調べさせ、龜吉は入牢、近は揚屋入になつた、次で二人を拷問に掛けると、龜吉が中山仙右衞門方



に出入することを白狀した、しかし東條、中村をば識らぬと云つた、中山は呼出されて、構場所立入者と交ることを咎められ、又其者を町與力に紹介した仔細を問はれた、中村は答へた、龜吉が米澤町に住んでゐることは、町奉行所に知れてゐた筈である、自分は赦に逢つたと云ふ龜吉の詞を信じた、そして捕者に關する御用を辨ずるために、二三度呼寄せて對面した、しかし町與力に紹介した覺えは無いと答へた、中山は拷問を受けても、これ以上の事は言はなかつた、そこで東條、中村は連累を免れた、

其頃又砂糖問屋の事件と云ふものがあつて、文化度に十組問屋と云ふものがあつて、砂糖問屋の名目も立つてゐた、砂糖は原來藥種問屋の扱ふ物であるのに、用途が廣くなつたために別に問屋が立てられたのである、然るに砂糖問屋が脫稅して問屋名目取潰の處分を受け、これを不便として復古願をした、藥種問屋等もこれを聞いて砂糖問屋不成立願を出したのである、

此事件は初北奉行井戸對馬守覺弘が取上げ、南奉行池田が引繼ぎ、東條八太郎掛で安政元年十二月から三年間濡滯してゐた、此の如き場合には、砂糖商も藥種商も必ず賄賂を以て勝訴を得ようとする、跡部はこゝに見込を附けて問屋總代一同を呼出し、廻役に留守宅の書類を押收させた、書類を調べると用途不明の金がある、問屋總代は辯解が立たぬので入

牢させられ、更に拷問に掛けられた、總代は云つた、成程其金は御老中阿部正弘御掛奉行池田頼方東條様御父子に差上げたが、お斷なされたと云つた、これ以上の事は、どうしても言はない、阿部老中は先だつて亡くなつた、池田以下の收賄の證迹も上がらない、そこで跡部は久世老中に申立てゝ、職務稽緩の廉を以て、池田の轉任、東條父子の組替を斷行せしめた、十二月二十八日に殿中沙汰書を以て町奉行池田播磨守頼方は「大目附被仰付」、大目附伊澤美作守政義が「町奉行被仰付」てこれに代つた、二十九日に新南奉行伊澤は東條父子を呼出し、久世大和守廣周の指圖を以て、父子に「場所不相應に付、御先手組與力へ組替」を命じた、當時私は東條の相番であつたので、父子名代として赤坂三河臺の伊澤邸に出頭した、伊澤は新任で、まだ役宅に引移らずにゐたのである、同日夜五時北奉行跡部の命を傳へて、町年寄喜多村彦右衞門は砂糖問屋事件の取調をしてゐた三名主熊井町の磐井理左衞門、長谷川町の鈴木市郎右衞門、新革屋町の石塚三九郎を役所に呼出し、町年寄三人の立會を以て「苗字取上、名主役召放」を命じた、

五年正月二十九日に、三名主は入牢し、三月十八日に市郎右衞門、三九郎が病氣のため出牢し、二十一日に市郎右衞門が死亡し、二十二日に三九郎が死亡した、

四月九日に、生殘つた理左衞門と共に、砂糖問屋取止願人本町藥種問屋行事本町三丁目彌



市地借ひで後見彌市、同行事同町五人組地借幾二郎幼年に付後見五兵衞、砂糖問屋存置願人大傳馬町組砂糖問屋行事小舟町一丁目家持太助、田所町茂八地借武兵衞、通二丁目莊二郎地借武兵衞が跡部の白洲へ呼出され、理左衞門は十里四方追放、家財闕所、太助、武兵衞は江戸拂を命ぜられた、市郎右衞門、三九郎も「存命に候はゞ江戸拂」と申渡された、理左衞門は砂糖問屋等の願書の立案者であつた、

十八日に「御先手稻生忠左衞門組與力」中山仙右衞門が無宿龜吉と交通した廉を以て追放せられた、

二十日に「御先手安藤甚右衞門組與力」東條八太夫「御先手稻生忠左衞門組與力」東條八太郎は西丸蹲踞間に呼出され、閣老久世大和守廣周が若年寄侍座の席に於て「長崎奉行支配調役竝被仰付、依之御切米百俵宛、勤候內只今之高へ御足高被下、竝之通役扶持金共被下」と申渡した、

藤吉郎の同僚擠排策は此に成就した、しかし藤吉は勝つて敗れた、それは此時藤吉郎の罪狀を數へて密告したものがあつたのである、罪狀の箇條は略下の如くであつた、一、藤吉郎は穢多の子なるを隱し居る事、二、浪遊中に殺人罪を犯した事、三、擅に米相場所を開き空米取引をなす事、四、米中買人と共謀して不正の行爲ある事、五、市人より收賄する事、

六、諸大名諸役人に高利の金を貸す事、七、身分不相應の奢侈をなす事、八、與力中山仙右衛門を讒して追放せしめし事、九、三名主を陷いれし事、十、與力東條父子を左遷せしめし事、十一、住宅附近に於て責馬をなす時、市人の通行を妨ぐる事、十二、久世、跡部、伊澤以下諸役人に金を貸し、これに依つて私を營む事、以上大略である、

此密告を受けたのは老中松平伊賀守（忠固）である、伊賀守は公事方勘定奉行石谷因幡守（清穆）に取調を命じ、石谷は關東八州廻をして探索せしめた、そして北町奉行跡部に依怙のあることを發見して、これを伊賀守に上申した、

五月二十五日に跡部は殿中に於て「清水附支配被仰付」、石谷因幡守（清穆）がこれに代つて町奉行にせられた、清水附は空屋を管理する閑職である、

藤吉郎の罪案に穢多の種性を隱してゐると云ふ箇條があつた、此風說の起原はかうである、藤吉郎が或時江戸城の櫓太鼓の音を聞いて、あれは接ぎ合せた皮だと云つた、これが其筋に聞えて、太鼓を納めた淺草の彈左衛門が召されて尋ねられた、彈左衛門は云つた、御太鼓は一枚革を以て製するのが古來の定法である、しかし昔こそあれ程の大きい太鼓に張る大馬が居だらう、今は所詮得難い、接ぎ合せた皮を一枚革と稱して納めるのであると云つた、そして猶詞を添へて、此度のお尋は何人の申立から出たか存ぜぬが、申立て



た人は必ず穢多であらうと云つたさうである、

罪案は箇條毎に取調べられて、中には事實と認むべきものがすくなくなかつた、

六月三日に南奉行伊澤美作守（政義）の申渡を以て、藤吉郎は「米油諸色潤澤掛差免、竝內寄合之節罷出候儀に不及」と云ふ事になつた、續いて七日に石谷（穆清）が殿中に於て、「諸色潤澤方之儀引受取扱可申候、且又外國貿易筋之御用被仰付」と命ぜられた、

七月二十五日の夜、藤吉郎は北番所に呼出され、二十六日に「吟味中揚屋入」仰付けられた、同時に召捕られた者共は關東三組米中買小網町一丁目荒井屋直平、同町大島屋恆藏、芝片門前町二丁目家持萬屋安兵衞、脇店公所地廻米穀問屋龜島町忠七地借萬屋勘助、關東三組米中買同町同人地借美濃屋富藏の五人で、皆二十六日に入牢した、大島屋恆藏父渡邊榮藏は二十五日驅落して二十七日に召捕られ、これも亦入牢した、

六年五月六日（五日歟）、に藤吉郎は申立「口書捺印濟之上」病死した、

九月二日暮六半時に、蜂屋新五郎は南番所に於て急病が起り、肩衣の儘倒れて死去した、同役、醫師が介抱して、病氣と稱して宅へ引取らせた、私も當時介抱した一人である、

十一月十八日に石谷（穆清）掛を以て藤吉郎事件が落著した、「町奉行所元御用聞鈴木藤吉郎、右之者儀、下總國香取郡大寺村百姓死失嘉左衞門次男卯三郎名前を以、內實米中買見世所

持致し、諸家仕送金融事に致し罷在候所、猶巨萬の富を得可申と米油を始、諸色會所を取立、國々へ前金相廻延商之仕法目論見内願致し候處、其儀は御沙汰に不被爲及候得共、御扶持方も被下置候身分御引立相成、米油諸色潤澤方取調之御用相勤候に付、追て志願可貫と自得致し、兼て松平陸奥守（慶邦）家來へ引合買留置候旨申立、米十萬俵市中拂願濟之節、確と入津之見留有之候はば、前金受取不苦旨、奉行より被申渡候迚、陸奥守家來へは未著米拂方願濟相成、潤澤手始に付、速に廻米取計候得ば、未著賣永續可致と、趣意引達申談、右廻米相場違にて損失相立候に付、補方之儀相含候折柄、去巳八月在方送減米十六萬俵を目當に、遠國古米買付之儀、米屋共へ申渡有之候得共、難被行、自然相含候場合に至候迚、陸奥守家來へ引合、兼て此者手に附置候、元米中買小船町一丁目勘七地借恆藏父榮藏申談、仙臺古米爲買付、前金受取、追て限月に相成著米無之差支候とて、元金据置利金のみ相拂、新穀と爲書替、古米取引相濟候委を以て、奉行所へ爲相届、猶又去年三月御府内米潤澤の爲、仙臺米十萬俵米屋共へ置附被申渡候節も、陸奥守家來へ引合、荒増之穀割にて請爲致、右者聊別段米買付候を據に致し、何れも別段廻米の趣名義を下し、定例廻米を繰廻し、或は右卯三郎名前にて、陸奥守勝手向へ用立置候金子返濟有之候はば、繰返し送金可致と、陸奥守家來松枝兵衛等へ申掠、卯三郎名前は米中買見世開店致し候趣に托し、相對濟御觸



以前之舊借を一時引起、追々調達申込候節に至、金子才覺に差支候とて、陸奥守家來安部幸藏へ申談、未著米五萬八千二百俵拂方取計、右の内四萬七千二百俵分は榮藏申談中買共へ相對致し、買人名前相記し候手形受取、内一萬七千俵分相渡、金子調達可致仕送金に差出、尤右未著米は屋敷にて引受之筈幸藏より一札取置、其後陸奥守家來三浦平助出府致し、調達金之儀談受候に付、去々巳十二月二十二日手形二萬四千俵之内二萬俵は榮藏へ相渡才覺爲致、又は屋敷返金の内差加、或は他借致し、二萬三千九百兩右平助へ相渡候處、又候三千兩調達之儀談受候得共、才覺手段無之候に付示談之上墨引可相成揚手形五千俵分受取候上、品能榮藏へ調達之儀申談、同人取計を以芝片門前二丁目家持安兵衛へ賣渡、三千二百六十三兩餘受取、三千兩は屋敷へ差出、其餘は此者手元へ預り置候處、兼て榮藏へ他借爲致候一萬兩金主より催促申出候旨同人申聞候に付、潤澤米十萬俵之前金多分屋敷へ入金に相成候に付、右之内にて返金其外へ可差拂と存、尤右之内三萬兩は國元へ下り金に取計候に付、殘金の外へ他借致し、未著米手形四萬俵以上可買戻と平助へ申聞、右殘金二萬千六百九十兩榮藏より受取、右之内にて同人調達金一萬兩之方へ元利返濟致し、右一萬七千俵分は手形引揚、此者所持之未著米手形共榮藏に爲取計、金九百九十兩餘差出、千二百俵分爲引揚、此者手元に有之外より買戻候委に申成、金子引去、其餘買上は可見合と、

品能平助へ申談、殘金同人へ差戻候後、臨時入用五千兩調達之儀談受候處、出來兼候に付半金調達致し、猶又右爲買戻候手形二萬千俵分榮藏へ相渡、一萬兩才覺爲致、平助へ差出、榮藏名宛之證文取之、右體調達金を致し候得共、申談手取候金子都合四萬二千二百兩餘は自己の返金仕送等に融通致候段潤澤之主意表裏反覆之取計、加之最前建白致其筋へ差出候書中へ陸奥守家來へ引合十萬俵買留置候旨申立候も、實は買留候儀には無之、是亦趣意引違、品能申立候儀共、旁右始末不屆に付存命に候得ば遠島、」

二十五日　九條家家士島田左近（龍章）　彥根藩士長野主膳（義言）ニ京都ノ狀況ヲ報ジ、江戸ノ情勢ヲ問フ。

〔九條家家士　島田左近書翰〕（○子爵澁澤榮一所藏本井伊家秘書集錄所載）

○五月二十五日（彥根藩士）長野主膳宛

島田龍章ゟ長野主膳に之書翰

態々以剪紙得御意候、先以　太守樣益御機嫌能被爲成御座恐悅至極奉存候、二ニ御當方無御別條被爲成候、御安慮可被下候、扨尊君此比御別條無、御着府被成候半と奉遠察、乍去御道中御急キ嘸々御草臥之段、察　思召候條　台命ニ御座候、猶委曲ヶ條書付ニ申上候、

京都ノ形勢

富小路敬直ノ進退

一彼（參議入道親王）○役者外ニ一ヶ條、

右二ヶ條ハ、實ニ不容易安危存亡之基源ニ付、實ニ此上及遲滯候てハ、不容易御次第ニ可及程之義モ不無之事も御座候ニ付、無覺束　思召候、其御趣意ハ、今度之　勅答、於關東ニ御治定濟相成候てハ、實ニ　勅意難相立　思召候ニ付、此比三四日前ゟ尋ニ遣し可申、度々　內勅被爲在、是非今一應　帝都へ御伺之上、調印且御治定可有之旨、再應押て被仰進樣抔、種々　內奏被致候諸卿有之、甚以御困惑千万之折柄、右二ヶ條、萬一跡廻りニ相成候てハ、實ニ何之所詮も無之次第ニ付、實ニ兩全之御趣意ニ相叶候樣之御良計ニハ、右二ヶ條、片時も早く不被仰越てハ、實ニ變事出來も難計、實ニ御心配被遊候、是非〳〵片時も早々二ヶ條被仰越候樣、御深密之第一ハ、此二ヶ條之外ニ出申間敷奉存候、

右條々、急々御取計可有御座候事被　仰出候、

一先達ゐ貴君御引取前後ニ、一寸御咄御座候　禁中御兒之事、幷千種（有文）少將殿事早々言上、段々取調候處、是又不一方御次第有之、右兩人共、○役者・久我（建通）・中山（忠能）・三條（實萬）抔へ之生タ手紙を被勤、尤御兒富小路（敬直）ハ甚敷、日々　君前へ罷出、甚以不宜次第多端有之候ニ付、則先達ゐ中、段々　殿下御考慮被遊、右兒之里方富小路（敬直）家へ、內々御說得被仰付、十八才迄御兒日々參　內之義ハ、先例も無之、且ハ內外取沙汰不宜次第も相聞候間、日參御兒御免

相願候樣、里方富小路家へ被仰付候處、今暫日參御兒不被免旨被仰出候、依之今ハ被遊方も無之旨ニ御座候間、何卒今度内々關東ゟ急々被仰進候、

二ヶ條之内に、

右御兒里方富小路十八才迄相成有之、先例モ無之、且内外取沙汰仕候不穩邊、於關東被爲聞召候御趣意ニ、御書加へ相成候樣被遊度、左候ハヽ、一時可然御取計方被爲在候間、此旨聢と御賢慮被爲在候樣言上、急々御取計可被下、何分此條ハ枝葉ニハ候得共、彼〇役者外ニ一ヶ條、右兩條ハ是非〳〵急々不被仰越てハ、實ニ變事出來難計御見込ニ御座候間、片時も早々御取計、否御報可被下候、

實ニ急々御取計可被下候、

一御上使御人體、御上京之日限、御發表相成候ハヽ、早々被仰聞可被下候、

一上御養ノ字御發表候ハヽ、是又御申聞可被下候、今以老中方迄ニ御發しニハ候ても、御分りニ不相成、御内發も無御座候哉、承り度奉存候、尤此義早々御發表方可然趣、御内命ニ御座候間、此旨言上可被下候、

一伏見奉行・京町奉行・御附武家衆其外模樣共、江戸表御内評御模樣、一々被仰聞可被下候、

朝彥親王ニ對スル批評

一此度之御使御遲滯相成候てハ、實ニ不宜趣ニ御座候間、此段ハ吳々前以被仰入度候間、速ニ御決着御取究可被遊旨、言上可被下候、

一諸侯方御所存御書付、追々御揃ニ相成候哉、且尾印（德川慶勝）之模樣承知仕度奉存候事、

一〇役者在南都ニて之不如法、篤と取調候處、先達テ申入候通り之次第ニ毛頭相違無之、京師粟印家（尊融親王家）來ニ承候ても能ク相分り申候、實ニ此宮ハ、不穩ヲ御好ミ、けしからぬ御行狀、末々無覺束、御氣ノ毒ニ存居候、

一第一御深密之御草稿御出來候ハヽ、片時も早急御遣し可被下候、必無間違早々御遣し可被下候、

一當方之草稿出來候ハヽ、早々差上可申候、

一御使御上京、臨機應變トハ乍申、　勅問可有之哉之御ヶ條ハ、此頃最中取調、日々夜々心配苦心、御賢察可被下候、

上意御苦心、御察可被下候、

一御上京之御使御對面其外共、万端如何樣ニも御都合能取計可申上候間、乍恐御安心、萬事無御遠慮、何モ角も前以被仰聞可被下候、

一前條度々書顯置候二ヶ條之義ハ、實ニ急々御取計無之てハ、何之變事ヲ生し候モ難計候

間、吳々無御如才御心配被遊候樣被仰出候、尤御上使モ御上京延引相成候テハ、是又不宜旨ニ御座候、何モ御實慮可被成下候、

九條尙忠ノ苦心

一此三四日前カハ、三條カハ中山・久我之兩人、粟印・左印・太鼓印（京都政事）抔、此度之御返答如何カ御治定相成候上ニ而、勅答ニ相成候テハ不相成候間、其御治定ハ決而相成不申旨、再應以

長野主膳ノ歸京ヲ慫慂ス

勅使關東へ可申入旨、昨廿三日被仰出候得共、

殿下カハ、其義ハ御先例モ無之義、旁御取計被成置候間、早急御使且御返答書、御內定有之候樣、尤二ヶ條被　仰越候共、御治定相成候上之御答御座候共、其跡々之混亂ハ決テ有之間敷、如何ニも無御差支、御心配御懇慮可被遊旨被仰出候條、御安慮可被遊旨、言上可被下候、

一貴君御條々御取調付キ次第、乍御苦勞御先ヘ急々御上京可被下候樣仕度、實ニ御上京無之而ハ、拙者只一人ニ而ハ、不足之廉も御座候段御憐察被下、尤此旨程能御聞上ニ相成候樣仕度奉願候、乍併不逆御用モ御座候ハヽ無是非次第ニ付、委敷御書付被下、御使御對顏之上、御直申上候テ、何も御聞入被成下候御儀ニ相成候事ニ候ハヽ、實ニ分骨碎身、急度心配仕候、仍テ條々言上ニ預り度、如斯ニ御座候、此密書御覽被成次第、早速御答可被下候、尤御覽後急度御火中可被下候、猶期後便之時候、恐々謹言、

五月廿五日當番

於役所　龍章謹書

長野義言君　足下

追加、亂筆不文、粗紙略封乎ニ御仁免可被下候、

〔長野主膳書翰〕○井伊家秘書集錄所載

○六月初旬カ島田左近宛

長野主膳カ島田ニ之文通

甚著之節、益御機嫌能被爲成恐悅奉存候、御當方ニも無御別條御勤仕之御事、御安意思召被成進可被下候、貴館益御安泰御勤務之條奉恐賀候、寔ニ平日ハ御無音之御事恐入被存候處、今般去晦日付之貴翰到著、乍例御懇命之次第深難有被存候、早速御報被申上度被存候へとも、方今御繁勤之上、內間御混雜之次第有之、御城御退出も、多ハ夜ニ入、御歸宅之後ハ、日夜諸大名之御逢等打續、夜分御睡眠之間モ無之位之次第ニ付、又候御意外之御無沙

汰ニ可相成、此段貴君へ迄、拙子より御斷申上置、猶方今關東之樣子も被聞食度旨被仰下候間、具ニ申上候樣被申付候、依之御内密之義共申上候間、達　御聽被下候上ハ、必他聞御秘置被下候樣奉願候、抑堀田備州殿御歸府之上、　天朝之御趣意被相伺候處、誠ニ御尤之御事恐入被存候義ニ付、先達ても達　御聽候通り、御役之翌日、諸大名惣登城被　仰出、各御存意御尋相成候處、御條約御指止可然之見込も更ニ無之、一統ニ洋外諸蠻之形勢、往古とハ違、天外ニ比隣之如く、航海實戰ニ馴候義ニ付、容易ニ開爭端候ゟも勝算無之間、此度條約之ケ條ハ御指免ニ相成、此上喰入不申樣、内間之御嚴制御建可然との見込ニて、大體出揃候へとも、尾張殿と水戸殿ハ、御條約通相成候てハ、御國體ニ拘り、一大事ニ候間、決ゟ御聞濟不相成樣、理ヲ盡し建議之御申立ニ付精々被縮、　天朝之御趣意相立候樣被成度思召ニて、上使も彼是延引相成候處、　西丸御養君一條ニ付、不容易内風聞有之、尤水府老上書之趣も、國家之爲義理を被盡候、中々此度鎖國之建法ヲ破、墨夷之望ヲ遂候、

名古屋藩主及水戸藩主ノ意見

諸大名ノ意見條約締結ニ傾ク

右跡紙ノ續目ゟ切レ紛失、

## 二十六日　權中納言四辻公績・同正親町實德・同三條西季知・參議八條隆祐・同日野資宗・同中院通富・同橋本實麗、連署シテ京都所司代本多忠民（美濃守○歸東不在中ノ京都警備ニ關シテ、意見書ヲ上ル。武家傳奏

本多忠民歸府ノ善後策如何

廣橋光成、諭シテ之ヲ郤ク。

〔權中納言四辻公績等七名連署建議書〕○子爵野宮定穀所藏本　野宮家書類所載

○五月二十六日武家傳奏廣橋光成へ

所司代參府之事申來候旨、傳承仕候、兼ゟ御當地御手薄ニ付、守衞大名名前被　仰出候間、其上ニて、致方も無之次第ニも候ゟ、右ニ付ゟて、參府中御警衞向、美濃守如何所置有之候哉、依存知次第ニ候故、何卒被　召止候樣相願度、一同心底ニハ候得共、最早御暇も被　仰出候上ゟ、致方も無之次第ニも候ゟ、右ニ付ゟて、參府中御警衞向、美濃守如何所置有之候哉、開食度　御沙汰、一同仁義願置候処、未從關東言上無之内、所司代參府之儀、此御時節柄、不被　開食度旨、被仰出候樣、相願度事、

五月廿六日

公績　實德　季知　隆祐　資宗

公卿中ノ同志建議書ヲ出ス

〔亞墨利加國人願立ニ付所存御尋幷雜誌〕〇橋本實麗手紀　伯爵橋本實誠所藏本

五月廿六日、壬(癸)子、晴、午斜、從四辻黄門、談度儀有之、可參上被示、參內、四五輩參上之処ニ、今度俄本多美濃守出府之儀、昨夜言上、卽來廿八日被下御暇候趣、平常迚茂、御警衛向、未手薄之所、墨夷一件中、殊更不虞之儲可有之筈ニ、其上小前之者ニハ候得共、伏見奉行出府中、町奉行・附武士共、此比一役、彌以不安心之間、右等申入、八條相公促之処、直參　朝示談之上、左之通書取、

所司代參府(出可然歟)之妻申來候旨、傳承仕候、兼而御當地御手薄ニ付、守衞大名名前被聞食度　御沙汰、一同ニ表(表)願置候處、未從關東言上無之內、所司代參府(出可然歟)之儀、此節時節柄、不依存知次第ニ候故、何卒被　召止候樣相願度、一同心底ニハ候得共、寂早御暇被仰出候上者、致方も無之次第ニも候歟、右ニ付而者、美濃(脫アラン)守如何所置有之候哉、被聞食度旨、被　仰出候樣、相願度存候事、

五月廿六日

公績
實德

六三四

通富
實麗

廣橋光成建議書ヲ處置ス

右、四辻・正親町兩人、武傳候所ニ出頭、被附之処、月番光成卿、於此事者、兩內覽御配慮有之候事故、難致落手之旨、強而被出候儀ニ候ハヽ、一應殿下　思召伺之上歟、且ハ直ニ御當職ニ可差出旨被示、依之一同示談、左候ハヽ先相止候旨、畢竟兩內覽思召同事ニ、承知之事欲示之処、寂早武傳退出之間、正親町黄門、廣橋亭ニ被向、一同承知之事被申入了、

季知
隆祐
資宗
通富
實麗

〔橋本實麗日記〕〇東京帝國大學所藏本

五月廿六日、庚子、晴、午斜參內、御献御用奉仕、岡崎侍從所司代、俄出府之由傳承之間、三五輩有示談事、別記、西斜退出、

〔久我建通日記〕〇宮內省圖書寮所藏本

五月廿七日、晴、當番德大寺、

一從三條家文通、所司代歸府ニ付、三公御相談有之、何とのヶ條申遣可然候へハ、從當役武

武家傳奏建議書ヲ却下ス

傳へ可申入、以狀被示候、〇中略、

一現任之公卿衆中ゟも、建白有之処、武傳被差返由承之、

二十七日　京都所司代本多忠民美濃守〇岡崎藩主　其歸東不在中ノ京都警備ニ關シ、彦根藩主井伊直弼掃部頭〇大老・小濱藩主酒井忠義若狹守・郡山藩主柳澤保德時之助・篠山藩主青山忠良下野守・淀藩主稻葉正邦長門守・膳所藩主本多康穰下總守・高槻藩主永井直輝飛驒守ニ令スル所アリ。

彦根藩等ニ京都警衛ヲ嚴達ス

〔京都所司代本多忠民達〕〇子爵野宮定穀所藏本野宮家書類所載

〇五月二十七日彦根藩主井伊直弼等へ

五月廿七日、所司代ヨリ下知云々、如左、

井伊掃部頭殿（直弼、彦根藩主）　酒井若狹守殿（忠義、小濱藩主）　松平時之助殿（柳澤保德、郡山藩主）

家來呼出、壹通ツヽ相渡、

青山下野守殿（忠良、篠山藩主）　稻葉長門守殿（正邦、淀藩主）　本多下總守殿（康穰、膳所藩主）

永井飛驒守殿（直輝、高槻藩主）

家來之内呼出、壹通相渡、〇野宮家文書

此度我等御用之儀有之、參府候間、在府中、當表御警衛向之儀入念、自然近海ニ異船渡來候

所司代ヨリ町奉行へ達

ゝ、諸事町奉行ニ相伺、差圖可請候、

五月

〔京都所司代本多忠民通達〕〇野宮家文書所載

〇五月二十七日京都町奉行へ

五月廿七日、所司代ヨリ下知云々、如左、〇野宮家文書

町奉行へ

井伊掃部頭

酒井若狹守

松平時之助

此度自分御用之儀有之、參府候間、在府中、當表御警衛向之儀入念、自然近海ニ異船渡來候

ゝ、諸事御自分ニ相伺、差圖可請旨、右家來ニ申渡置候間、可被得其意候、

五月

町奉行へ

青山下野守

（亞墨利加國人願立ニ付所存御尋幷雜誌）

此度自分御用之儀有之、參府候間、在府中、當表御警衛向之儀入念、自然近海ニ異船渡來候
ゝ、諸事御自分ニ相伺、差圖可請旨、右家來ニ申渡置候間、可被得其意候、
五月
稲葉長門守
本多下總守
永井飛驒守

〔亞墨利加國人願立ニ付所存御尋幷雜誌〕○橋本實麗手記 伯爵橋本實潔所藏本

（亞墨利加國人願立ニ付所存御尋幷雜誌）

五月卅日、丙辰、晴、午後白雨、四辻黄門（公績）（五月二十六日）被來、過日申談候御守警振、從美濃守差出候書取、
昨日彼卿ニ廣橋ヨリ被爲見由ニ而、則寫左之通、
（朱書）「井伊掃部頭殿
酒井若狹守
松平時之助
家來呼出、一通ツヽ、相渡、
青山下野守
本多下總守
稲葉長門守
永井飛驒守
家來之内呼出、一通相渡、」
○京都所司代本多忠民達・同通達、上ニ掲グルヲ以テ、之ヲ略ス。

幕府、中山道和田・鹽尻・福島・上松・須原・野尻・妻籠・馬籠宿ノ夫馬賃錢割增ノ五箇年延期ヲ令ス。尋デ、下諏訪・赤坂二宿、亦同ジ。



〔老中達〕○續德川實紀所收濃恭院殿御實紀所載

○五月二十七日大目付へ

五月廿七日、中山道人馬賃錢割增、一、（脇坂安宅、老中）中務大輔殿、大目付ニ、○濃恭院殿御實紀
五月廿八日、御案詞方達、中務大輔樣御達之御書付寫壹通差出、左之通、○公儀被仰出留
（朱書）「安政五年五月廿八日、」三奉行ニ、○德川慕府書類關留
五月晦日、○中略、本庄（道貫、若年寄）安藝守御渡御書付、○安政年錄

中山道和田宿、外七ケ宿困窮ニ付、人馬賃錢割增、左之通可請取旨申渡、

去る丑六月ゟ、當午
五月迄、中五ケ年之間、
人馬賃錢、都合四割
五分增申付置候處、尙又
當午六月ゟ、來ル亥
五月迄、中五ケ年之間、
是迄之通、四割五分增、

中山道
和田宿
鹽尻宿
福嶋宿
上松宿
須原宿
野尻宿
妻籠宿
馬籠宿外七ケ宿ニ達

右割増錢申渡候間、可被得其意候、

右之趣、向々に可被相觸候、

午五月

馬籠宿

（公儀被仰出留　德川幕府書類觸留　公儀御觸留　鴨方藩記錄　安政年錄）

〔大目付廻達〕○侯爵池田仲博所藏本　公儀御觸留所載

○五月晦日福井藩等江戸留守居へ

五月晦日、大御目付中ゟ之御廻狀、阿州樣衆ゟ到來ニ付、津山樣衆に致順達ス、

脇坂中務大輔殿御渡候御書付寫壹通相達候間、被得其意、無遲滯順達、留より池田播磨守（頼方、大目付）方に可被相返候、以上、

五月晦日

松平越前守殿（慶永、福井藩主）

松平阿波守殿（蜂須賀齊裕、德島藩主）

松平薩摩守殿（島津齊彬、鹿兒島藩主）

松平三河守殿（慶倫、津山藩主）

松平相摸守殿（池田慶德、鳥取藩主）

大目付

諸大名へ通達

松平兵部大輔殿（慶永、明石藩主）

右留守居

〔大目付廻達〕○子爵池田政保所藏本　鴨方藩記錄所載

○五月晦日鴨方藩等江戸留守居へ

五月晦日、一、御隣樣衆より、大目付觸到來、松前樣衆に順達、

脇坂中務大輔殿御渡候御書付寫壹通相達候間、被得其意、無遲滯順達、從留田村伊豫守方（顯彰、大目付）に可被相返候、以上、

五月晦日

御例通、

大目付

〔鳥取藩江戸留守居日記〕○侯爵池田仲博所藏本

五月晦日、

一大御目付中ゟ之御達書到來、○中略、

但〻、中山道和田宿、外七ヶ宿人馬御達〻之、

〔久留米藩御內證記錄〕○伯爵有馬頼寧所藏本

六月四日、晴、○中略、

一中山道和田宿、外七ヶ宿人馬賃錢割增之儀ニ付、別紙　公儀御觸書之趣、御家中之面々末々迄、無洩落相觸候樣、諸頭中ゟ可申聞旨、岸相摸より渡瀨平太夫ゟ申渡之、

〔老中達〕○内閣文庫所藏本安政年錄所載

○五月大目付へ

五月晦日、○中略、本庄安藝守御渡御書付、○安政年錄

中山道下諏訪・赤坂兩宿、困窮ニ付、人馬賃錢割增、左之通可請取旨申渡、

去ル丑七月ゟ、當午六月迄、中五ヶ年之間、人馬賃錢、都合四割五分增申付置候處、猶又當午七月ゟ來ル亥六月迄、中五ヶ年之間、是迄之通、四割五分增、

中山道
下諏訪宿
赤坂宿

右割增錢申渡候間、可被得其意候、

右之趣、向々ゟ可被相觸候、

午五月

〔大目付廻達〕○公儀御觸留所載

○六月三日福井藩等江戸留守居へ

六月三日、大御目付中ゟ之御達書、阿州樣ゟ到來ニ付、津山樣に致順達ス、

（公儀御觸留　德川幕府書類觸留）



脇坂中務大輔殿御渡候御書付寫壹通相達候間、被得其意、無遲滯順達、留ゟ田村伊豫守方ゟ可被相返候、以上、

（上ニ揭グル者中達ヲ指ス）

六月三日

松平越前守殿
松平阿波守殿
松平薩摩守殿
松平三河守殿（池田慶德）
御
松平兵部大輔殿

大目付
右留守居

〔鳥取藩江戸留守居日記〕○侯爵池田仲博所藏本

六月三日、

一大御目付中ゟ御達書到來、○中略、

但シ、中山道人馬割增之御達ノ、

〔久留米藩〕御內證記錄○伯爵有馬頴寧所藏本

安政五年五月二十七日

六月五日、晴、〇中略、

一中山道下諏訪・赤坂兩宿、人馬賃錢割增之儀ニ付、別紙　公儀御觸書之趣、御家中之面々末々迄、無洩落相觸候樣、諸頭中ヨリ可申聞旨、岸相摸より渡瀨平太夫ヨリ申渡之、

〔甲府御用日記〕〇甲府勤番坂田與一郎日記　坂田季吉所藏本

六月七日、晴天、

一中山道和田宿、外九ヶ宿困窮ニ付、人馬賃錢割增御書付壹通、柿沼勘右衞門殿を以、御渡被成候間、町中ヨリ觸之、

高知藩主山内豐信（土佐守）老中堀田正睦（備中守）ヲ訪ヒ、幕府ノ情勢ヲ質シ、之ヲ宇和島藩主伊達宗城（遠江守）・福井藩主松平慶永（越前守）ニ報ズ。

〔山内豐信書翰〕〇侯爵伊達宗彰所藏本

〇五月二十七日伊達宗城宛

先日ハ良晤、爾來御清安被成御座候哉、先以奉欣然候、扨　西城建儲之一條、俄然樣子相變候趣、今日櫻閑（堀田正睦）ヨリ逢候處、以ノ外ニ困る景色、長歎息之外無之、大ニ失望候、僕昨日ヨリ腹痛、明日ハ登城難相調、不得止不參ニ御座候、因テ足下御退出ヨリ、御杜撰奉希候、萬縷御話シ申上度、先ハ右用事而已、如此御坐候、草々不盡、



繼嗣問題ニ就キ形勢ノ一變

伊達宗城松平慶永山内豐信往來

山内豐信堀田正睦ヲ訪フ

念七夜

藍山君盟臺

又曰、今日彦根ノ應接、如何、

「藍山盟臺（封筒）　容堂拜　首夏念七夜、燈下、」

乞親展

〔伊達宗城御手留日記〕〇侯爵伊達宗彰所藏本

五月廿七日、晴、七十三、夕八十、

一六半時、目覺、朝飯二ツ、一四時過出坐、越前・土州ヨリ（騎馬隊）參り、返事遣ス、一老若目見、用事、一かきものする、（騎馬隊）一八時過、きざはしヨリ庭ヲ見る、一そふかう一ろふ庭ヲ切申付候、皆々きざはしヨリ見物する、一七半時すみ、入湯、〇中略、一五半時出坐、表へ寐、

〔山内豐信書翰〕〇町夢紀事所藏

〇五月二十七日松平慶永宛

（五月二十七日）一、此日、土佐守殿ヨリ御書通あり、如左、

一書座下ニ差出申候、先々御清適欣喜不過之奉存候、是非私社稷之爲ニ候、然ハ、（井伊直弼）愛牛先生へ參候ハ、僕少々考御坐候ヘバ、先ツ差止申候、今夕櫻閑ニ參り、猶廣堂の光景、且愛牛・

（松平忠固）桐閣之近狀篤と承知仕置、其上ニ而、廿九日・卅日之内、愛牛・桐閣之内へ參、先日云々之義可申述と存候、尤櫻閣今夕ハ差支無御坐候趣、家來迄申越候故、退城ゟ直樣可參と存候、今夕之樣子ハ、明日又々奉申上候、櫻閣申口ニ而も、又兩先生にも應接之仕樣も御座候と存候、久世（廣周）ハ彌長病と承候、三日目ニ病名替候趣、例ハ七日目ニ、譬は風邪とか、腹痛とかニ相成候趣、久世はよく〳〵の急變と存し候、羽柴にはあらて、荒川戸の藤也、近々落花ニ及可申候、是も愉快なれど、瑣々タル一と、唯願桐ノ落花耳、（僕吉兆を案シ出申候、桐ハ則藤吉、秀吉之紋、此度藤吉退ケラレ候得ハ、桐ハ自然退之道理ナルベシ、）

○下田滯留之墨人出帆ハ、果ゐ謬傳に決申候、

○諸（所）司代之御用召、老中ニゐも無之、又墨夷御取扱之御使にても無之、諸司代止ルトカ承申候如何、

○御作、妄ニ筆削仕差出申候、失敬々々、莫逆中之莫逆故、御一笑ニ備申候、

○小出修理（秀賢）ニ遣候文章出來候故、備乙覽候、御一閱後、御返投可被下候、是又無御隔意、斧正奉冀候、未夕遣シハ致不申候、少シ懸念仕候こと御坐候、子細ハ若シ漏泄仕候ゐハ、修理之爲ニ相成不申候、折角之有志輩、殊ニ岩風憲なども拔擢仕度と存候所、僕之文書などニゐ、障候ゐハ氣の毒千萬ニ御座候、只今俗世界中、入ラヌ所に迄も心を用不申候ゐハ、意外ニ害を生申候、噫恐ロシノ浮世やナ、あなかしこ、

山内豐信幕吏ノ更迭ヲ憂フ

〔山内豐信書翰〕（叶夢紀事所載）

○五月二十八日松平慶永宛

（五月二十八日）一、此夕、土佐殿ゟ又御内書を被造たり、如左、

前略、昨夕櫻閣ニ參長談、唯發浩歎而已、儲君之一條も、最早蘇秦張儀出候ゐも、中〳〵三寸之舌にゐハ難及、桐姦臣之誤國、是大不忠、不堪切齒、血淚々々、

○櫻ヘ僕尋候ハ、愛牛・桐閣之近狀如何、櫻對曰、愛牛ハ何分固陋ニゐ困る之、桐ハ因循と申候故、僕夫ハ得其意不申候、既ニ去臘大變革之上、中興云々被仰出候、其節桐閣も御同列ニゐ御座候、至今日因循と申候處、夫ハ氣遣無之、是非變革ハ十分ニ不參とも、此儀ハ無間違被仰出可申候、左樣ニ幕府ニゐうそをつきてはならぬと被申候、

○僕又曰、先日ハ御役人數輩替候、（御旨、六月廿〇日付ニて長崎、六月廿〇日付ニて土丹・鵜民）此兩輩抔、勿論不才ニゐ、不足惜樣ニハ御座候得共、胸中之赤心ニ至候ゐ、古人にも不慚者ニ御坐候、此節（廟堂の勢、忠を退、邪を進ル之兆、既ニあらはれたる樣ニ奉存候、此勢ニゐハ（日付岩瀨忠震）岩肥も不遠落職無疑存候、只今岩肥落職ニ成候ゐは、墨人應接出來申間鋪、是非來年金川御開迄は、足下ゟ彌縫被成候ゐで

山内豐信ノ井伊直弼評

那覇出帆鹿兒島著ノ屆

も、落職に至不申樣御周旋第一ニ御座候、此位之一と御周旋出來不申あハ、不相成と申候所、夫ハ尤左樣ニ、實ニ此勢ニあハ言語を塞候とて、櫻も大息被致申候、

○愛牛・桐閣に參、京師樣子申候あハ如何と尋候處、最早其甲斐も有間鋪、却あ激怒致候あハ不宜と申候、僕も實ハ儲君之決定ニ力落、愛牛・桐閣兩先生にハ參候勢無之、愛牛ハ固陋ながら、愚人故、木偶人とさへ存候へハ腹も立不申候、桐閣ハ國賊と存候と、僕腹之蟲承知不仕、萬一接謦咳候時、又暴論抔ニ及候あハ不都合故、今暫時之處、兩先生へは參不申候、是等朔日萬々奉申上候也、

琉球中山王使伊江王子（朝直○尙灝四男健）等、參府ノ途次鹿兒島ニ抵ル。尋デ、其東上ヲ停ム。○九月十八日、鹿兒島ヲ發シ歸島ス。

〔琉球中山王使伊江王子屆書〕○新納久仰日記所載

○五月二十七日鹿兒島藩へ

口上

私事、江戸へノ正使並兼務之使者被申付、今月十九日、那覇川出帆、同廿二日、山川參着、陸地差越、今日御當地上著仕候、先以讃議官、此段申上候、以上、

五月廿七日　伊江王子

國事ニヨリ琉球人ノ參府如何トノ憂慮

〔島津齊彬直書〕○公爵島津忠重所藏本島津齊彬公文書所載

○四月十八日早川五郎兵衞へ

一筆申入候、愈無事珍重存候、然者、別紙寫之通、（所見ナシ）才輔（原田）ゟ申來候間、定あ堀田（正睦、老中）も歸府、大評議と被存候、何分當時手强き御返事ゟ誠ニ後患之基ひ、不容易事と存申候、天神下（松平忠固、老中）其外之樣子、早々可申越候、萬一御破談之節者、何時爭亂可差起も難計候間、此上勅命ニあ者致ゐさ無之候間、自國之固メ第一ニあ、手後ゟニ相成候あて不可然事ゆへ、臺場・大砲其外手當一日も早く取計候外て無之と存候間、追々申談シ手當可致治定ニ候、○中略、

一彌御破談之樣子ニあて、琉人參府如何可相成哉、何分不容易時節到來と存申候、彌六ケしき事ニ候ハヽ、江戸定式入用等別して取締第一まて、此節て中々人の氣を兼候あ、體能き方まてゟ不相濟と存候間、其時ゟ大奧入用等其外十分ニ減少可取計候、此段藤五郎（三原義禮）申談、極内心得可罷在候、先て要用早々申達候、以上、

四月十八日

猶々○中略、

用事

五郎兵衞（兼ヶ）に

○本書ノ全文ハ、之ヲ四月十三日ノ條ニ、收錄ス。

〔島津齊彬書翰〕○島津齊彬公文書所載

○五月二十八日 宇和島藩主 伊達宗城宛

○上略、

一琉人も、追々上國仕候、當年も、雨多く欝々數事ニ御座候、十八日ゟ今廿八日迄、降續申候、先ゟ要用旁可申上如斯ニ御座候、恐惶謹言、

五月廿八日

齊彬拜

天下仰望藍山賢公閣下

猶々、○下略、

○本書ノ全文ハ、之ヲ四月三日ノ條ニ、收錄ス。

〔島津齊彬直書〕○島津齊彬公文書所載

○五月二十八日早川五郎兵衞へ

○上略、

一大元丸代金、最早相下り候哉、當地も琉人方其外ニ而案外之事有之、大阪ニ又々申遣候、誠ニ困り入申候、來年ゟ詮立候節儉と存候へ共、當り障有之候間、十分ニ難申付、心配ニ存申候、



○中略、

一琉人王子も、最早上國いたし候、唐國賊勢盛ニ候よし、接貢船便ゟ申來候、○中略、

一○中略、先ゟ思ひ出候分申遣候、以上、

五月廿八日町便より

用事

五郎兵衞ニ

○本書ノ全文ハ、之ヲ五月二十八日ノ條ニ、收錄ス。

〔島津齊彬直書〕○島津齊彬公文書所載

○五月二十九日島津豐後（久寶）へ

書面相達申候、○中略、何分不容易時節と存候、扨琉人も、正副使致上着候、樂正之分、未タ不致到着候、○中略、先ゟ先日之返事迄、早々申入候、以上、

五月廿九日

尙々、○下略、

○本書ノ全文ハ、之ヲ五月二十八日ノ條ニ、收錄ス。

〔島津齊彬直書〕○島津齊彬公文書所載

安政五年五月二十七日

琉球使大半鹿兒島著

○五月二十九日早川五郎兵衞へ

一琉人も、最早大半致上國候、○中略、琉球ニ滯留之佛人申候ニも、唐國も今來年之內ニも、北京ニ英佛之兩館可致出來樣子と申越候との事ニ御座候、○中略、

五月廿九日

用事

副使等見廻

○本書ノ全文ハ、之ヲ五月二十八日ノ條ニ、收錄ス。

五郎兵衞ニ

〔新納久仰日記〕○公爵島津忠重所藏本

五月廿七日、晴天、○中略、

一今夜入夜、左之通屆有之候事、（上ニ揭ク）

○中略、

六月八日、七ツ後、伊江王子初、副使與那原親方・讚議官奧武親雲上、聞役新納太郎左衞門、同伴ニテ見廻有之、例之通リ使者之間頭迄出迎、直ニ引入、其外ハ順々著座有之候ニ付、致挨拶、茶・煙草盆・菓子等差出シ、時宜見合セ、吸物・肴等三通、盃二返ハ掛盃ニテ、三度目致取替、夫限リニテ出シ物都テ相下ケ候處、無程被罷立候間、最初出迎之通、送リイタシ候、其以下之琉人ハ、使者之間邊ニ引入リ、茶共差出シ候ヘ、且、今日進物左之通、





覺

| | | |
|---|---|---|
| 金御扇子 | 一箱 | |
| 花入 | 一 | |
| 紺地島細上布 | 一端 | |
| 絲綸 | 一端 | |
| 花毛氈 | 二枚 | |
| 鹽豚 | 一肢 | |
| 燒酎砧 | 一雙 | |

以上、

覺

| | | |
|---|---|---|
| 御扇子 | 一箱 | |
| 十錦太碗 | 十 | |
| 島紬 | 一端 | |
| 紺地島細上布 | 一端 | |

安政五年五月二十七日

伊江王子

鹽豚　一重
燒酎砧　一雙
以上、

覺

御扇子　一箱
藤御菓子皿　十
靶子　一端
毛氈　二枚
鹽豚　一重
燒酎砧　一雙
以上、

○中略、

六月十四日、出勤每之通、○中略、



奥武親雲上

與那原親方

一琉人與那原親方事ハ、此ノ內上國之節、以來音信通隔可致旨、申替シ置キ候ニ付、此節上國ニ茂、別段土產トシテ、拙者父子へ、左之通贈リ有之候也、

覺

御扇子　一箱
御吸物椀　沈金　十
東道盆蒔繪　一
紺地島細上布　一端
紺島細上布　一端
水色絲綸　一端
花毬毯　一枚
以上、

一次郎四郎へ左之通、

覺

御扇子　一箱



與那原親方

蓋茶椀 彩色　十
紺地島細上布　一端
山東紬　一端
白唐紙　一帖
以上、

與那原親方

○中略、
七月六日、七ツ後、與那原親方別段内證ニテ見廻有之候間、拙者父子致面會候、暫時罷在歸リ之、

○中略、
七月九日、晴天、南風、今朝五ツ過出勤、今日王子始參府之琉人、初テ登城、御目見被仰付候間、右之通ナリ、四ツ打出シ、琉球館出立有之手都合イタシ置候ニ付、右之時刻ニ、大目付以上、（マヽ）立之前ニ參リ、御屏風之上ヨリ致見物候、琉人登城相揃候節、杉ノ間ニテ、伯耆殿（島津久福）・拙者一所ニ、王子ヘ面會致挨拶候、九ツ打、直ニ御對面所ヘ御出座、王子始都テ

琉球使者初メテ登城ス

御目見被仰付候間、拙者御先立相勤候、御引入リ後、於敷舞臺謁御家老、王子以下都テ宰相樣江之御祝儀等有之、其後、王子以下退散、八ツ前ニテ候、拙者八ツ退出ヨリ、二之丸調練ニ罷出候、○中略、
一今日、王子始一同見廻、且、贈リ物等多ク有之、○中略、
七月十一日、○中略、
一今日モ終日東風、○中略、
一琉人ヨリ到來之品々之内、伊地知仁兵衞江、當年琉球掛リニ付、紺地島細上布壹反、毛セン壹枚、練蕉布德之島織壹反、氷砂糖一重、泡盛一瓶取合、今日遣シ候事、
○中略、
七月十八日、○中略、
一今日、王子始詰合琉人並ニ著座門首以下、諸士諸組與力迄、御太切之伺御機嫌有之、○中略、
七月十九日、今朝、伯耆殿出立ニ付、琉人贈リ品之内、扇子一箱、火爐一ツ大形、藤緣菓子皿十、並ニ岩山八郎太ヘモ扇子一箱、紺地島細上布一反、金子二百疋、取リ合セ差遣シ候事、
一伯耆殿在旅中、地頭所志布志、拙者預リ候事、

王子等齊彬ノ病氣見舞ヲナス

琉球使參府延期ノ議

○中略、

七月二十日、五ツ過出勤、○中略、

一今日御逝去之御弘ニ付、極々急飛脚、海陸二手差立候ニ付、段々問合ハ無申迄モ、別段私ノ問合モ、豊後殿（島津久寛）・永井休之丞江差越シ候事、

○中略、

別紙、

御用筋申上越候ニ付、一筆啓上候、○中略、

一琉人參府之儀モ、此節之御變事ニ付テハ、兎角被差延候外有御座間敷、何事モ當惑之至、此儀ハ其元ニテ

公邊御聞合之上ニテ、御都合能貴樣ニ御取扱可相成奉存候、然トモ、何モ宜敷樣御心添御賴申上候、

右者、今日御弘ニテ、極々急飛脚差立申候間、旁荒增申上越候、○中略、

七月廿日　新納駿河

永井休之丞殿

一豊後殿へ、前文之通リ、同意之問合差越候ヘトモ、大同小異故略ス、





將軍薨去

琉球使節參府延期ノ議

○中略、

七月二十五日、江戸去ル三日被差立候急キ飛脚、今朝五ツ時分到着、且又去ル九日被差立候極々急飛脚、五ツ半時分到着、問合數通相達シ候趣ハ、夜前到來相成居候、

公方樣御不例被遊御座候處、御內實ハ去ル六日夕七ツ半三部（ヶ）廻リ、御事切レ被遊候段、極御內々申來候テ、誠ニ御當時柄天下之大變カト奉驚入次第ニ、

○中略、

八月朔日、今曉町便到著、先月十四日江戸被差立候事ニ、御用筋ハ第一、

公邊御事多ニ付、琉人立被召延トノ趣キ申來リ、其外段々御內用之問合ナリ、右之御事多ハ、公邊御逝去之譯ニテ候ニ、

○中略、

八月十一日、○中略、

一八ツ後、伊江王子並ニ副使與那原親方・讚議官奧武親雲上見廻有之候、全無音サラヘノ由ニ、仍テ茶・煙草盆・茶菓子一通差出候、暫時ニテ被歸候、

○中略、

八月十七日、當分上國之與那原親方ハ、別段通信可致旨申替シ置候ニ付、今日爲土產、家內

中へ、左之通リ贈リ有之候、

覺

一御手拭　一筋

一錫御燒鍋　一七置十七二

一紕檜垣紗綾　一端

右、駿河樣御內室樣へ、

一紗團羽　一本

一石之香合　一組香餅入付

一桃紅繪垣紗綾　一端

右、次郎四郎樣御內室樣江、

一紗團羽　一本

一紕花紗綾　一端

一御細工物　一包玉指カ子三角櫛一作リ花一匂袋二

右、駿河樣御娘樣へ、

一白羽御扇子　一箱



一御硯箱　一

一御細工物　一包印石一通提鏡一面栖拂一

右、彥熊樣へ、

一白羽御扇子　一箱

一不人　一

一御細工物　一包提鏡一面香提一フリ〳〵二

右、萬太郎樣へ、

八月十七日　與那原親方

○中略、

八月二十二日、七ツ後、伊江王子初、與那原・嘉味田、聞役太郎左衞門同伴ニテ、內意事有之被參候テ、暫時ニテ歸リ之、

○中略、

八月二十三日、○中略、

一今日、伊江王子始、琉人共上國ニ付テ見廻リ、且贈物有之候ヘトモ、定式故、委細別帳ニ記シ置候事、

○中略、

八月二十五日、○中略、

一今日、與那原親方ヨリ、當春便此方ヨリ琉球へ贈リ物イタシ候爲返禮、左之品々送リ有之候、

覺

御扇子　一箱
御茶碗　十
御茶家　一
島紬　一反、

以上、

○中略、

八月晦日、○中略、

一今日、伊江王子ヨリ、橘餅並ニ甘物二重・萬蜜漬一壺、内證ヨリ之尋トシテ贈リ有之候事、



## 與那原親方

○中略、

九月七日、伊江王子始、與那原・奥武ヨリ、安否爲尋、氷砂糖・白砂糖等、一籠ツヽ、贈リ有之候事、

○中略、

九月十一日、○中略、

一伊江王子ヨリ館内へ、今日招請之儀、先日太郎左衛門ヲ以承候得共、御用多ニ付、斷申入候處、今日則玄喚迄見廻ニテ、左之通贈リ物等有之候事、

覺

大花入　一
朱塗沈金菓子皿　十
彩色蓋茶碗　十
錫燒鍋　二
朱塗堆錦重箱 甘物入付　一組
縮緬 紅白　二巻
羇子 有天青　二端

安政五年五月二十七日

燒酎　壹壺

以上、

琉球使招致餞別ノコト

○中略、

九月十五日、○中略、今日ヨリ段々手當、且餞別品取仕立方等、大取込ミイタシ、今晩モ取込ミ、八ツ過寢候事、

一明十六日、伊江王子始相招候筈ニ付、今日ヨリ段々手當、且餞別品取仕立方等、大取込ミイタシ、今晩モ取込ミ、八ツ過寢候事、

九月十六日、晴天、別勤ニ賴ミ置、出勤不致、今朝ヨリ琉人へ餞別品取立方イタシ、晝時分、王子並讀議官奧武親雲上始、以下付役貳拾貳人へ、例之通リ遣シ候、左候テ、與那原親方ハ別段通信之事候得ハ、此方家內中江モ、段々贈リ物モ有之候ニ付、此節返シ品モ、相應不致候テ不叶事故、今日迄ハ不相調候事、

一七ツ後ヨリ、伊江王子始、與那原親方・嘉味田親方・奧武親雲上、聞役新納太郎左衞門列立候テ被參、左候テ、夜入五ツ前比被歸候事、尤今日ハ王子へ申達御用有之、右之席ニ引留候間、會釋ハ輕クイタシ候事、

獻立左之通、

一床　龍虎畫二幅對、生花

伊江王子

六六四

一茶

一煙草盆

一茶菓子　求肥アリ、糖

時分見合、

一吸物　スマシ鯛品々

中皿　小作鯛品々

猪口イリ酒

掛盃

一銚子二返濟、

一挾肴　スルメコン布

一盃三ツ重

一取替シ相濟、

次郎四郎
志岐藤兵衞
蓑田傳兵衞

六六五

右三人出會挨拶有之、則主居ニ著座、

一吸物
　藻魚
　胡麻トウフ
　拔茸

一硯蓋　一面大、
　盃相立、

駿河初、王子へ遣シ、夫ヨリ次郎四郎・藤兵衛・傳兵衛等取替イタシ候、且又用賴林仲之丞事ハ、王子付用達ニテ、江戸へ差越筈ニ付、王子上帆涯ヨリ、館内へモ毎日差越、致用達候事ニ付、是モ出會、盃之取替トモイタシ候事、

一吸物　大平雉子モトキ品々
一鉢　釣リ鯛差身品々
一硯ぬる　一面中程
一丼　三ツ　うあき樺燒　庭鳥ミソ煮



魚類

膳部

皿
　小作鯛　ツミ入
　ナマス　松露
　品々　小蕪

小皿
　漬物
　品々

飯

糸目
　梅干鹽
　肉掛

二

長皿
　平　煎海鼠
　鹽フリ燒
　汁　ヒケ鯛　青昆布
　小鯛

安政五年五月二十七日

湯

菓子 杢目カン四切 松風二ツツヽ

薄茶

以上、

供廻リヘ、左之通、

吸物一通リ、

硯ふゐ一面大

丼 三ツ 肴色々

五ツ組メシ

又末廻リ之供ヘ、

大鉢ニ盛合セ肴並

數之子、丼トモ取合、

一王子並ニ親方ヘ、飯後手渡シ品、左之通、

煙草 一箱 十二合入

手助 一箱 二掛入



小菊紙 二束

外ニ

團羽壹本

右ハ、近比磯ニテ、拙者拜領仕候御品ニ付、別段ニ致包方、其段申理リ遣シ候事、

右之通、王子ヘ、

煙草 一箱ツヽ 六合入

煙具 一箱ツヽ 二組入

小菊紙 二束ツヽ

外ニ

團羽壹本ツヽ、

前條同斷之御品、

右之通、

與那原親方

嘉味田親方 ヘ、

奥武親雲上

繪半切　一箱 小
手助　一箱 一掛入
小菊紙　二束
右之通、
新納太郎左衞門へ、

一王子並親方等、進物左之通、
氷砂糖　一籠
燒酎砧　一雙
王子ヨリ、
太白砂糖　一籠ツヽ
燒酎砧　一雙ツヽ
與那原親方
嘉味田親方　ヨリ、
白砂糖　一籠
燒酎　一瓶



奥武親雲上ヨリ、
肴　一折
新納太郎左衞門ヨリ、
右之通リ互ニ取リ遣リイタシ、此方主居ニハ前文之通、藤兵衞・傳兵衞等相賴ミ、内證世話人ハ折田善庵、並ニ用賴等ニテ候ヽ、
一今夕方、江戸先月晦日被差立候飛脚到著、御用封相達シ候ニ付、王子歸リ後、傳兵衞在合致開封、少々申談共イタシ候事ヽ、
一おいつゐニモ、八ツ前ヨリ御出被成、御加勢旁ニテ、夜入四ツ時分、御歸リ被成候事、
一九月十七日、與那原親方へモ、餞別品取立相揃候ニ付、差遣シ候事、
但、
昨朝、王子へ遣シ候品々モ、此所へ留置ク、
一扇子　一箱 五本入繰足
一中奉書類　一束
一白麻　五十帖
一晒布　一疋 代銀百目餘

一鰹節　二連
右、王子表向、
一蠟燭　三百挺　箱入
一葉煙草　指宿　二十斤
一吸物碗　十　箱入
一硯蓋　一　箱入
一島縮緬　一反　代銀拾弐貫文目位
右、王子へ内證ヨリ、
一扇子　一箱　五本入
一白麻　三十帖
一杉原紙　一束
一晒布　一疋　代百目餘
一鰹節　一連
右、與那原親方へ表向、
一蠟燭　二百挺　箱入



一煙草　指宿　十五斤
一茶壺　都城　壹箱　二ツ入
一肥前蓋物　一箱入
一丁子風呂　一箱入
一團扇　十五
一大花入　竹細工　一束
一八丈島　一疋
一素麪　一連
右、與武親雲上へ表向、
一扇子　一箱　三本入
一白麻　二十帖
右、森山親雲上へ、
一扇子　一箱ツヽ、二本入
一白麻　十帖ツヽ、
右、

屋富祖親雲上
眞境石親雲上
眞喜屋親雲上
田里親雲上
田石親雲上
富村親雲上
仲嶺親雲上
瀨高親雲上
田島親雲上
豐見城親雲上
平良親雲上
安慶石親雲上
知念親雲上
座間見里之子
幸池里主
宜野灣里之子
伊志嶺里之子
大宜見里之子
譜久村里之子
和宇慶親雲上
桃原親雲上

右之人數表向、

一次郎四郎並ニ家內ヨリ、王子並ニ與那原等へ左之通、

一扇子　一箱　五本入繰足
一丁子風呂　一箱入
一小奉書紙　一束
一穗北紙　三十帖
一蠟燭　二百挺　箱入
一素麪　一箱　關百把入
一鰊鯑　一箱　十斤入

安政五年五月二十七日

安政五年五月二十七日

右、王子へ、

一扇子　一箱 五本入

一煙草　二箱 十二合入

一硯蓋　一箱入

一水色布　二反 代百目餘

一杉原紙　一束

一穗北紙　三十帖

一鰊鯑　一箱 十斤入

右、與那原親方へ、

一扇子　一箱 五本入

一丁子風呂　一箱入

一煙草　一箱 十二合入

一杉原紙　一束

一鰊鯑　一箱 十斤入

右、奥武親雲上江、



右三行、次郎四郎ヨリ、

一ゑま縮緬　二ゑん

一たはこ　一たゑ 巻煙草百

一繪たんきり　二たゑ 小振り

一くすしき　一黒ぬり蒔繪

一ゑぞおいを　二十

一さいくもの　ゑふ〳〵

右

駿河内室

次郎四郎内室

相中ヨリ、

一眞おう形付　三ゑん

一手きん

一さけ物

一ちいくもの

安政五年五月二十七日

一うちゟ

右、子供三人、

相中ゟ、

右二行、與那原親方へ、

右之通リ取立、覺書等相調、差贈リ候事、

一王子始、一同滯在中、贈リ物左之通、

（缺行マヽ）

九月十八日、早朝、王子始、與那原・奥武等、今日乘船ニテ歸帆ニ付、暇乞トシテ見廻リ有之候間、會面イタシ、茶・タバコ盆・菓子差シ出シ、次郎四郎ニモ面會イタシ候、暫時ニテ被飯候事、

一今日出勤八ツ退出、夫ヨリ周防殿（島津久光）へ罷出候、尤今日罷出候樣、致承知候故ナリ、然ル處、段々御用筋致承知、暮前罷歸候事、

○中略、

一王子等始、今日大鐘時分、乘船被致候由承候事、

〔尚姓家譜統正〕○男爵伊江朝助所藏本







朝直

尚泰王時代

咸豐四年甲寅五月三日、爲賀　公方樣御代替事、奉　命爲正使、時蒙　聖上及　國高祖母　國母各位遣使賀、賜御花各一籠・御玉貫各一双、（每逢旅、祝賀賜如此、）同八年戊午四月五日、拜謁　聞得大君宮及三平等、諸神禱求海路無恙、同二十九日、恭蒙　聖上賜餞宴、又蒙遣使賜大官香五把・太平布十疋・燒酎二壺、又蒙從內廷賜金扇子一箱・新繪二枚・紺地島細上布一端・島紬二端・白縮緬二端、（此外、所賜物件悉不記之、）又蒙　國高祖母　國母賜賜紗綾各一端・島紬各一端・燒酎各一壺、（此外、從內廷所賜物件、悉不記之、）五月六日、登船、同十九日、那覇川開船、同二十二日夜、駛到山川、同二十六日、陸地起程、同二十七日、收到鹿府、（本船二十五日、起碇、收到鹿府、）七月九日、照例行朝見禮、同二十日、因　太守公俄病故行悔弔禮、八月二日、因有公邊國事多端故、前赴于江府弭止、九月十二日、照例拜謁福昌寺・淨光明寺・聖堂・神農堂、同十五日、有許回旨、時蒙　太守公遺命賜奉書紙三束・國分煙草百斤・茶五十斤・鰹節四百本・杉原紙三束・蠟燭四百六十挺、並蒙　宰相公賜奉書紙二束・國分煙草五十斤・茶二十五斤・蠟燭百挺、御前樣賜奉書紙一束・杉原紙三束・國分煙草五十斤、（此外、內廷所賜物件、甚多故略、）同十八日、公務全

竣、麑府開船、同十九日、回到山川、同二十一日、該地放洋、同二十六日、歸國復命、此日、恭蒙　聖上及　國高祖母　國母各位遣使賀賜如前、且到十一月四日、各員役等、叨蒙依照全到江府之例一律擧庸功勞等命、其書記于左焉、

此時員役、副使一員・讚議官一員・樂正一員・儀衞正一員・掌翰使一員・圉師一員・使贊三員・右筆一員・從者五員・內醫者一員・包丁人一員・樂師五員、內頭衞一員、樂童子六員也、

今般江戶立之筈付、當夏御使者役之上國爲被仰付事候處、

公邊御國事多端之折柄付、年延被仰付候旨被仰渡、追ゐ

公方樣被遊

薨御、江戶立一件等、何分仰渡御到來無御座候得共、右仕合付ゐ者、御流之方可被仰付儀者、差見得候付、全年延与者譯合相替申候間、御使者役ニ至り、直ニ江戶立之旅砌御取持被仰付、左候ゐ、御拜領御頂戴之御規式等、相濟不申候得共、御使者以下、出仕幷諸公事相勤候樣、被仰付被下度旨、被奉伺相濟候間、此段致問合候、以上、

午十一月四日　　豐城親雲上

讚議官

奧武親雲上



嘉味田親方來リ訪フ

〔新納久仰日記〕○公爵島津忠重所藏本

六月十一日、朝五ツ過、新在番嘉味田親方初テ見廻之儀、昨日ヨリ承置キ候間、新納太郎左衞門同伴ニテ被參候、例之通リ、吸物三通リ・盃三獻イタシ、無程歸リ之、贈リ物モ、每之通リ之、

覺

| | |
|---|---|
| 御扇子 | 一箱 |
| 藤盆 | 十 |
| 十錦太碗 | 十 |
| 紺地島細上布 | 二端 |
| 紺島細上布 | 二端 |
| 縮緬紅白 | 二卷 |
| 白滑大綸子 | 一本 |
| 天靑漢府緞子 | 一本 |
| 太白砂糖 | 一籠 |

安政五年五月二十七日

燒酎砧　一雙

以上、

○中略、

六月二十二日、○中略、

一新在番嘉味田親方内證ヨリ之安否尋トシテ、桃餅一重・工夫茶壹壺贈リ有之候事、

○中略、

八月廿一日、摩文仁親方見廻、且、贈物等左之通、

覺

御扇子　一箱
御吸物膳　十
御箏寒　十
紺地島細上布　二端
紺島細上布　二端
緞子　一本

摩文仁親方訪問ス



以上、

右ハ御暇被下候ニ付、御禮トシテ贈ル、

覺

御扇子　一箱
御菓子皿　十
御吸物碗　十
縮緬　一卷
大檜垣紗綾　一端

以上、

摩文仁親方

右ハ在勤中、段々預世話、首尾能相仕廻候禮トシテ贈リ之、

進上

大官　三把
十錦茶碗　十

安政五年五月二十七日

嘉味田親方來リ求摩茶並繰綿重買下ノ禮ヲ述ブ

白花紗綾　二端
以上、

右ハ御暇被下、近々乘船ニ付テ之表向贈リ之、

○中略、

八月二十六日、○中略、

一今日、摩文仁へ、例式之通リ、餞別品等、取揃差贈リ候事、

○中略、

九月五日、○中略、

一嘉味田親方、聞役同伴見廻、且、贈物有之、譯ハ求摩茶並繰綿重買下之儀、先三ヶ年願之通御免被仰付候御禮トシテ之、

覺

澁御扇子　一箱
十錦太碗　十
紺地島細上布　二端



摩文仁親方

島紬　二端
縮緬（紅白）　二卷
以上、

嘉味田親方
新納太郎左衞門

覺

短尺御扇子　一箱
彩色蓋茶碗　十
紺地島細上布　一端
島紬　一端
水色大檜垣紗綾　一端
以上、

嘉味田親方

○中略、

九月十一日、○中略、

安政五年五月二十七日

一今日、嘉味田親方見廻、館内屆並ニ諸人自物砂糖ニ相掛手形占御免之儀、來年ヨリ先キ二ヶ年、是迄之通リ御免被仰付候御禮ニ、仍テ左之通贈物有之、

覺

十錦太碗　十
紺地島細上布　二端
島紬　二端
縮緬　二卷
緞子　一本

以上、

九月十一日

新納太郎左衛門
嘉味田親方

○中略、

九月廿六日、○中略、

一嘉味田親方ヨリ、別段内證之贈リ物、揃者並ニ次郎四郎へ、左之通リ有之候、

覺

一御茶　雀舌名色種　二壺
一藕粉　二箱
一西國米　一重
一米素麪　一重

右、駿河樣へ、乍輕品唐土産ニテ、御内證ヨリ進上仕度御座候、

一澁扇子　一箱
一煎茶之碗　十
一島紬　一端
一白唐紙　一帖
一白砂糖　一籠
一燒酎　一瓶

右、次郎四郎樣へ、差上度御座候、

久米村・湖城親方並ニ儀衛正・
屋富祖親雲上・樂童子六人手跡、
一唐字　十二枚

一唐紙色々　十五帖

右御慰ニモ可相成哉ト、

御同人様へ御内々ヨリ進上仕度御座候、

右之通リ宜敷御取成被下度頼上候、以上、

九月廿六日　嘉味田親方

伊東茂右衛門様

○中略、

十月八日、嘉味田親方等見廻、其贈リ物等左之通ニ、

一御扇子　一箱
一鑞鉛火爐　一
一紺地島細上布　一端
一紺島細上布　一端
一檜垣紗綾　一端
一白縮布　一端
一島紬　一端





一龍紋緞子　一本

十月八日

右ハ琉球出米之内、千石申受之儀、當年迄年限筈合候處、又々來ル未年ヨリ先三ヶ年、是迄之通被仰付候御禮ニ、

新納太郎左衛門

嘉味田親方

覺

一石之盆　一
一彩色大碗　十
一紺地島細上布　一反
一紺島細上布　一反
一島紬　一反
一水色緞子　一反

以上、

嘉味田親方

右ハ館内屆並諸士自物砂糖ニ相掛手形占、來年ヨリ先キ二ヶ年上納方御免被仰付候

琉球出米ニ就イテ免除ヲ行フ

御禮ニ、

## 蘭船一艘、長崎ニ入津ス。

〔長崎奉行荒尾成允達〕○伯爵小笠原長幹所藏本 小倉藩追書控所載

○五月二十八日小倉藩ヘ

御達書寫

和蘭船渡來

昨廿七日、異國船壹艘渡來ニ付、相糺候之處、阿蘭陀船ニ而、別條無之、跡船之有無難相分旨、蘭人共申立之候、尤江戸ニ之注進ヶ、明日申上候、

五月廿八日

〔福岡藩主黒田齊溥届書案〕○侯爵黒田長成所藏本 江戸御用狀所載

福岡藩上申ス

○六月朔日老中ヘ

御届書案

六月三日、

△江戸ニ、大早御飛脚被差立、

但、京大坂ニ茂、御用封箱差越之、

於長崎、五月廿七日、阿蘭陀船一艘渡來○中略、ニ付、

公義ニ御届、○中略、





福岡藩京都及大坂ヘ通知ス

於長崎、先月廿八日、從荒尾石見守、彼地遣置候家來之者被相呼、同廿七日、異國船壹艘就渡來被相糺候處、阿蘭陀船ニ而、別條無之、跡船之有無難相分旨、蘭人共申立之通、被相候段申越、承知仕候、此段御届仕候、以上、

六月朔日

御名

〔福岡藩主黒田齊溥使者口上書案〕○江戸御用狀所載

○六月京都所司代等ヘ

六月三日、

△江戸ニ、大早御飛脚被差立、

但、京大坂ニ茂、御用封箱差越之、

於長崎、五月廿七日、阿蘭陀船一艘渡來○中略、ニ付、

○中略、京大坂御所司・御城代ニ之御口上書案

○中略、

京大坂御所司御城代ニ之御口上書案

於長崎、五月廿八日、從荒尾石見守殿、彼地遣置候家來之者被相呼、同廿七日、異國船壹艘就渡來被相糺候處、阿蘭陀船ニ而、別條無之、跡船之有無難相分旨、蘭人共申立之通、被相達候段申越致承知候、右之趣、御老中迄申上候、此段以使者申述候、以上、

安政五年五月二十七日

福岡藩在國家老ヨリ江戸藩廳へ通知

〔福岡藩在國家老書翰〕○江戸御用狀所載

○六月三日在府同役宛

大早飛脚を以、一筆令啓達候、

少將樣益御機嫌能被成御座候、於其御地、

侍從樣、上々樣益御機嫌能被成御座奉恐悦候、

一長崎先月廿九日立大早飛脚、一昨朔日到着、廿八日、荒尾石見守殿ゟ、聞役御呼出ニ付、古藤五助罷出候処、廿七日異國船壹艘渡來ニ付、被相糺候処、阿蘭陀船ニ而、別條無之、跡船之有無難相分旨、蘭人共申立之候、江戸ニ之御注進者、明日被申上候、右之段御國元ニも可申上旨之御書付被相渡候段、及言上達御耳候、

一就右、公義ニ御届被仰上候條、御届書案取建差越候、一昨朔日之御日付ニ相認、松平肥前守樣御方及引合、海岸御掛(細田正陸)御老中樣ニ御届可被仕候、尤商賣船入津之節ニ、御連書を以御勤被成候得共、此度御奉行所ゟ之御達振、外異國船渡來之節之振合ニ付、阿蘭陀蒸氣船其外黒船渡來之節御勤ニ準、御届之御下知申入候、爲見合、御達書寫を發差越之候、

一○中略、

一○中略、

(朱書)「四ヶ條承知仕、御届書清書申談、佐嘉御方一同、先月廿二日、堀田備中守樣御在勤中、永田直次郎持參、夫々御届仕候、」

一右兩樣之趣、夫々宗門御奉行衆・在府長崎御奉行衆・御用頼御目付衆ニも、御口上被仰達候條、御使者差越可被申候、御用頼大御目付衆ニも、御留守居名前之書付差出可被申候、

一右ニ付、京御所司代・大坂御城代ニ茂、被仰達候條、今便兩所ニ御下知申入候、隣國之御方々ニハ、於長崎、以奉札被仰達候、尤小笠原右近將監(忠嘉、小倉藩主)樣・小笠原近江守(貞正、小倉新田藩主)樣ニ茂、於其許掛合差出可被申候、松平肥前守樣ニ茂、以御飛札被仰達さる事候、

(朱書)「二ヶ條承知仕、宗門御奉行衆・在府長崎御奉行衆・御用頼御目付衆ニ、御使者差出、御用頼大御目付衆ニ、御留守居名前之書付差出、其外懸合差出申候、」

○中略、

六月三日

江戸御留守方

惣中

御國

惣中

播磨連名

小倉藩艦ノ處置

## 〔小倉藩在國家老嶋村志津摩等書翰〕○伯爵小笠原長幹所藏本 小倉藩追書抜所載

○六月四日（左府同役）小宮四郎左衛門等宛

六月四日出之間便、同廿一日着、

追啓、

一先月廿八日、長崎御奉行所ゟ、御用達御呼出ニ付、罷出候處、阿蘭陀船壹艘渡來ニ付、御達書壹通、荒尾石見守樣御用人中ゟ被相渡候由、長崎聞役差出候付、右御書付寫差進候間、被遊

御承知候上、御先格之通御挨拶之

御書被遣候御儀与奉存候、此段以御序宜被達御聽候、以上、

六月四日

志津摩（小笠原）織衛

四郎左衛門樣

監（小笠原）物樣

猶以、御達書之本書、重便此表御書方ゟ、其表御書方ニ爲差廻可申候、以上、

〔熊本藩士〕青地源右衛門書翰〕○肥後藩國事史料所收江戸自筆狀所載

熊本藩士ノ同藩士ヘノ通知

セーフアールト

○六月二日（同藩士）眞野源之助等宛

態と飛脚差立言上仕候、○中略、今朝楢林榮左衛門（和蘭通詞）內々罷出申出候趣、不容易儀ニ御座候間、○中略、思召次第御家老衆ニ而、御達被成下候樣奉願候、○中略、尙模樣も御座候ハヽ、早々申上候樣可仕候、此段言上仕度、早々如是御座候、以上、

六月二日

眞野源之助樣

小山門喜樣

尙々、御糺書一通、榮左衛門ゟ差出申候間、則差出申候、○中略、

○別紙

一何國仕立之船ニ候哉、　咬噌吧仕立御座候、

一船號　セーフアールト

一何月幾日出船哉、　第六月八日 四月廿七日

一船大キサ　貳百五十五ラスト

一船頭之名　ビストホルスト

一乘組惣人數　拾九人內兩人商人

一類船之有無　　相分不申候、

一異船等洋中ニ而見掛不申候哉、　上海近邊ニ而、異國船貳艘見掛申候、

一日本漂流人連渡不申候哉、　連渡不申候、

右之通船頭阿蘭陀人申出候付、此段申上候、以上、

五月廿七日

○本書ノ全文ハ、之ヲ晦日ノ條ニ、收錄ス。

## 〔平戸藩用人日記〕○平戸史料年表所載

平戸藩廳ノ處置

五月晦日、○中略、

一長崎眞見塚源七殿より、昨廿八日酉中刻仕出之狀箱、早岐鶴田吉兵衞殿より、昨夜五時過仕出之添狀ニ而、村次以走使、今朝六半時前相達、

但、申來候趣も、一昨廿八日、御奉行所より御呼出ニ付、類役一同被罷出候處、荒尾石見守樣御逢、異國船一艘渡來ニ付、被相糺候處、阿蘭陀船ニ而別條無之、跡船之有無難相分旨、蘭人共申立之候由、以御書付被仰渡候段、江戸ゟ之御注進も、昨日被仰上候由、以御書付被仰渡候段申來、右御書付發一同相達、

一右ニ付、江戸ゟ之急小文箱、今九時過仕出之、



但、申越候趣も、於長崎、阿蘭陀船一艘渡來付、海岸御懸御老中樣ゟ、御屆書被指出候儀、拜御用御賴大小御目附樣ゟ、同寫被指出候儀、且、御在府長崎御奉行樣ゟ、御書付被指出候ニ付、例之通取計有之候樣申越之、○中略、

一右同斷ニ付、眞見塚源七殿ゟ之油紙包御狀箱、早岐押役迄、以村繼仕出指越之、

但、申越候趣も、一昨廿八日、阿蘭陀船一艘入津之段、以御書付御達有之候御答御使者之儀、

一右同斷之處、先達而渡來之亞米利加蒸氣船一同取結、此節熊澤甚五太夫殿爲御使者出崎之事故、被相勤候、都合致出來候ハヽ、可然取計有之候樣、右ニ付、御口上書出來差越之、

○中略、

熊澤甚五太夫

今度長崎へ、阿蘭陀船一艘渡來ニ付、誰御使者可被　仰付処、幸御自分儀、出崎ニ付、眞見塚源七申談、右御使者も相勤候樣、被　仰付候段、同人より以書狀申遣之、○中略、

六月七日、○中略、

一

右於長崎、先月十三日、亞米利加蒸氣船一艘入津、同廿七日、阿蘭陀船一艘同斷ニ付、御奉行所幷御目付樣ゟ之御使者、去二日、被相勤候処、御取込ニ付、御逢不被成、被入御念候段、以御用人、御返答御座候段、昨夕歸着之旨ニ而、申達有之、以書上達　御聽、

〔福岡藩〕安政五戊午年日記〕○侯爵黒田長成所藏本

六月朔日、○中略、

△長崎先月廿九日立、大早飛脚到着、

阿蘭陀船一艘入津ニ付而之、

○中略、

三日、

△江戸ゟ、大早御飛脚被指立、

○阿蘭陀船・亞米利加類船、長崎入津ニ付而之、

△長崎ゟ、中早御飛脚被差立、

○右同斷ニ付而之、

〔安政日曆〕○維新史料編纂會所藏本

五月廿八日、和蘭通商船壹艘、長崎渡來、



江都ゟ之上書、今日蓮池を發ゑ、

〔慶下士〕勝麟太郎書翰〕○公爵島津忠重所藏本　新納久脩日記所載

○六月三日　鹿兒島藩士

新納駿河宛

一翰拜呈、○中略、十九日夕刻崎着仕候、然ル處、前十三日ニ、亞墨利加船一艘入津仕居、歸リ後、彼是多忙ニテ、意外御無音申上候、又々亞船一艘入津、蘭商船モ同斷、甚港内船多相成申候、○中略、鳥渡過日之御禮申上度如斯御座候、以上、

六月三日

勝麟太郎

義邦

新納駿河樣

尙々、○下略、

○本書ノ全文ハ、之ヲ十三日ノ條ニ、收錄ス。

〔續嘉安紀聞〕○弘前藩士石橋某手錄　維新史料編纂會所藏本

西洋新聞拔書

我五月晦日、亞米利加ノ軍艦「ポーハタン」入津、此前和蘭商船一艘入港、是迄「バターヒヤ」ヨリ爰ニ來ルノ船ナリ、是等ニ因テ、和蘭ノ士官等、本國・支那其他ノ新聞數條ヲ得

長崎港内外國船多シ

タリ、其内「ハントロウエン」人名、譯習ニ持タル處ノ數章中、支那ノ尤著シキ箇章ヲ筆記ノ來居士官、ヲ、我ニ送ルニ云、

一我得タル處ノ新聞紙中、支那ト英佛其他トノ事跡ニ關係スル著シキハ、

一支那帝軍費ノ償金ヲ出シ、其他ノ妻件ヲ決定シ、定約成タルヲ以テ、漸ク和平ニ至レリ、

一支那地方ニ於テ、五ヶ處ノ大要港ヲ開キ、交易ニ便セシム、其内南京ニ至リ、川流八百里（即、英里ナリ、一里ハ本邦十四丁四十五間余、）ハ、外國ノ通船ヲ不禁、

一廣東地ハ、諸定約全ク整ルニ至ル迄ハ、英咭唎・佛蘭西ノ指揮タルヘシ、

一歐羅巴洲ノ商館、戰鬪或ハ賊難ノ災害ニ遭タル處ノ損破ハ、悉ク支那國ノ償タルヘシ、

一支那ヨリメ三ヶ年中ニ於テ、五「ミル・ユーテンポンテンテルリンフ」（六千二百萬貫目）ノ償金ヲ出スヘシ、

一北京近傍執レニモ、他國ノ「ミニストル」住居勝手タルヘシ、

一遊行人ハ、支那國中隨意タルヘシ、

一佛蘭西國ノ會士、北京ニ到ル者ハ、其雜費支那帝ヨリ償フヘシ、

一「フレイハンデル」交易ハ、五ヶ處ノ港ニ於テ成スヘシト、當時支那ニ對シ、戰寇セシ國々ハ、卽英咭唎・佛蘭西・魯西亞・亞米利加等ナリ、此諸國、皆支那地方ニ「アムバサトケル



ス」領事官ノ上等ナルモノ、ヲ置キシ國々ニメ、是等互ニ交通ノ諸事ヲ計畫シ、又一致成シ萬事ヲ謀リシト、又云、此諸國ノ官員、近日我崎港ニ來ルヘシト、是支那地方ハ、擾亂未タ平定セス、他國ノ海軍諸隊、水薪食料ヲ求ルニ乏シク、容易スク得カタキヲ以テ、海軍隊廿二三艘、直ニ此港ニ來リテ、右等ノ諸品ヲ整ヘンコヲ求ルト、而シテ是ヲ得テノ後ハ、諸軍隊ヲメ、再ヒ廣東其地（佛カ）へ回リ來ラシメ、其地ヲ保護警備セシムト、又諸官員等ハ、止リ居テ、江戸ニ到リ、本國ヨリ獻貢スル處ノ物件ヲメ進呈シ、又定約ヲ極ント云、

一其支那ヨリ爰ニ來ル、「アムバサトールルス」卽、領事官、英咭唎國「ロルドエルギン」、亞墨利加國「リード」、佛郎斯國「ハロンゴロス」等ナリ、又魯西亞國ニテハ、「フーチアチン」ナリト云、

ロツテルタム風說、千八百五十八年第三月「マール」ト八日ノ刻、我午ノ正月廿三日、

## 英國風說

一歐府ニ定約スル「ロルトエルギン」英將ト、廣東ノ總督「エイ」トノ義ニ付、一千八百五十七年「デセムベル」第十月十二日、「エルギン」氏ノ手記中、其最初ニ云、廣東ノ人民、次ニ擧ケタルコヲ求ト、

一定約ノ取極ニ於テ、全ク廣東地ハ英國幕下ニ屬セシメ、其所置隨意タルヘシ、

一「ブリツヤ」英國屬下ニ附テ、其損失アルモ亦妨害アルナシト云リ、

一「エイ」ニ考定サスヘキ爲ニ、十日ノ猶豫ヲ與ヘシメタリ、而メ定約執行スル所置ニ對テ、道路ノ絕塞ヲ嚴復セシムヘシト、

一是等凡般ノ事ニ當テ、英國・佛國ニアル處ノ堡塞ヲ嚴備シ、是等ヲ質トメ、其定約執行ヲメ良益アラシメントス、若夫是ニ反セハ、廣東地方ヲ侵刼セシムヘシト、○「エルギン」氏ハ、此新望ヲ施行サレンコヲ待テリ、

一「デセムベル」十二月十四日、「エイ」ヨリ答ニ云、支那帝其定ムル處、廣東ニアル外國人ニ關係スル定例ヲ以テ變革成スコナク、○「ホウナン」兵衞及海寇防禦ノ爲ニ造築セシ堡塞ハ、實ニ其誤解ニ係ワレリ、

○「ロルカ」地名ノ定事ハ、支那ノ公裁ニアルヘク、

一是ニ次ク「エルギン」氏ノ短簡アリ、是「ホウリヲウス」船號船中「ワムポウ」地名ニ於テ、書記セシ者ナリ、其中ニ云、彼カ返答全ク充分ナラザルコヲ了解セリ、此故ヲ以テ、海陸ノ屬官ニ先テ、廣東地方ニ向ヒ、其企旨ヲ興起スヘキノ指令ヲ受ケタリト云ヲ以テス、

一「デセムベル」十二月廿五日、「エイ」其以前ノ書載ヲ再記シ、而メ其抗逆ヲ他ニ託シテ云、（本ノマヽ）

「バターヒア」風聞「メイ」十五日、五月三日、

## 支那風說



一英國人「ヲシマルリハン」及ヒ「ベルトン」ハ、其遊軍「エノチーメ」及ヒ「ホンコン」ト號スル軍艦ヲヒキヒテ軍威ヲ援ク、又タ火塔造築ヲ司ル先チ、第一ハ支那ノ海岸「トウベル」島ト唱フル處ノ岬ニ造築スヘシト、此塔落成ノ後ハ、「エルギン」火塔ヲ移スヘキナリト云、

一「ヒユカウンイーン」ハ支那方ノ軍將ノ一、此將南京近傍「マリンクバッス」ト稱スル處ノ一揆ノ爲ニ攻擊セラレタリ、

此將、其指揮スル處ノ官兵二千人、大抵殺害重疵ヲ蒙リ、○此後一揆等、「カンシユン」地方ヲシテ再ヒ劫奪セリ、此地ハ南京ヨリ纔ニ十五里、或ハ二十里（英里ノ里ナリ、）ニ在リ、

一「リスウフイ」及ヒ「ヲンタン」街市モ、再ヒ彼等ノ押領ニ歸セントスルヲ待ツト、

一「タイレイフレツス、」（人名、）廣東凡般ノ事ニ於テ說話スルト云、

一百般ノ事業、廣東ニ於テハ、日々多クハ不良ニ轉移ス、而メ其轉末尙遠キヲ以テ、其始ニ於テ不可量知「ハ、自カラ明ラカナルヘシ、

一出納鹽米穀領事官、其所屬ノ部下ヲ當時「ハーサン」ニ定メタリ、是外國領事官ノ勉勵ヲ庸メ、是等ノ所業ヲメ復サシメンカ爲ナリト、

一新領事官「ワンク」ハ、街市中ニ來ルヲ好マス、白山ト稱スル後側ニ居止スヘキコヲ計畫

安政五年五月二十七日

セリ、○廣東ノ人民ハ日々横行スト云、

一不幸ヲ得タル軍將「ストラウヘンセー」ハ、其不絕ノ困苦ト恐怖トニ於テ、到著齟齬ヲナセシ、是レ我カ軍卒ニ遭逢成サンカ爲ト、又支那ニ國勢ヲ附ンカ故ナリト、

一「ロルドエルキン」氏ハ、諸般ノ事業ヨリメ、一ノ稀稱スヘキノ記事ヲナシタリ、

一諸國ノ兵卒・堡塞ヲメ廣東ニ轉移スヘキナリ、○今ニ逆フ處ノ兵卒等ハ、專ラ戰闘ヲ待ツ、而メ是等稍モスレハ、戰ハント欲ス、○「ロルドエルギン」子、當時「ヘイホ」ノ地ヲ以テ、恥辱トシ失ヘリ、或ハ此ノ地ノ通路ヲ絕ントセリ、○佛國ト合對ノ後ハ、既ニ其通路ヲ絕塞セリ、是ニ因テ廣東所在ノ兵勢、大ニ困弱スルヲ以テ、此時ニ乘シ攻撃ナサンノ意ナリト、

一今既ニ困弱、攻撃スヘキノ時ナリト、

一此先見セシ企旨ハ、唯廣東人ヲメ、退去セシムルト、逆徒ノ黨ヲメ、微弱ナラシメタリシ、○「エイ」ノ英商ヲ生捕セシヨリ、猛烈ノ所置ヲ用ヒ、一「ウエーキ」七日ナリヲ以テ、諸般悉ク順序ニ歸セリト、

佛郎斯風說中抄

一佛國ノ海軍、後歲ニ至テ、益盛大ニ及ヒシハ、普ク知ル處ナリ、





一其船ノ改革ト、新製トニ當テ、十四ケ年ノ間ニ、則一千八百五十八年ヨリ、一千八百七十一年マテ、年々六十五「シリウン」ヲ以テ、是ニ充ツヘシト定ム、

一今此費用ヲ以テ、第一ハ守常軍艦ノ蒸氣機械ヲ裝置セラルヘキ者ニハ、是ヲ「ストノムフルモーヘン」蒸氣ナリ、ニ改革ス、第二ニハ逐次ニ一隊ノ軍隊ヲナサシメ、迅速ニ航スヘキ軍艦、大小百五十艘ヲ以テ、善良ノ形容ニ造製ス、第三ハ既ニ造製中ナル「タランスポルト」ヲ以テ落成セシメ、又所在ノ帆用「フレカット」船ヲ以テ、「タランスポルト」蒸氣船ニ改革成シ、如斯ナシテ一隊ノ軍艦七十二艘ヲ完全ス、第四ハ「チルホウンク」ノ港ヲ落成シ、新式ノ軍隊ヲ備ヘ、港口及ヒ工作場、又其他ノ「ケレイクスハーヘン」武器ナリ、ノ變革專ナリ、

一日本ノ定約ハ、佛蘭西新聞紙中ニ果セリ、其定約中、日本ノ西境ノ地ニ於テ、海口ヲ開キナセリト、此事業ハ、殊ニ和蘭人ノ說得丹誠ニ出タル事ヲ謝セリト云、

一和蘭人、其日本ト定約セシ處ヲ以テ、兼テ日本ト約スル處ノ魯西亞・亞墨利加・ブリッツ國ノ英國ナリ、「アトミラール」官名ニ布告セリト云、

魯西亞風說

一魯國一千八百五十五年、日本政府ニ談シ、魯西亞國ノ船、箱館・下田及ヒ長崎ニ入リ、交

通スル（スル歟）ヿヲ約定セス、又魯西亞ノ「コンシュル」ヲメ、日本ノ要港ニ置クヿヲ免許サレタリ、

一蝦夷ノ箱館ハ、魯國ノ航海客「ゴロリイン」ノ捕ハレ居シ處ナリ、

一魯西亞ヨリ此地ニ送ル處ノ「コンシュル」ハ、「コロルギーラードゴスケウイツ」ト云者ナリ、此人、既ニ「シベリー」地ヨリ、蝦夷松前ニ到レルヿアリシ、此人、其新屬幷ニ醫官及ヒ「セゲレターリス」ヲ伴フト云、

一松前地方ハ、日本ノ屬地ナリ、其地方「クナシリ」島ニ迫リ、又後面ニ「エトロップ」魯西亞所屬ノ「キユリレン」アリ、

一「サカリン」大島ハ、其半日本ニ屬ス、其半島ハ魯西亞ニ屬シタル住民アリ、

一「コスケウイツ」ハ、疾ク日本語ヲ解シ、又日本語ヲメ魯西亞語ニ譯セリ、

一千八百五十七年ノ夏、日本船「アムル」ノ川口ニ到リ、其地ニ滯留セシト云ヿハ、聢ト知レサリシナリト、

亞墨利加風說

一「マールト」六日、（我三月廿一日）、「ニウヨルク」中「ウスヒングトン」ニ居住スル軍將「クワイトマン」、前日其所思スル處ヲ、逐一ニ是ヲ國中ニ布告ス、其旨ハ列細綿多一隊ノ地衛騎兵ヲメ、「テユキサス」境界ト「プレシテント」ノ徒屬ニ用ヒ、其上列細多四隊ノ海兵ハ、其他ノ備ニ整フヘキ夏等ナリ、

一同月四日、（我三月十九日）、亞米利加ノ「コモトーレマツテウベルレイ」（彼國ノ宰相ニ）死去セリト云、

〔安政日曆〕（○維新史料編纂會所藏本）

八月朔日、去ル五月廿七日入港之和蘭船壹艘、商買相仕廻長崎出帆、

二十八日　京都所司代本多忠民（美濃守○岡崎藩主）　東下ノ爲、參內、小御所ニ於テ天顏ヲ拜ス。關白九條尙忠、日夜外患ニ宸襟ヲ惱マセラルル狀ヲ諭シ、速ニ外交措置ヲ決定奏上スベキヲ幕府ニ傳ヘシム。

〔關白九條尙忠覺書〕（○宮內省圖書寮所藏本　尙忠公記所載）

○五月二十八日京都所司代本多忠民ヘ

御暇被　仰出、參　內、就夫、彼亞墨利加一件、自關東依無沙汰、幸美濃守ヘ、無急度、自當職、以切帋申達御趣意書之寫、（但、於勝手聞濟者、兩條奉御幷遠臨下ニ著座、）

一今度

伊勢公卿　勅使被立候ニ付テハ、先例於　宮中モ、威儀之御裝儉御作法等モ被爲有候ヘ共、於此度之儀ハ、誠天下之大事ニ候得ハ、嚴儀之事件等ハ、惣テ被略、只々被盡　御誠

五月二十八日本多忠民暇乞參內

實、蠻夷攝伏、　皇國泰平、武運長久之御懇禱專要之
叡慮ニ候事、
一蠻夷之儀ニ付テハ、先達テモ被　仰進候通、晝夜被惱
宸襟、御寢膳等モ不被安、御遊宴等茂被爲廢候程之御儀ニ候得ハ、乍此上猶亦厚勘考可
有之事、
一公武御合躰之儀ハ不及申、何事モ御和談可有之、永世公武共御安心之所置賴　思食候、
尤於關東モ、專衆議中ニハ可有之候得共、幸其元參府之序、此段申入候事、

〔議奏久我建通通達〕○內閣文庫所藏本武家書翰往來所載

○五月二十六日禁裏附大久保忠良へ
明後廿八日巳刻、本多美濃守參府御暇參內被
仰出候、仍爲心得申入候、以上、
五月廿六日
大久保大隅守殿　久我右大將

〔非藏人日記乾〕○東京帝國大學所藏本

五月廿六日、庚子、晴、當番議奏久我右大將殿、宿替中山大納言殿、傳奏兩卿參侍、

本多忠民御暇參內

一關白殿御參、
○中略、
一明後廿八日巳剋、所司代本多美濃守參府御暇參　內之旨、右大將殿被申渡、令壁書、
○中略、
二十七日、辛丑、晴、當番議奏德大寺大納言殿、傳奏兩卿參侍、
一左大臣殿御參、
一明廿八日、所司代本多美濃守御暇參　內ニ付、出向岩橋元氏松室重良交名書認、傳奏衆令附進、
○中略、
廿八日、壬寅、晴、當番議奏坊城中納言殿、其外惣參、傳奏兩卿參侍、
一關白殿御參、
一諸(所)司代本多美濃守參府ニ付、賜御暇參　內巳剋、從車寄參着、于鶴間兩役出會後、有　御
對面、於小御所賜
天盃、終而於鶴杉戶西、有拜領物末廣一箱絹拾疋、
傳奏衆誘引、臺所口ゟ候所江通、
賜酒饌云々、但、拜領物役送六位侍中・同列勤之、拜領物諸大夫間ニ而、傳奏雜掌江相渡事、同列商量也、

一小御所見繕、殿奉行衆沙汰也、円座、内々衆員數相尋、西廂出之、
一出向元氏・重良勤之、
〔非藏人日記　坤〕○東京帝國大學所藏本
五月廿八日、壬寅、晴、當番議奏坊城中納言殿、其外惣參、裏松殿・加勢卿等不參、傳奏衆參侍、
一關白殿御參、
一諸司代本多美濃守參府御暇參　內也、未二刻前、出御于小御所、有　御對面、賜　天盃、於鷺間代、有拜領物、於廚香間、關白殿被謁、其后口向江通行、傳奏衆誘引、於候所賜酒饌、傳奏衆嘗伴也、
一御塞設、鷺王質梅等杉戶鎖切、鶴杉戶立寄、御殿御搆、殿奉行衆沙汰也、
一出御之儀、兩番所端等江申通、
一出向元氏、重良勤之、
一同列前番渡殘、當番辰半剋早參、
一老中堀田備中守江御言傳物、
大樹江御屏風一双一箱、御硯文臺一箱宛、御臺江南都八景繪入御手鑑一箱、自准后　大樹江御小衝立一基一箱、御臺江御掛物二幅一箱、右御品去月三日、不出來ニ付、此日諸司代役宅江、執次持參也、
一御茶壺宇治出行也、

〔藏人細川家日次案〕○細川家典日記　維新史料編纂會所藏本
五月廿八日、壬寅、晴、
一所司代本多美濃守歸府御暇參　內、役送御用一人辰半剋可令參、議卿被觸、予參仕、屆于議奏卿、德大寺承知、
一午半剋頃、於小御所　御對面、賜　天盃、御陪膳廣幡大納言、御手長豐房、役送予、進退如例、事訖、未剋過令退出、
一同事賜物、役送俊堅・俊昌參仕、　御對面之後、於鷺間代有賜物、
　御末廣一箱　御衣拾疋云々、

〔久我建通日記〕○宮內省圖書寮所藏本
五月廿六日、晴、時々雨、當番予、宿中山、
一昨夕申來、所司代美濃守事俄ニ參府之旨申來、何等之義旨不分明之、
一所司代歸府ニ付、賜物之事、臨期取調、去年七月、脇坂淡州歸府之節見合ニ○中略○可申付候

本多忠民歸府ノ際諭示ノ條々久我中山兩卿進言ノコト

処、臨期故、豫從武傳品物被取寄、被伺候、流例之儀ニ而ハ無之、誠之卒急故之事ニ、

一於　御前、種々御咄事有之、今度所司代歸府幸之事、何とこの可被申遣哉之邊、中山ト相談、彼卿ゟ今晩被申上筈ニ、

廿七日、晴、當番德大寺、

一從三條家文通、所司代歸府ニ付、三公御相談有之、何とこのヶ條申遣可然候ヘハ、從當役武傳ヘ可申入、以狀被示候、良典ゟ之書狀添、德大寺ヘ申入之処、予參　朝候樣申來、直著衣冠參朝、尙中山も參　朝申遣、三人談合、何分從三公方も、武傳ヘ可被申入方可然、尤當役ゟも可申入置申遣ス、扨武傳ヘ右之事申入候、

一武傳兩卿召　御前、所司代ヘ被申遣事、御ヶ條書一紙被出、此御趣意可申遣樣御沙汰ニ、

兩役共、於御學問所相談、御趣意之通、和ラカニ書取　万里小路執筆、上于御前、無思召、明日所司代御暇參　內故、其砌殿下も御參可申入御沙汰、今日武傳兩卿右一紙持參、于殿下被申入筈ニ、

一現任之公卿衆中ゟも建白有之処、武傳被差返由承之、

廿八日、晴、午後雨、當番坊城、

一所司代御暇參　內出會如例、　御對面天盃、其後於候所、賜酒饌有賜物、將軍家ヘ賜之品々、今日所司代ヘ從武傳被渡候、

一法眼喜安・三角攝津介、第二度目拜診之事有之、注他、

一今度異國之事ニ付、又々被申遣之書付、注他、今日於廐香間、殿下御授ニ、武傳兩卿立會之由ニ、

○中略、

廿九日、晴、當番中山、

○中略、

一中務少輔入來、暫時面會了、

一三條家幷正親町三條等ヘ文通、三條中納言ヘハ數度ニ、今度所司代申渡之事、或時勢事、又仮卿加勢當番邊事等往反ニ、

三十日、晴、午後白雨、當番予、宿坊城、

○中略、

一於省中、岩倉侍從面會候、時勢之事種々有咄、不記、

一召　御前、種々御相談之事有之、賜菓子、

一今宿予少々依所勞、坊城黃門ヘ相賴候事、

〔徳大寺公純日記〕○臨時帝室編修局所藏本

五月廿六日、晴、過日來梅雨濛鬱之処、千里快晴、

一殿下御參ニ付參朝、御省略一件、兩役一同令言上畢、坊城所勞不參、

一所司代本多ミの守從關東召來間、來廿八日巳刻參內被仰出了、頗早急之事也、巷說紛々、

廿七日、晴、

一小林來、有示談事、

一當番巳斜參朝、

廿八日、晴、

一所司代御暇參　內也、面會如例、有御對面、關白殿於廐香間有面會、御沙汰書一帋被渡了、

注左、（マヽ）

一退出未半許、

〔橋本實麗日記〕○東京帝國大學所藏本

五月廿六日、庚子、晴、午斜參內、御獻御用奉仕、岡崎侍從所司代俄出府之由傳承之間、三五輩有示談事、別記、酉斜退出、





○中略、

廿八日、壬癸、晴、辰半剋參內、今日岡崎侍從參內、出府賜御暇、有御對面、賜　天盃之事、奉仕了、今日當番直宿仕、

〔土山武宗日記〕○宮內省圖書寮所藏本

五月廿五日、

一所司代本多美濃守殿御用之儀有之、參府可被致旨、被　仰出候段、御附衆達有之、

廿八日、

一所司代本多美濃守殿參府ニ付、今日御暇參　內午剋、御車寄ヨリ昇、　御對面、　天盃頂戴、拜領物之後、伺公之間〳〵被通、酒饌賜之退出申半剋過、相濟、同剋過退出歸宅、翌朝發足候由也、

○中略、

〔雅俗日簿〕○山科言成日記宮內省圖書寮所藏本

五月廿六日、晴、申刻許、遠雷二三聲、奇峯漸散、

一、傳聞、本田(多)美濃守所司代、一昨日自關東達書來、明後廿八日御暇參內、廿九日發足云々、子細不分明云々、所司代發足ニ付兩役參集、現任公卿參集云々、異國人一件云々、

廿八日、陰晴不定、時々雨降、

○中略、

一今日本多美濃守所司代御暇參内云々、少將參御劍云々、御服高倉侍從云々、

件本多、依御用自關東被召云々、御用了、又上京之由云々、

〔庭田嗣子心おほゑ〕○伯爵庭田重行所藏本

五月廿六日、

終日御精進、御代香大ゐ御參り、關白ゐ御參り、御さいめんなる、諸(所)司代本多美濃守事、關東ゟめしに來り候よしにて、來ル廿八日御いとゐ參内の事、傳奏衆ゟ伺有、其通り仰出ニなる、○中略、

廿八日、

朝御盃ゟ、女房御月次詠進有、親康・三角兩人、二度めれ拜診ニて、小座敷へ、御すへ御ゑゟゐニてなる、誘引あふミの守也、新大ゐ御伺ハき、諸司代本多美濃守事、此度關東へ下向ニ付、今日御いとゐ參内、御さいめん、小御所へなる、御引直、表御すへ御ゑゟゐ、御ゟゑおり御服以下男ゟさ、

〔中山績子日記〕



本多忠民東下ト世評

五月廿七日、廿八日、

御き嫌御よし〳〵、廿八日、本田(多)所司代御いとゐ大引、

〔三條實萬書翰〕○子爵澁澤榮一所藏本井伊家秘書集錄所載

○六月四日 大老 井伊直弼宛

向暑之節、倍御揃御安福珍重存候、○中略、

午五月晦

尚々、當地之形勢ニも、彼是心配御筋共有之候、

○中略、

本多美濃守俄ニ參府、何等之事哉と申居候、若哉更ニ上京候事ニも哉与取沙汰いたし候、何ゟと世上人氣立、此上如何と心配ニ候、何も後便可申述候條申殘候、定て當地之義、種々浮說共御聞及共(イも)御座候半、御地之事とも、何ゟ虛說ニ無相違と存候事を流傳候義も有之、不穩之時節治平祈入申候、以上、

又申入候、

○中略、

午六月四日 極密

彦根中將殿

玉机下

## 幕府、大將軍近ク麾下士ノ經書講釋ヲ聽聞スルヲ令ス。

〔老中達〕○續徳川實紀所收温恭院殿御實紀所載

○五月二十八日大目付へ

五月廿八日、經學講釋上聽令、一、備中守殿大目付に、○温恭院殿御實紀

五月晦日、備中守殿御渡御書付、○安政年錄

〔未書〕「午六月朔日、林内藏進を以御渡、」堀田備中守殿御渡御書付寫、○七十冊物類集

午六月朔日、向方ゟ差越、堀田備中守殿御渡御書付寫、○徳川幕府書類觸留、同書附留

御城書海防部

六月朔日、○中略、一、大目付田村伊豫守ゟ、堀田備中守申渡諸向ニ相達候由ニ而、御城付共ニ爲心得爲見申候書付寫○水戸藩

文學相應取廻し候もの、當秋中、經學講釋　上聽・講義漢文相認可入　上覽旨、被　仰出候間、諸事去巳年之通相心得、於學問所林大學頭始儒者共申談、頭々立合、學術之深淺相試、名前可被書出候、且又　御目見以下之者共は、於學問所若年寄出席、講釋幷講義漢文相認候樣可被　仰付候間、撰方等、諸事同樣に可被相心得候、尤以來年々春秋之內、一度宛可被　仰付候間、其段向々ニ可被達候、

經書講釋ノ上聽ヲ令ス





〔目付〕岩瀨忠震書翰〕○橋本景岳全集所載

○五月二十八日　稱井藩士　橋本左內宛

復

拜展、如諭新霽至喜、○中略、

念八

松懶畏契

○中略、講釋　上聽・漢文講義上覽之義、以來年々有之樣、今日被仰出、是又盛典、

此一事、頗可喜也、時事玉石混肴、只石多くして玉の少きを憾のみ、

〔儒者林韓通達〕○帝國圖書館所藏本徳川幕府書類諸事留帳所載

○六月町奉行へ

〔朱書〕「午六月九日來、」

〔町奉行衆〕

爽快

林大學頭
林圖書之助
林民部

（安政年錄　七十冊物類集　徳川幕府書類觸留　同書附留　水戸藩御城書海防部　御書付留）

御目見以下ノ經書進講ヲ合ス

文學相應取廻〻候物、當秋中、御目見以下若、於學問所若年寄衆御出席、經學講釋幷講義漢文相認候樣被仰出、以來年々春秋之內、一度ッヽ可被仰付候間、右學術之深淺相試、名前可書出旨、御立合之上、撰方可致と存候、仍而御支配向之內、四書以上講釋幷漢文兩樣共出來候物御取調、名前短冊拙者共江、早々御廻〻有之候樣いたし度、其上ニ而猶又御相談可申候、此段及御掛合候、以上、

午六月

來春學問御吟味御座候段、別帋之通御達ニ付、右相番限取調、早々可被申聞候、此段申達候、以上、

六月廿七日　　年番

五組月番　　年寄同心中

〔目付岩瀨忠震等通達〕（徳川幕府書類諸事覺帳所載）

○六月町奉行へ

（朱書）「午六月廿二日、持歸ル、」

〔町奉行衆

明春學問所ニ於イテ學問試業ヲ行フ

來未春中、於學問所學問吟味有之候、諸事前々之趣相心得、學問心掛候者ゟ罷出候樣可致候、右ゟ越中守殿御渡ニ付申達候、

一學問吟味ニ付、布衣以上御役人ゟ、惣領・次男・三男・厄介、且寄合布衣以下御役人・御番方小普請之面々・御目見以下之者共、當人幷惣領・次男・三男・厄介等迄一統御書出、尤書出方之儀者、別紙短冊之通相認、三枚ッヽ、御差出之事、

但、厄介之儀ハ、其家ニ居付候ものハ格別、他ゟ引請養育致〻候者ハ、續科幷引請候譯、下ヶ札を以、委細御申聞可有之候、

一吟味書物之定、幷可致弁書數等之書付、學問所ニ而可相渡候間、初而吟味罷出候者ゟ、當人直々學問所玄關ゟ罷越、書付受取、難相分儀も有之候ハヽ、學問所勤番組頭ゟ可被致對談候、

但、問合使者ニ而申遣儀、勝手次第之事、

一吟味請候經書註本相定有之候ニ付、夫ニ而弁書致〻候得共、學派書加短冊可被差出候事、

但、無本ニ而吟味者無之候事、

一弁書認方不案内之者ゟ、吟味當日手本差出置候事、

時務策吟味

一是迄吟味罷出、拜領物有之候分ゟ、書出ニ不及事、

一時務策之儀、去ル辰年之通り、別日ニ御試有之候間、學問所吟味罷出候者ニ不限、有志之者勝手次第罷出不苦候間、是又名前可被書出候、尤御試之當朝差掛り罷出候ゐも不苦事、

一八月晦日迄ニ御差出有無共、御申聞之事、

一頭替・名改其外相替儀有之候ハヽ、其都度々々引替、短冊御差出可有之候、

但、部屋住・厄介等も、同樣御心得可有之候、

右ハ、諸事去ル辰年之通御心得、御書出可有之候、依之申達候、以上、

六月　岩瀨肥後守

鈴木四郎左衛門

○別紙

短冊樣式

長サ九寸二分

朱子學

一初場小學本註

右御試請可申候、

何役

何御番

小普請

何之誰 支配組 歟

誰 恵頭次男三男 歟

一經義科 何々何註 何々何註

右之通御試請可申候、若御試難請候ハヽ、右出來不仕ゟ認、

厄介ゟ何之續

何之誰

午何才

一歷史科 何々 何々

右之通御試請可申候、同斷

何役 歟

浪人

何之誰家來歟

何之誰門人

一文章科論策

右御試請可申候、同斷

右何年何內入門仕、幾年稽古仕候、且師範之者 病死 斷絕 歟、其後誰門人ニ相成申候、以上、

午月

巾四寸四分

鹿兒島藩主島津齊彬 薩摩守 幕府ノ諮問ニ對ヘ、外國ト釁端ヲ開カズ、富國强兵ノ英斷アルベキヲ言フ。

〔鹿兒島藩主島津齊彬答申書〕○公爵島津忠重所藏本島津齊彬公文書所載

○五月二十八日老中へ

墨夷之儀、神州之大患、不容易御時節ニ付、猶又、諸大名所存被聞召度、並永世安全、奉安叡慮、皇國一同、後患無之方略可及言上旨、勅答之趣、並御添書、愼ゐ奉拜見候、先達ゐゟ、再

條約破却然ルベシ

必勝ノ算アリヤ

十分ノ思慮アリタシ

度申上候外、更ニ所存ゟ無御座候得共、左ニ申上候、

勅答之趣ニあれ、下田條約之外ハ、難被遊御許容御事と奉存候、全體萬國ニ致卓絶、赫々さる神州、若夷狄之輕蔑毫髮ゟ有之候ハ、任弘安之御嘉例、彼ゟ非望之邪曲ハ御糾、尊王攘夷、義理之大本ニ被爲基、鎖國之御良法、彌堅固ニ被遊御用、萬一襲來仕候共、神武擴充、御誅伐當然と奉存候、乍併、方今之時勢、能能相考候ニ、二百年來、御治世打續、自然奢侈之風相競、萬民怠惰之志を生ゝ、上下一同、今日之事務ニ逐ゟ、武備忽ニ相成候段、誠ニ恐入奉存候、當時外寇攻守之具ハ、第一大砲礮臺、或堅牢之軍艦等、十分ニ無之候あれ、夷狄とハ申ふゝら、當時戰鬪ニ取馴、戎器を巧制いさゝ、航海等ニも熟練之者共御坐候得ハ、御必勝之筭、如何可有之哉、右ニ付あハ、勅諚之趣を以、御取扱相成候ハヽ、孰兵端相開可申哉、勿論勅諚台命御座候得ハ、人心激勵、爲報國盡忠戰候ハ必定之事御座候得共、前文通、武備相弛、大砲・礮臺・軍艦等、御手薄ニあハ、人々如何程奮發仕候共、忠魂難相遂場合も可有之と奉存候、殊ニ彼等ハ、數ヶ國合體ニあ、若四方邊海ニ致出沒候ハヽ、終ニ御國力及疲弊、內亂ゟ難計、甚懸念仕候、國之大事在祀與戎と、古傳ニゟ相見得候通、實ニ億兆民命之所寄ニあ、皇國御浮沈相拘候大機會と奉存候間、能々御思慮被爲在度、天時不如地利、地利不如人和、まさ王公設險以守其國、險之時用大矣哉等之古言御省察尤之御時節ニあ、第一人和、繼あ諸御手當精實ニ無殘處御行屆無之候あれ、皇國之御守護御奉職難被爲整世態ニ御座候、尤舊典ニも、別段外夷ハ不近付との事も無之、慕皇猷歸化する者にて、姓氏田宅迄ゟ賜、東照宮ゟ英夷に交易免許之御朱印頂戴被仰付候處、寛永以來、彼之邪宗を御一洗あらきら往、御打拂之御建法、此節御變革之儀、彼ニ被壓候樣相見得、實ニ千載之御遺恨共可申候得共、得ゟ天下之形勢相考候ハ、一旦忍小成大之御主意を御基本ニ被相居、假約條通御許容被爲在候外有間敷奉存候、尤條約之內、天主堂取建之儀ハ、今一度御談判有之度、尤和好之義ハ、古ゟ多く偸安之策ニ出、遂ハ從是敗衂を取候事、往々其例も不少候得共、時と位ハ應候儀、肝要と奉存候、併前文假約條通御許容ニゟ相成、自然苟安之風押移、彼之夷賊之邪誘ニ陷候樣罷成候あれ、御興復迚ゟ六ヶ敷、天下之御一大事、災害無此上御儀と奉存候間、何卒假約條御取結之上ハ、御興業之御主意、寸陰も無御油斷、非常之御英斷被相立、御武威四海ニ光被いゐゝ候樣、御盛德を被爲修、萬事舊染之汚習、奢侈怠惰之風俗御一變、諸藩之窮迫ハ御取延、富國强兵之基を被爲植、上下一同、嘗膽之憶を成ゝ、外寇制御之設十分ニ被整度、左候あ、彼等彌邪謀相施候ハヽ、不被爲差置、聲罪御征伐有御座度、左候得ハ、御必勝無疑、自然亦彼よゟ皇化ニ服候樣可相成奉存候、猶又衆議御參考之上、御決定被爲在度奉存候、勿論勅諚台命之上ハ、和戰兩條如何樣共可奉畏候、以上、

外交ノ先例

條約許容ノ外ナカルベシ

## 五月二十八日



別紙申上候通、十分之御手當未被爲整候ニ付ゐ者、假條約御結之外有間敷奉存候、諸家之衆議御參考、方今之形勢、委曲京都ニ被仰上候ゐ、何分ニも御處置被爲在候樣奉存候、御國政御委任之御事ニ者御座候得共、今般之儀者、闔國人心之歸向ニも相拘、永世安全難被量、深被惱叡慮候段、當然之御事、何共恐入次第奉存候、剩公武もほゞ合候姿ニゐ御座候得者、萬一此上御不滿之御事も被爲在候ゐ者、人心之歸向難量候付、萬端御評議有御座度奉存候、人氣致動亂候ゐ者、外寇ゟ可懼時節と乍恐奉存候、且亦西城御養君之御儀、此涯速ニ御治定被遊度、申上候も恐入候得共、加樣之御時節、萬々一希望之御人體有間敷共不被申、一大事之御儀ニ付、一日も早く御評議被爲在候樣奉存候、將又條約御取結ひ、萬事聢と質素之風俗御變革、儀、不被差置、御評議被爲在候樣奉存候、浮華之舊習を一洗仕り、武備擴充ニ取計仕度心底之武備嚴重ニ相成候樣被仰出度奉存候、面々も不少樣子ニ御座候得共、世上之風習ニ泥ミ、又者無餘義差合を憚り居候族も有之哉ニ奉存候、充分ニ被行候樣、上ゟ嚴密ニ被仰出、富國强兵之基相立、御仁政無殘所樣、御所置有之度、伏ゐ奉願候、前文之義、不容易譯合等申上、恐入奉存候得共、當時格別奉蒙御恩

叡慮ヲ奉ジ人心ヲ歸嚮セシムルコト必要ナリ

繼嗣問題ノ決定必要ナリ

京都尊崇風俗矯正ノ必要





澤候間、日夜心痛難忘、不顧恐內々以添書各樣迄奉言上候、以上、

五月二十八日

松平薩摩守

〔島津齊彬書翰〕○島津齊彬公文書所載

○五月二十六日島津久光宛

鬱々敷天氣ニ候處、彌御平安珍重存候、然ゟ、此度別紙御尋ニ付、上書案致出來候間、掛御目候、御考承度候、外ニ早川ゟ申來候江戶樣子書、是又掛御目申候、明日中、御返却可給候、急飛脚廿八日差立之筈ニ候、以上、

五月廿六日

薩摩守

周防殿用事

〔島津齊彬書翰〕○島津齊彬公文書所載

○五月二十八日 宇和島藩士ノ伊達宗城宛

小暑之砌御座候處、彌御安康恐壽之至奉存候、然ゟ、其御地亞奴之事、色々御建白之御事と奉存候、叡慮も恐入、御尤ニゐ御坐候得共、後來必勝之見込無御坐候間、乍殘念假約條之方ニ申上候、草案越前ニ遣候間御披見可被下候、福井御差留、誠ニ大慶之事ニ御坐候、假約條御取結之上、是迄之如く、姑息之事ニゐ者、夫迄之事ニ御座候間、折角御建議第一と

奉存候、〇中略、

五月廿八日　　齊彬拜

天下仰望藍山賢公閣下

猶々、〇下略、

〇本書ノ全文ハ、之ヲ四月三日ノ條ニ、收錄ス。

〔島津齊彬書翰〕〇島津齊彬公文書所載

〇五月二十八日 福井藩主 松平慶永宛

別啓仕候、〇中略、此度再應御尋ニ付、別紙之通ニ建白仕、外ニ添書寫之通申上候、〇中略、且又添書ニ申上候通、約條御取結之義、京師を押付候樣成御處置有之候ゐ者、實ニ以之外之事と奉存候間、是又御賢考專一ニ奉存候、約定之儀、京師御許容被仰出候上者、萬事之御處置一大事之儀、萬々一因循姑息之御處置有之、舊習一洗不仕時者、夫迄之御事ニ付、是又御周旋第一と奉存候、何分ニも、不容易御時節到來、日夜心痛仕候、遠路之義、猶更事情知兼候間、何卒御密示奉希候、〇中略、恐々敬白、

〇本書ノ全文ハ、之ヲ四月三日ノ條ニ、收錄ス。

〔島津齊彬直書〕〇島津齊彬公文書所載

建言所感

外寇ヨリハ内亂ヲ懼ル

〇五月二十八日 江戸留守居 早川五郎兵衛へ

書面相達申候、愈無事珍重ニ存候、扨申遣候條々、委細相心得候、今日所存書も急便ニゐ差出候、此便ゐ、先日之歸便ゟ遣申候、何分不容易時節、扨々心配ニ存申候、御治定之上、京都に被仰上候事ゐ、實ニ不宜と存候、御國内一和無之候事、第一可恐事ニ候處、叡慮御不滿之儀有之候ゐて、如何程關東之御威光ニゐも、當時之處ニゐ者、六ケシ〻と〻ん〻候、外寇ゟ可恐ゐ、内亂とそん〻候、樣子承り合、追々可申遣候、此度之上書添書ニ、右之趣意も認メ遣申候、

一大元丸代金、最早相下り候哉、當地も琉人方其外ニゐ、案外之事有之、大坂に又々申遣候、誠ニ困り入申候、來年ゟ詮立候節儉と存候へ共、當り障有之候間、十分ニ難申付、心配ニ存申候、

一京之方も、此上之御異存ゐ無之とて存候へ共、此上六ケ敷相成候ゐて、大亂到來無疑と存申候、

一發駕ゐ廿八日、九月朔日之内と存申候、江戸御發駕旁ゆへ、別ゐ混雜と存申候、

一琉人王子も最早上國いゐ〻候、唐國賊勢盛ニ候よ〻、接貢船便ゟ申來候、福省も近所迄賊勢參候樣子ニゐ、調文品買欠之品多く候よ〻、細事ゐ相分り不申候、

青龍丸
丹鳳丸

一長さきに亞奴參候由、承り申候、
一芝引移りも、九月廿五日比と申遣候、委細と玄碩方可申遣候間、仙波申談シ可申候、
一青龍丸近日出帆之つもり、炭其外積入遣候、着船候ハヽ、何品ニ而も積入早く可差歸候、
小納戸・茶道方・庭方外之荷物も、積入不相成候、着船之上も、徒目付見締いたし候樣ニ
申付候、山もてハ積入申間敷候、大豆・いりコ・昆布・數之子は宜敷御座候、銅も御座候ハ
ヽ、積入ハ可申候、先日ハ出帆之筈ニ候處、雨降つゝき、其儀相叶不申候、吳々定式大廻
り等ニ積入候品も不相成候事、來月ニ又々丹鳳丸遣ハ申候、拾・務ニ向ケ遣候品も有之
候、炭も其方ニ向ケ遣申候事、椎もけも拾方にも遣候事、先ハ思ひ出候分申遣候、以上、

五月二十八日町便より、

用事

〔新納久仰日記〕○公爵島津忠重所藏本

五月廿八日、御側向ヨリ御内用有之、急飛脚差立候ニ付、道島源五郎へ差向、當暑中ニ付、
御肴料金貳百疋進上ニテ、
宰相樣へ御内々伺御機嫌申上度候間、永江休之丞へ引合、宜敷取計被吳候樣申遣置候
事、



〔島津齊彬直書〕○島津齊彬公文書所載

○五月二十九日早川五郎兵衞へ

一琉人も最早大半致上國候、唐國も當春ゟ又々賊勢盛ニ相成、所々攻取候よし、廣東も未
タ英人と和親不相成、又々六百萬兩可差出旨、英人申候ゟ、廣東之提督一人、英船ニ呼寄
候ゟ、不差歸由、北京ゟ廣東ニ總督向何某とゟ申仁、下向ニ相成候よし、福省も近邊延平
府と申所迄、賊攻入候との事御座候、夫故、品物買欠多御座候、琉球ニ滯留之佛人申候ニ
も、唐國も今來年之内ニも、北京ニ英佛之兩館可致出來樣子と、申越候との事ニ御座候、
朝鮮も英國、日本も亞國引受候ゟ、取計候筈と申候よし、極内承り申候、
一地震之間之事も、未タ不申遣候、是も其内都合ニゟ申遣候、廊下も其節可申遣候間、廊下
之下地も伺通りニゟ、手當可申付置候、地震之間内も、着之上可申付哉と存申候、夫故、
玄碩ゟも何も不申遣候、後便廊下等之事、可申遣候、
一所存書寫、内々遣候ニ、
一拾ニ申付候ゟ、一組五七匁位之もとこ入・きせる筒三十組程、早便ゟ遣候樣可申付候、
一約條取結ニ相成候上ゟ、武備等之御世話可有之樣子之所、委敷承り合可申遣候、此後姑

息之事ニ候ヘ、最早夫限之事と存候、能々承可申候、先ハ用事早々申入候、以上、

五月廿九日

五郎兵衛ヒ

用事

〔島津齊彬直書〕○島津齊彬公文書所載

○五月二十九日島津豊後ヘ

書面相達申候、愈無事珍重存候、扨御暇も無御滯相濟候由、致安心候、御發駕廿六日と御内定之段致承知候、此方發足、廿八日・朔日之内と存申候、武兵衛着之上、可致治定と存候、昨日も、急便ニ候所存書差登セ候、此便ゟ延着と存候、何分不容易時節と存候、扨琉人も、正副使致上着候、此間中、雨續ニ候、申良少々水出申候、都之城、是又水損之屆有之候、昨今漸々晴上り候樣子ニ相成申候、先ヶ先日之返事迄、早々申入候、以上、

五月廿九日

尙々、式日未タ着無之候間、定式ヶ延ひ申候、以上、

〔島津齊彬書翰〕○島津齊彬公文書所載

○六月五日 左大臣 近衞忠熙宛



意見上申ス

近衞忠熙京都近海警衞ヲ託ス

尊書謹而奉拜見候、甚暑之節御坐候處、益御機嫌能被爲成恐悦奉存候、然ヶ、墨夷之義ニ付、委細被仰下候趣、謹而奉承知候、先日、從關東傳達相成候間、所存言上仕置候ニ付、其内御覽ニ及可相成と奉存候、○中略、御請旁御側迄奉申上候、誠恐誠惶謹言、

六月五日

薩摩中將

齊彬 花押

謹上

別啓、

別紙奉言上候、京都近海へ異船渡來仕候ハヽ、防禦之儀相心得候樣、尊命之趣奉承知候、○中略、先ヶ以添書、内々奉言上候、恐惶頓首再拜、

六月五日

猶々、關東ニ言上之書面寫、内々奉差上候、以上、

○本書ノ全文ハ、之ヲ六月五日ノ條ニ、收錄ス。

〔島津齊彬直書〕○島津齊彬公文書所載

○六月九日早川五郎兵衞ヘ

以早便申入候、愈無事珍重ニ存候、然ヶ、西鄕吉兵衞一昨日着、委細ニ承り、又越前ゟ之文

本多忠民東下ニ就イテノ觀察

通有之、相心得申候、仮約條と御取極メ之上、京ニ被仰上、西之事、紀(徳川慶福)ニ可相成様子と被存申候、右ニ付ゐと、二十八日差立候上書添書と、不用ニ候間、其分引殘シ候ゐ差出候様、仙(市左衛門)波迄今日申遣候、前文之通ニゐと、以後之様子如何ニ可相成も難計、堀田(正睦)も危きよ〳〵ニ存申候、又吉兵衛承候へと、本多美濃(忠民)召候よ〳〵、如何ニ候哉、堀田之代りの、西の老のと存申候、其外之様子、細々承り可申遣候、○中略、今日も上書不差出前ニ遣度、昨夜考付、早々申遣候間、壮・玄(山田壮右衛門、重久立顕)等も不存候間、手紙遣間敷、十一日ニ急き差立候間、其節萬事可申遣候、以上、

六月九日晝四ツ時、　　五郎兵衛ゟ

用事

○本書ノ全文ハ、之ヲ六月九日ノ條ニ、收錄ス。

〔島津齊彬書翰〕○島津齊彬公文書所載

○六月十一日松平慶永宛

別紙申上候亞奴之儀、扨々可惡事ニ御座候、定ゐ御建白も御座候と奉存候、小子ニと假條約御取結ひの外、御良策有間敷段申上候、此上之処と、何卒公武御混雜無之様奉存候間、近衞家ゟ右之段内々申上候、

外國船長崎ニ來ル

叡慮ゟ御尤も候得とも、當時之光景、異人之事情、御承知無之故と奉存候、扨閣中も色々變化之事、大老も定て良考可有之、貴君ニも折角天下清謐之儀、御盡力第一と奉存候、其御地之事、細々拜承仕度候、

一唐國も、當正月中ゟ、又々賊勢盛ニ相成候、誠ニ可怖世態ニ御座候、

一崎陽ゟ亞船二艘參居候、定ゐ傳習御家來ゟ申上候事と奉存候、先日と蒸汽船城下ゟ參り候、御家來も乘組罷在、大混雜ニ御座候、以後と成丈ケ不參様、圖書ゟ賴置申候、

一先日ゟ呈書可仕処ニ、湯治以來、色々繁用ニゐ、乍存延引恐入奉存候、猶後便万々可申上候、頓首、

六月十一日

追ゐ、御參府も無御滯被爲濟候事と奉存候、御參府之上と、萬事御盡力專一ニ奉存候、以上、

福井藩主松平慶永(越前守)書ヲ名古屋藩主徳川慶恕(名古屋藩主)ニ致シ、一橋家主徳川慶喜(刑部卿)ヲ大將軍繼嗣ト爲スベキヲ幕府ニ建議センコトヲ勸說ス。

〔福井藩主松平慶永書翰〕○昨夢紀事所載

○五月二十八日　名古屋藩主徳川慶恕宛(繼中納言)

時勢慨嘆

紀伊慶福推戴ノ議ニ就イテ

然は、過日は登館、種々高論相伺、小子ゟも不顧觸嫌見込之條々申上候處、頗戻英旨候義も可有御座哉ニ奉拜察、不堪恐懼義ニ御坐候、乍去此も宗家之御爲一途ニ存込候故御坐候得は、愚哀萬々御憐察可被成下候、扨近來之形勢渾慨歎之事のミニ御坐候、定ゑ追々御聞取も可有御坐奉存候、偖又今般之建議、列藩も大概和親取結可然趣之由、左すれハ、目前之平穩は可喜義、嘸在　朝諸有司も安堵可仕被存候、併愚見を以相考候へは、今以　徳川家御寶祚之御基礎を固候程之大策御盛擧一も無御坐、此儘ニ次第に因循游怠ニ成行候へは、恐くハ列藩も窮窘之餘、或は怨慝を釀し、怨慝之情忽輕蔑之念を可發も難計、且外夷も一旦御厚意を感戴仕候ハ勿論ニ御坐候得共、防禦守衛等御完備無之候ハヽ、猶恩之極、或翻ゑ覬覦之非望を動し候も難計奉存候、萬々一右樣相成候ハヽ、

京師之御憂勞は申迄も無之、幕府ニ於ゑも、實ニ御申譯無之御義と奉存、誠ニ筆紙に難盡、惶惑痛苦能在候、尊君は勿論、小子に於ても、看スゟ々々如此幕府之御不都合を傍觀不可致ハ當然に候へハ、何か良手段を以、右等之後患豫防仕度と、晝夜懇禱能在候得共、只今之勢ニゑハ、迚も小子輩賤劣なる者之獨力ニゑは、難支模樣に相見え申候、則過日來、元老閣老へも屢々一橋公建儲等之義、事情斟酌仕、詳悉申立候得共、唯諸之應答有之のミにて、内實は小子輩之非所可議と申風說も相聞、誠ニ言甲斐なき事ニ相成居申候、其上廟堂中之御樣



一橋慶喜建儲ノ議ヲ上ランコトヲ嘱ス

子ニゑは、南紀公主張之意も有之哉に、方々ゟ承及申候、紀公ハ定て御聰明ニ可有御坐候得共、當今未タ御幼弱之御事故、若愈此公を建儲ニ可申上道理十二分有之御義ニ候ハヽ、今四五年も相過、天下衆心歸向を待候ゑ晩くハ有之間敷奉存候、此節諸方ゟ建儲之事申出候も、畢竟衆望歸定之爲ニ御坐候へハ、自然幼君を立候ハヽ、衆論益洶々として、幕府之御處置、盡諸有司之私を謀、便を好候ニ出候樣申唱候、乍恐終ニ幕府をも奉輕候樣に可相成歟と、杞人之愚誠不堪戰競能在候、尊君ニハ此等之邊、兼々御斡旋も被爲在候義故、態々贅說申上候迄も無御坐候得共、何卒爲宗家今一應御運策被成下候樣奉希候、殊ニ先達御差出之御建白も、閣老ゟ彼是申上、御書直奉願候由傳聞仕候、左すれハ、何れ少々御文面御變換可有之御義と奉察候間、其御文中ニ右橋公建儲之事抔、御加ニ相成候ゑは如何と奉存候、元來尊君御建議中ニも、已ニ

叡慮ニ基き御施設云々之御字面も有之候得は、何分奉安

叡慮候義は、臣子之至情ニゑ、其奉安

叡慮候處、卽幕府之御爲ニも可相成、一舉兩得之策と申ゑは、恐らくハ彼建儲之一策ニ可止歟と奉愚考候、昨日家賴ゟ上館之義、爲及御内調候も、全別義ニ非す、此等之處、厚面晤奉申上度故ニ御坐候、然る處、御所勞之由にて無致方、併事迫勢急之餘、御全快之期待兼、

建儲ニ對スル京都ノ意向

態々以書中機密之大事及謹陳候、尙篤と御取捨之上、御垂教も被成下候ハヽ、幸甚ニ奉存候、頓首、

五月廿八日

本文之一件、近來衆論甚敷候故か、決議之期も相迫候樣ニも被考、且昨日伊賀守へ逢對之處、同人口氣ニも、不遠樣ニも申聞候、尤いつれへ決ニ相成候歟ハ難量候得共、萬一其人ニ不被成御坐候ゐは、天下之失望ニも可相成形勢ニ付、此時ニ當り、國本堅牢、宗社萬安之大策を被定候御任ハ、尊君之外ハ有御坐間敷と奉存候得ハ、何卒神速之御運策被成御座(脫アラン)、爲天下生民、奉仰望倚賴候、將又　廟堂之上、近來之景況、實ニ不堪杞憂次第共、承込候儀も御坐候ニ付、拜謁之上及密告、奉仰高旨度とも奉存候得共、不能其儀、殘念奉存候、自然御尋之思召被成御座候ハヽ、腹心之家臣田彌方迄指上候樣可仕候間、被仰下候樣仕度奉存候、

此頃土佐守方江、京師三條內府(前內府)公ゟ、內用有之家司被指越候由、其節相聞趣ニゐは、關東建儲之義、

叡慮は素より、鷹太閤殿・左府公始、三公何も、橋公御見込之由承及候、左候得は、上は被安叡慮、下は天下蒼生之慰望ニも、此御方之外有御坐間敷と奉存候、

聖慮如斯、又台慮ニも不相背趣ハ、粗定見も御坐候處、是を彼是と支吾致候ハ、畢竟忌賢懼明悖德之說かと奉存候、果して橋公ニ御治定かも不被存候得共、何やらん懸念之義ニ付、宗家之大事、不忍默止、奉汚淸聽、煩倚賴候事ニ御坐候、以上、

〔松平慶永書翰案〕○橋本景岳全集所載

○五月二十八日德川慶恕宛

然ハ、過日ハ罷出、種々高論相伺、小子ゟも見込之條不顧觸嫌申上候處、稍々高旨ニ戻り候儀も有之哉に奉拜察候、不堪恐懼儀ニ御座候へ共、此も幕府之御爲一途ニ思込候故ニ候へば、愚忠之至情御憐恕可被下候、偖近況之形勢慨嘆之至、定ゐ逐々御聞込も可有御座奉存候、偖又列藩建議も、先大抵ハ和親條約取結可然趣之由、左ゟれハ、目前之平穩ハ誠可喜事、嘸在朝諸有司も安堵可仕候へ共、愚見を以て相考候へハ、于今　德川家御寶祚之基礎を固め候程之大策御盛擧一も無御座、此儘ニ成行候ハハ、恐らゝハ列藩も窮窘之餘、或ハ怨慝を釀し、怨慝之情忽輕蔑之念を可發も難計、外夷も一旦之御厚意を感戴ハ勿論ニ候へ共、防禦守衞等御完備無之候ハハ、狎恩之餘、或飜ゐ覬覦之非望を動し候も難計、萬々一右樣相成候ゐハ、京師之御憂勞申迄もなゝ、幕府ニ於ても、實ニ御申譯無之候儀と奉存、誠ニ惶惑痛苦、筆紙ニ難盡奉存候、尊君ハ勿論、小子等ニ於ゐも、看す〳〵右樣幕府之御不都合

を傍觀不可致ハ當然ニ候へ共、何と哉良手段茂以て、右之危害を預防仕度、晝夜專祈罷在候へ共、小生等賤劣之身分ニて、只今ニ到候ゐて迚も如何とも難爲運ニ相成居候、卽過日來、元老閣老へも頻ニ一橋公建儲等之儀、色々懇談篤論申述候得共、殆馬耳風同然ニて、更ニ言甲斐なき勢、扨々失望之事ニ御座候、其上廟堂之御樣子ニゐは、南紀公を御主張之意も被伺候、定て紀公も御聰睿ニて可有之候得共、當今未タ御幼稚之事故、若し愈此公を儲君ニ建候へは、衆論洶々として、幕府之御處置、盡諸有司の私ニ徇、便利を好候ニ出候樣申唱、乍恐終に幕府をも奉輕候ふ可至歟ト、杞人之愚衷不堪戰競奉存候、尊君ふて此等之邊、定ゐ御熟慮も可被爲在、態々贅說仕候迄も無御座候得共、何卒爲宗家今一度御運策被成下候樣奉希候、殊ニ御建白も閣老ゟ彼此申上、御引直等奉願候由、左すれハ、何レ爲其少々御文面御變換可有之御儀と奉察候間、其中ふ右橋公建儲之事抔、御加ニ相成候ゐて如何と奉存候、元來尊君御建議中ニも、已ニ　叡慮ニ基き、御施設云云御條も有之候へて、何分　叡慮を奉安候儀は、臣子之至情ニて、其奉安　叡慮處、卽幕府之御爲ニも可相成、一擧兩得之策と申候ゐて、恐くは彼建儲之御一策ニ可止歟と奉愚考候、昨日家賴ゟ上館之儀、爲願候も全別義ニ非らす、此等之處厚御面晤奉申上度故ニ御座候、然處、御所勞之由ニて、無致方義ニて、如何ニも事迫勢急之餘、御全快之期を待兼、態々以書中機密之大事及謹陳候、尙篤と御取捨之上、御垂敎も被成下候ハて、難有儀ニ奉存候、書不盡言、

松平慶永德川慶恕ノ不誠實ヲ伊達宗城ニ告グ

〔松平慶永書翰〕〇侯爵伊達宗彰所藏本

〇五月二十八日　字和島藩主　伊達宗城宛

肅啓、爾來御淸勝歡抃、陳考昨朝尾臣田氏へ、從家來文通、登館日限問合申上候處、暮天返報有之、主意如左、四五日前ゟ、時邪感觸被有之、今日迄も平臥ニ付、御逢被申かさく段申越候、是詐僞とハ奉存候へ共、何分實事と心得不申候半ゐ考難相成、銘々私欲而已之世態ニゐ、堂々さる華胄迄も、自全之籌策を廻らし、安ゟ之書狀を考候処、足下ニゐ是迄御入も無之故、御斷りと存候、小子へゐ左樣ニハ難申候ゆへ、安迄之書狀ニ、越公ふらハ宜杯、挨拶旁認、從我申遣候節、時邪ニ托し候ゐと致推量候、尤見ぬ事故不知也、兄を欺、安を欺、我を欺くと、不堪激怒候、　廟堂危急ふらハ、病臥中ニゐも、是非面晤と申參候筈ふるへし、何事も時と申ゟ外無之、桐公之姦、尾之不忠、水之不熟、紀臣之跳梁、田之無志、獨　橋無難、　東照宮在天之　上覽、嘸々御配意御殘念と奉存候、僕生而汚辱、死有餘罪、車裂不辭、泣血頓首、

五月廿八日　　春嶽

鶴臺君

二白、時下御自玉是祈、已上、

「楠（封面）軒　君　几下　　靜　軒」

〔徳川慶恕書翰〕（叶夢紀事所蔵）

○五月晦日松平慶永宛

華墨致披閲候、時下不順之候候處、愈御清全被成御起居、抃賀此事ニ御坐候、過日ハ御來駕被下、段々高論之趣承り忝存候、然る處、猶又御懇切之御文意、却而痛心之至、御互ニ爲國家、折衷討論致、次第ニより不遜之申振ニも相運可申、是等之筋、聊御懸念被下間敷候、如尊諭、方今之形勢如何にも危殆之場ニ陥り候哉ニ被存、實ニ爲天下寒心不外、々夷は姑く閣、蕭牆之患も亦可慮之至ニ而、是先之御深憂、實ニ御同意ニ候、且又諸侯伯建白も、追々因循不振之模様相成候上ハ、最早不及是非、此上如何成禍胎を釀し候哉と、不堪憂悶候、附而ハ、兼而も御内話有之候建儲之義、是又御尤御同意に有之候ニ付、已ニ先達登營之節、堀閣迄委曲心底申述置、其節宇和島迄傳言致し、御承知被下候事と存候、猶此上、折を以厚申立度、勿論魯衛之國柄は、別而心力を一致にして、周旋不致してハ難相成存候、其内南紀主張之一群も有之哉ニ略承知、夫等之機邊へも差響候ニ付、麁忽に事を誤り候而は、却而御爲ニも相成間敷と存候へハ、臨機應變、粉碎可致心底ニ而、扨建白書面認替之義、其後何等内諭も無之候、且假令何と有之候ても、赤心申上候義、今更可變ニ無之、左樣變換可致は、赤心之詮は無之と存候、且又御來臨之義も御申越被下、右申述候通別ニ所存も絶而無之候得共、猶御内考も有之候ハヽ、彌太郎へ（松平慶永ノ交通）成とも御打合被下度候、御副書京地之模樣、一橋倚賴之義、委曲致承知、尤外々方も承り込候義も有之候、猶追々可申承候、不備、

五月卅日

二伸、時氣御手當專一存候、宗城より之書、返却之義宜御傳可被下候、早々以上、

三伸、風邪御尋忝存候、全當分之義、御案事被下間敷候也、

〔徳川慶恕戊午春日記〕（侯爵徳川義親所蔵本）

五月廿七日、

越州より、文通有、返書遣ス候、

廿八日、

風邪まて引、

尾州より、二人分出座之由申來、

廿九日、

同斷、



建儲ノコトニ努力スベシ

建白書認替行ハズ

松平慶恕一橋慶喜ヲ建儲スベシト井伊直弼ニ說ク

松平慶恕ノ人物幷其ノ腹臣

安政五年五月二十八日

越州手帋（三十日也）來、儲君之事、

卅日、

同斷、

〔水戸藩士〕鮎澤伊太夫書翰〕○公爵德川圀順所藏本國事記所載

○五月二十四日（同藩士）高橋多一郎宛

五月廿七日、高橋とり來、鮎澤書、

（水井剛藏）永岡へ之御手紙、昨日被參申候間、相渡申候、同人も　御國恩忘却不仕、精々骨折申候間、宜敷申上候樣吳々、扨　尾公ハ誠ニ精々堂々、廿五日、學勞より御掛之節ハ、別席へ井伊を御招き、　勅諚を奉り、　公邊の御爲を計申候ハ、一橋公を一日も早く　西城御直專一与、被　仰立候よし、　幕ニあハ手おぞり、四谷之御隱居樣へ、遠但州等を以、利害を以說付候へ共、確乎与して御動不申、此度御家之再建白、御廻ニあ大御嘆息、櫻溝御承知の上ゟ否窺度ふりニあ、內々田宮より被賴申候よし、竹腰ハ　幕の腹ニあ、堀田ニ被遣、當春歸國之一條も有之、尙種々見付候事有之ニ付、國勝手被仰付候所、堀田を取繕ひ、是より尾公へ御縋、五月一杯延ひ候處、此節上田勝手出入ニ相成候よし、尾公の御腹心ハ、誠ニ僅ニあ、田宮ニ、御小納戸頭取ニあ長谷川宗藏、其外ニ呑込居候もの、御小姓頭取ニあ澤田內藏之允、



側用ニあ渡邊半十郎位より外無之候へ共、第一公御學文も有之、兵學御好、御見識御坐候よし、大越州も、先日迄ハ　幕之模樣穩便ニ致候へハ、獨樣の事出來候故、枉て和親論を以遊說、尾公へも參堂、御論判被爲在候處、大御取合ニあ、此度ハ

勅諚御坐候所、其へ基き不申、如何存意不通節ハ、一人〳〵之存寄次第ゟ被仰ニ付、越州も激論ニハ困ると申候由、返せ〳〵も御家のごと付殘念千萬、併とふニも力ニ不及慨憤〳〵、」立花の立花壹岐（柳河藩家老）、鹽谷弘藏へ歸國暇乞ニ參候節話ニ、伊遠州執筆ニあ上杉持參、閣へ指出申候、大意ハ

勅諚ニ何分御とつれ不被成樣、夷人之申立無據事貳三ヶ條ハ、御取用ハ無止与申風のよし、併感心ニ御坐候、一貴地姦之會合、一鳫形月次云々、扨も〳〵油斷ふり不申候、此節之もとふニあハ、麥より風一吹ニあ、役人撰討位ハ發可申、此表防禦之手段等、更ニ相談も果敢敷無之、ゆかき申候、尤御策ゟも、乍恐知れ不申候へ共、　孝ニも、　櫻溝へ被爲入、姦探索之御相談ニて、監府へも御掛ニ相成申候、確證得申候義第一故、形迹御突留ふら、監察ゟ政府より、御登り被仰立候樣仕度奉存候、此十日計ハ、此表之模樣筆紙ニ難盡、戰の如く御坐候、委細ハ政府より御運ニ御承知奉存候、

五月廿四日、　尙々、嫌疑も避け可申、早速御火中可被下候、

安政五年五月二十八日

日付 岩瀬忠震書翰（○橋本景岳全集所載）

○五月二十七日（福井藩士）橋本左内宛

親　瞥

「日本行記」二本爲持差出候、御寛覽不苦、宜敷被仰上可被下候、過日懸御目置候各國條約、此節刊行世上に遍く相成候方、外國之事情も相分り、盲聾輩の爲めに可宜哉と存、此事を企居候間、御一覽濟候はゞ、御返完被下度候、尤今明日御返しには不及、

○昨日は謙次郎(ママ)能出、新聞最可驚可笑事共に存候、

○蘭人も、來る四日に發足之積りに相成候、先差向き外夷之接待も無之、吾輩放逐之時愈來り申候、御一粲々々々、

○條約書中、少しづゝ加刪、又は全く除候箇所も有之候、校正次第可呈御內覽候、條約第一箇條中の第三號は、丸除に致候、

○別に新聞も無之、豐臣氏も最早措手之手段も有之間敷、見斗りは頗る美舉なり、夫に付、絕巓之震災も有之哉の兆も相見へ候、如何有之哉、

○市尹は英雄傷傑之手揃と相成り、定て鴻業韙績も可多と亦一歎、

○作樂も死中に活を可求と、餘程心配斡旋之樣子に候へども、其功の成否は不可知之勢、



呵々、

念七

端原盟兄

桂痴

〔岩瀬忠震書翰〕（○橋本景岳全集所載）

○五月二十八日橋本左內宛

復

拜展、如諭新齋至喜、條約云々敬領、○愛牛先生（井伊直弼）、上格と少敷葛藤を生じ候哉被察候、昨日（松平忠固）愛牛先生、彼侯と面話あり、何等の事哉、此際若し上格も亦關の如く（久世廣周）ならんには、天下の蒼生やゝ活路を得べし、懇祈々々、

○諸有司格別精勵云々、扨々噴飯に堪へず、貿易邪宗の確論等に至候ては、併呑五洲も亦不難の勢に有之候、此論恐くは「タクチキ」の類なるべし、哄然、

○京師之御答、如諭と竊に鑑定致居候、此節の地合ながら、京師之措置如何有之べく哉と、少々開口之處、廟議既に不拔の策ある語氣也、

○來示云、若や定策云云、更に其信息を得ず、

○豐氏は此末定ゑ繫獄程の事にも可至と相察申候、前市尹の轉役も、半上落下、高格とも、

是迄の通り云々、頻りに流行ものと相成候、賞か罰か、殆不可解者、

○來月四日、蘭人發程、最早小生輩は、愈排擊之時至り申候、來月四日は、猶婢僕の三月四日の如しと一笑、

○此節、上格の長官、二ヶ條程如何之事有之、昨今所云、セウモフリモナク面折に及置候、更に一層の激黜を蒙り可申哉と甘心致居候、御一粲、垂晩取込、草々布字、

念八　　爽快

松懶畏契

明日は小普請之向、大勢御番入有之候、是は尋常之事、文武格別出精之者、明日不時に部屋住より大分被召出候、是は此節の盛擧、講釋　上聽・漢文講義之上覽之義、以來年々有之樣、今日被仰出、是又盛典、

此一事、頗可喜也、時事玉石混淆、只右多くして玉の少きを憾のみ、

〔田安家附家老〕水野忠德書翰〔○昨夢紀事所載〕

○五月二十八日松平慶永宛

昨烏桐閣へ御枉駕之折柄、西議に渉り候處、彌鬼方（德川慶福）に決定候趣、段々御懇切ニ被仰下、委曲奉拜誦候處、只々悲歎ニむせひ候次第、國家彌御大厄ニ御陷とも可申哉と浩歎を極申

將軍繼嗣紀伊慶福ト決定シ浩歎

和歌山藩ノ後繼問題

候、是迄不一方御配慮を被爲盡候も、只是國家之御安全を被爲計候事ニ候處、何事も氷解無益之御拮据と能成候而已ならす、却ゐ仇をなすとも可申次第、乍憚御胸裏如何計りと奉察上候、於私候ゐも、御受相認候氣力も盡果申候、御家臣へも不被仰聞候次第候得共、出格之御懇命ニ付、御內密御沙汰被下候段、御禮難盡奉存候、

一右ニ付ゐは、稚嶂之提封何方ニ歸し可申哉、西條よりと相成候ゐハ、尾と俱ニ末流之胤と相成候事ニゐ、於麥も御手薄ニ相成、天下之人民安堵も仕兼候義、尤其邊桐閣ハ心附可有候得共、逸ハ舊情ニより忌まれ可申、若田君なとと申譯ニも至候ゐハ、於尊館御配慮無此上、御跡々之諸士輩も、他人之御相續とも相成候ゐハ、心裏如何計りと御歎息も被爲在候趣、是又具ニ蒙仰候趣、誠ニ御尤ニゐ、御推考之如く、愚論も起り可申哉候得ハ、右等の御手順ニ可相成も難計、昨日桐へ右之事、御演說不被遊御主意ハ、至極之思召ニゐ、此上も先御見合被置候方ニも可有之哉、西彌稚ニ定候ゐは、其跡之順合至ゐ六ヶ敷、末裔よりと相成候ゐは、前段之御主意通り故、逸無論之場合ニ候得共、是を忌候上は、別に一工夫をめくらし申度事ニゐ、其邊岩へ內話、猶同人より櫻閣を誘候義、何と歟御內諭之趣ニ相試候上、委細可申上奉存候、兼ゐ思惟仕候と打變り候內談と成果、心も進ミ不申事に候得共、又其跡を計り置候も、是亦報國之一誠丹心と、御胸裡を汲取候ゐ、

名古屋藩家老出府シテ徳川慶恕ヲ諫爭ス

勉勵可仕と奉存候、其上尚可奉申上候、

一尾公在國之家老某、此比出府、再々諫諍ニ及、遂ニ說得仕、暴論を被變、建議も認直に可相成、就ゐハ逸論を主張被致候事ニ相決候由、岩より極密内話有之、御安心のため、左内迄及文通可申旨、申聞候、最早御承知と奉存候得共、一寸申上置候、乍然前書之譯ニゐは、十日の菊と相成候哉ニ被察候、關宿ニは、一昨日より御病名相變り、御全快無之樣子、一藤も彌表向と相成候哉ニ被察候、關宿ニは、一昨日より御病名相變り、御全快無之樣子、全ク彼か所爲に可有御坐哉、何共恐入歎息之至ニ奉存候、何事も此節の天色同斷、何れの時にや位育之風景を仰き可申哉と奉存候、

〔福井藩士〕中根靱負書翰（○橋本景岳全集所載）

○五月晦日橋本左内宛

尾公より南紀へも御相談可然と被存候、餘程攻擊劑田宮之執匙にては手ふるひ可申哉にも候へば、正論劑にも加味候處方丈けにても、論試度哉にも心付候、早々以上、

五月晦日　　拙　拜

景　兄

〔昨夢紀事〕

松平慶永松平忠固ヲ訪ヒ時事ヲ談ズ

勅諚ノ事

五月廿六日、安島彌次郎より師質へ手簡にて、遠江守殿（伊達宗城）市ヶ谷（名古屋藩邸）へ御出之事ハ御斷りにあり、たれと、公（松平慶永）ハ嫌疑も坐さねハ御入ありても然るへきよし田宮彌太郎もいへれは、近日御出ありて御相談あり度よし○中略○を申越したり、

一、此夕、平山謙二郎左内か許へ來りて、關白殿兼ゐ好色の癖坐せしに、御女なる女御の御方へ御入の折柄、其れか女房の内と猥りかはしき御事ありしか、近き比發覺して、一の人のあるへき筋ならねハ、其罪によりて遠からす褫職にもなるへきとの沙汰ある由を密話せり、

五月廿七日朝、松平伊賀守殿へ御出あり、先つ專と水戸前中納言殿御建白御引直の事、御承知には候へと、猶能く御考ありて、御草稿もて御相談もあるへき歟の由を仰述られ、夫ニ就ても、今後の御處置を被爲問しに、いつれに大變革なくてハ適ハさる事にて、近比ハ諸有司も職分に打はまりて精勤すれハ、一入御都合宜きなとしたり顏に申さる、京都の事ハ如何なさるにやと問はせ給ふに、御使の人に乏しけれハ、所司代を御呼下しにて、能々申含めて申上させ、御許容の事ハ奉書にて申越ても濟むへく、且此頃命せられたる御附武家ハ、大久保右近將監、一ト氣象ある者候へハ、大方ハ行屆き申へくとこそおもひ候へと、唯關東の議をのみ押立て、

安政五年五月二十八日

條約調印ノ件
貿易ノ件
宗教ノ件
建儲ノ件

勅諚の上にハ更に氣付る樣にハ見えす、公又墨使ハ如何にと仰けれハ、伊賀殿期月七月廿七日迄に延て候へハ、夫迄にハ事調ふへき見込にて候と申さる、開港ハ何處に定まれるやと問はせ給ふに、此事ハ近日觀光丸に乘りて浦賀以內を乘廻し、見分の上にて取極候はんと申さる、公又貿易ハ如何と問はせらる、伊賀殿交易御免とたになれハ何の施設にも及はす、諸國の物產自ら江戶に輻湊して、都下の繁昌も他日に倍すへしと申さる、諸侯の疲弊ハ何の術を以て救ひ給ふと問はせらるゝに、銀鈔の策を建たる者あり、此方なと然るへくと申さる、邪教の事ハ如何にと問はせらるゝに、此事につきてハ諛淫邪道の諸辨も盡たるにや、唯何程の事かあらん、其時に臨みて兎も角もせん樣あるへしといはれたり、公最後に扨西城の御事なにとなり候や、殊の外成る御手間取れにて、嘸御心痛あらるへしと仰せられしかは、伊賀殿ウンと仰ケ反られ、額上の血脈を太とくし、忸怩たる顏色にて、兎の角のと六ヶ敷候て、いまた御老中にて御決しにハなり候はす、されといつれに近き程にハ御定りにもなるへき歟、猶おほしよりも候にやと申さる、公存寄たる事ハ是迄幾度となく申上たる如くにて、此節　刑部卿殿ならてハ人心の繫著覺束なくこそ候へ、自然紀伊殿と御定にもなる事に候ハヽ、今少御年長せられ候を待せられんかたよかるへからんと仰けるに、伊賀殿御尤至極の御事にて、僕ハ何所迄も刑部卿殿の御事、御同意に候得ど、



台慮といひ、奧向にも指支へて胸苦敷候へと申されて、一ツとして取留たる覺悟ありとも見えす、まして西城の御事ハ其機近きにありて、伊賀の顏色の變りたるにても、南紀に定められんに決せりと覺えたりと、御歸殿の上の御大息大方ならす、西城の事已に決せられて御發表ともなりなんにハ、爲んすへもなけれハ如何にもして決せられぬやうにこそあらまほしけれ、此上ハ尾張殿と謀りて、彼人より刑部卿殿ならてハ適ひ難き旨を、嚴敷申されなハ挽回の一助になりもやせん、猶備中の意衷をも問ひ聞くへけれと、返す〳〵も伊賀の腹黑きこそいと惡くけれ、顏色の變る計りの際になりても、刑部卿殿の事を主張するさまに妄語せる、天を欺かんとするにやと御憂悶御憤怒限りなし、

○中略、

一、此夕、岩瀨肥州ゟ左內へ投書あり、如左、

○五月二十七日附、目付岩瀨忠震、福井藩士橋本左內宛書翰、上ニ掲グルヲ以テ之ヲ略ス。

○中略、

五月廿八日、尾張殿へ近日之內御出被成度と被仰入しに、御所勞の由にて御斷りありし故、今日被進御內書、如左、

○五月二十八日附、福井藩主松平慶永名古屋藩主徳川慶恕宛書翰、上ニ掲グルヲ以テ、之ヲ略ス。

○中略、

松平慶永堀田正睦ヲ訪フ

一、此夕、岩瀬肥州ゟ、左内へ投書、如左、

○五月二十八日附、岩瀬忠震橋本左内宛書翰、上ニ掲グルヲ以テ、之ヲ略ス。

一、此日、水野筑州よりも呈書あり、要件抄出する左のごとし、

○五月二十八日附、田安家附家老水野忠徳松平慶永宛書翰、上ニ掲グルヲ以テ、之ヲ略ス。

五月廿九日、此夕、堀田備中守殿へ御出ありて、御相對の上、廟堂頃日の景況如何と御尋ありしに、備中殿愧チたる面持チにて、最早是非もなき事にて、紀州殿と決し、來ル朔日に八、三家・三卿・溜詰衆へ、御内意被仰出、表向の御弘メハ、朔日の御内意、京師へ御伺濟にて、六月末・七月始にもふるへき歟と申さる、○中略

五月晦日、今朝尾張殿へ、明日建儲の御内意あるへき旨、昨日備中殿ゟ御聞込候間、猶又斷然として刑部卿殿ふらてハ適ひかたき旨、御主張あるへき樣、御内意を被仰進たり、但、御草稿を逸す、

○中略、

一尾張殿ゟ、去ル廿八日に被進たる御内書の御返翰來れり、如左、

○五月晦日附、德川慶恕松平慶永宛書翰、上ニ掲グルヲ以テ、之ヲ略ス。

一、水筑州を被仰遣、田安殿へ、御内意の節、御幼弱之御方にて不可然旨、被仰セ立候樣、可



橋本左内田宮彌太郎ヲ訪フ

赤坂溜池邸ニ於ケル調練ノ許可ヲ請フ

及周旋旨を命せられたり、筑州も京師御伺之節、降勅にならてハ、關東にての御盡力ハ御行屆被成間敷由を、建言せられたり、

一、安島彌次郎を被召呼、昨日備中殿にての御次第御申聞、事機大に迫りたれハ、老公除姦の御策も速に御施行あつて、建儲の義も御幼弱にてハ不可然候へハ、田安殿・尾張殿の内、御養君に被爲建候樣、遮ゟ被仰立候樣被成度旨を、被仰含たり、

一、橋本左内を田宮彌太郎か許へ被遣、昨日の次第申聞、明日の御内意により、尾張殿十分之御主張に相成候樣、可及周旋旨被仰越處、彌太郎も建儲御主張之儀は、擔當して取計ひ候はんと、御請申上たるよし、

福岡藩主黒田齊溥美濃守 赤坂江戸溜池中屋敷ニ於テ調練ヲ行フノ許可ヲ請フ。幕府、之ヲ聽ス。

〔福岡藩伺書〕○侯爵黒田長成所藏本江戸御用狀所載

○五月二十八日老中へ

調練之儀伺書控寫

美濃守赤坂溜池端中屋敷內明地ニゟ、人數調練爲仕度、時宜ニ寄、鐘鼓貝相用候儀ゟ可有御座、兼ゟ鉄砲角場伺濟之儀ニ付、空砲打方を茂爲仕度、此段奉伺候、以上、

安政五年五月二十八日

五月廿八日　御名家來　大野小辨次

〔朱書〕「六月五日、御指圖相濟、御付札有之、伺書差越來候付、此處ニ朱書ヲ加ヘ置、御付札、可爲伺之通候、」

〔福岡藩在府家老書翰〕〇侯爵黑田長成所藏本江戸御用狀所載

〇五月二十八日在國同役宛

以御飛脚一筆致啓上候、

少將樣益御機嫌能被成御座奉恐悅候、於當御地

侍從樣　上々樣益御機嫌能被成御座候、

〇中略、

溜池邸ニ於ケル洋式調練

一御側向其外定府之面々、西洋調練仕居申候處、空砲等之儀も有之候付、兼ゐ溜池御屋敷ニゐハ、鉄砲角場御伺濟ニも相成居候事ニ付、御同所ニゐ調練致〻候儀、御伺相成居候方可然与申合候、右ニ付、御並樣ニゐ、右樣御伺立之御振合承繕、御出入御小人目付にも内分及引合候上、伺書別紙之通相認、御用賴奥御右筆組頭格加藤惣兵衛殿に及御引合候處、御存寄も無之候付、淸書申談、今廿八日朝、御用番中務大輔樣（脇坂安宅、老中）に、小弁次持參、御用人を以差上候處、御落手被成、追ゐ御指圖可被成旨被仰聞候、右ニ付、御指圖濟之趣者、追ゐ申上ニゐ可有御坐候、則右伺書控、差上之候、

〇中略、

五月廿八日　江戸御留守方　惣中

御國　惣中

二十九日　幕府、目付ノ事務分掌ヲ更改シ、岩瀨忠震（肥後守）ニ人足寄場掛・軍艦操練掛・武器修覆取扱・朝鮮信使聘禮用掛ヲ、鈴木四郎左衛門（直列）ニ勝手掛・儉約筋用掛・日記掛・醫學館掛・學問吟味取扱・濱邸見廻・系譜調取扱ヲ、津田半三郎（正路〇後近江守）ニ淸水明邸模樣替掛・大船製造掛ヲ、駒井朝溫（左京〇後山城守）ニ外國貿易筋取調掛・軍制改正掛ヲ、野々山鉦藏（兼寬〇後丹後守）ニ海防掛ヲ命ズ。

岩瀨忠震以下轉役

〔安政年錄〕〇内閣文庫所藏本

五月廿九日、〇中略、

人足寄場掛　御目付　岩瀨肥後守

御勝手御取締掛
御倹約筋之御用

外國貿易筋
取調御用

海防懸り

右於新部屋前溜、備中守(細田正陸、老中)申渡之、本多越中守(忠徳、若年寄)侍座、

御軍艦操練之御用

右於同席、伊賀守(松平忠固、老中)申渡之、侍座同前、

御軍制改正之御用

右於同席、紀伊守(内藤信親、老中)申渡之、酒井右京亮(忠学、若年寄)侍座、

御武器御修復
取扱

右於同席、本多越中守申渡之、

朝鮮人來聘御用

同　鈴木四郎左衛門
同　駒井左京
同　野々山鉦藏
御目付　岩瀬肥後守
御目付　駒井左京
岩瀬肥後守
同　人



御日記掛
醫學館掛
學問吟味取扱
演御用屋敷見廻り

右於同席、本庄安藝守(道貫、若年寄)申渡之、

御系譜調取扱

右於同席、酒井右京亮申渡之、

清水男屋敷御
模様替御用

右於同席、備中守申渡之、

大船其外御船々
製造之御用

右於同席、伊賀守申渡之、

○高麗環雑記ニモ、本書ト同一内容ノ記事アリ。

〔堀田正睦日記〕○東京帝國大學所藏本

五月廿九日、

一四ツ御太鼓ニ而出宅、登　城四半ニ二寸前、

但、大和殿快方不參、

安政五年五月二十九日

鈴木四郎左衛門
同　人
御目付　津田半三郎
同　人

一伺泊方若狹守、

一召出無之、

○中略、

一新部屋前溜自分斗出座、越中守侍座、御目付岩瀨肥後守に、申渡有之、

○中略、

一退出九半に二寸前、

〔內藤信親日記〕○子爵小笠原長生所藏本

五月廿九日、

一四ツ御太鼓ニ而出宅、

一登　城、四半に二寸前、

一御機嫌御側衆安藝守ゟ伺之、

○中略、

一召出無之旨、安藝守申聞之、

一自分計、新部屋前溜に出座、右京亮侍座、

御目付

堀田正睦出座ス

內藤信親出座ス



御軍制御改正之御用、可被相勤候、

右申渡、畢而引、

○中略、

一御用相濟、使遣一同退出、九打三寸廻り、

幕府、學問所教授方出役山口五郎次郎○新番頭勘兵衛養子・講武所調方出役山本原八郎○小性組左膳嗣子・學問所世話心得頭取井上彌三郎○小普請組士・同世話心得板橋鍈太郎○同上等三十人ヲ兩番ニ、學問所教授方出役榊原鉦次郎○小人組士巳太郎養子ヲ小十人組ニ、同濱田金次郎○西丸切手門番頭三次郎養子ヲ大番ニ、竝ニ番入ヲ命ズ。

〔幕府沙汰書〕○東京帝國大學所藏本

五月廿九日、

○中略、

駒井左京

新番頭（直養）勘兵衛養子

學問所教授方出役

山口五郎次郎伊東成一郎等學問出精ニヨリ兩番入

安政五年五月二十九日

學問厚く心掛候趣ニ付、被
召出、兩御番ニ御番入被



山口五郎次郎

御小性組
曾我若狹(助豫)守組
采女惣領
御系圖調出役

伊東成一郎

御小性組
高木兵部(守雄)少輔組
寛十郎養子
學問所教授方出役

塚原重五郎

御書院番
松平美作(信庸)守組
忠次郎惣領
學問所教授方出役

新井孝太郎

山本原八郎文武共心掛タルニツキ兩番入

井上彌三郎板橋鍈太郎等學問出精ニヨリ兩番入

仰付、御切米三百俵ツヽ被下、孝太郎儀老、御切米貳百俵被下、勤候内三百俵之高ニ、御足高被下之、

御小性組
松平對馬(近昭)守組
左膳惣領
講武所調方出役

山本原八郎

文武共心掛宜、講武所御用出精相勤候ニ付、被
召出、兩御番ニ御番入被
仰付、御切米貳百俵被下、勤候内三百俵之高ニ、御足高被下之、

小普請組
小笠原彌(長儀)八郎支配
學問所世話心得頭取

井上彌三郎

松平采女(忠愛)支配
同世話心得

板橋鍈太郎

川勝光之輔
井上啓次郎
等講武所御
用出精ニヨ
リ兩番入

安政五年五月二十九日

學問出精仕、學問所掛役ヲも相勤候ニ付、兩御番御番入被
仰付、彌三郎儀ハ、勤候内三百俵之高ニ、御足高被下之、

戸川主水(達本)支配
同
瀧川清三郎

小普請組
大嶋丹波守(義彰)支配
川勝光之輔
井上啓次郎
須藤與三郎

奥田主馬(忠敬)支配
日根野藤之助
坂部榮之進

仙石右近(久拵)支配
前田左京
富永雄之助



吉田與助
加藤忠左衛門
木城安太郎

松平采女支配
彦坂勇太郎

戸川主水支配
横田鍈之丞
朝比奈織之丞
疋田鍾次郎
野澤粂五郎

阿部兵庫(正外)支配
松平鎌藏

講武所掛御用出精相勤候ニ付、兩御番江御番入被
仰付、與助・忠左衛門・安太郎・粂五郎儀者、勤候内三百俵之高ニ、御足高被下之、

小笠原彌八郎支配

伴野金三郎
加藤捨太郎
等講武所稽古出精ニヨリ兩番入

榊原鉦次郎
學問出精ニヨリ小十人組ニ番入

伴野金三郎
加藤捨太郎
松平采女支配
鷲巣鸞太郎
神谷清十郎
戸川主水支配
安部勝太郎
阿部兵庫支配
小堀隼人

講武所ニ罷出、出精稽古仕候ニ付、兩御番ニ御番入、被
仰付之、
○中略、

小十人
本多一學組
巳太郎養子
學問所教授方出役

濱田金次郎
學問所出精ニヨリ大御番入

學問厚く心掛候趣ニ付、被
召出、小十人組ニ御番入被
仰付、御切米百俵被下、勤候内百俵十人扶持之高ニ、御足高・御足扶持被下之、
右於菊之間縁頰、掃部頭・老中列座、中務大輔申渡之、若年寄中侍座、

榊原鉦次郎

西丸切手御門番之頭
三次郎養子
學問所教授方出役
濱田金次郎

同斷ニ付、被
召出、大御番ニ御番入被
仰付、養父本高之通り、御切米被下、勤候内貳百俵之高ニ、御足高被下之、
右於同席、列座同前、同人申渡之、

〔安政年錄〕○内閣文庫所藏本
五月廿九日、○中略、

小普請組

井上彌三郎
等四人兩御
番入

川勝光之助
等十六人兩
番入

學問出精仕、學問所掛り役をも相勤候ニ付、兩御番ニ御番入、被仰付之、

七六八

小笠原彌八郎支配
學問所世話心得頭取
井上彌三郎

小普請組
松平采女支配
同 世話心得
板橋鍥五郎

同
戸川主水支配
同
瀧川清三郎

小普組請
大嶋丹波守支配
川勝光之助
井上啓次郎
須藤與三郎

同
奥田主馬支配
日根野藤之助
坂部榮之進

同
仙石右近支配
前田左門（イ原）
富永雄之助
吉田與助
加藤忠左衛門
木城安太郎

同
松平采女支配
彦坂勇太郎

同
戸川主水支配
横田鐵之丞

七六九

朝比奈織之助（イ丞）
疋田鏡（イ鐘）次郎
野澤粂五郎

同
阿部兵庫支配
松平鎌藏

伴野金三郎等六人兩番入

講武所懸り御用出精相勤候ニ付、兩御番ニ御番入、被　仰付之、

小普請組
小笠原彌八郎支配
伴野金三郎
加藤捨（イ助）三郎

同
松平采女支配
鷲巣鶴太郎
神谷清三郎

同
戸川主水支配
安部勝三郎

同
阿部兵庫支配
小堀隼人

山口五郎次郎等四人兩番入

講武所ニ罷出、出精稽古仕候ニ付、兩御番ニ御番入、被　仰付之、

○中略、

新番頭
勘兵衛養子
學問所教授方出役
山口五郎（イ宗）次郎

御小性組
曾我若狹守組
采女惣領
御系譜調（イ國）出役
伊藤成（イ誠）一郎

同
高木兵部少輔組
寛十郎養子

山本原八郎
兩番入

榊原鉦次郎
小十人組入

學問厚心掛候趣ニ付、被　召出、兩御番ニ御番入、被　仰付之、

學問所教授方出役
塚原重五郎

御書院番
松平美作守組
忠次郎(四)惣領

學問所教授方出役
新井孝太郎

御小性組
松平對馬守組
左膳惣領

講武所調方出役
山本原八郎

小十人
本多一學組
巳太郎養子

文武共心掛宜、講武所御用出精相勤候ニ付、被　召出、兩御番ニ御番入、被　仰付之、

○中略、



濱田金四郎
大番入

學問厚心懸候趣ニ付、被　召出、小十人組ニ御番入、被　仰付之、

學問所教授方出役
榊原鉦次郎

右於菊之間椽頬、掃部頭・老中列座、中務大輔申渡之、若年寄中侍座、

西丸切手御門番之頭
三次郎養子

學問厚心掛候趣ニ付、被　召出、大御番ニ御番入、被　仰付之、

學問所教授方出役
濱田金(一藏)四郎

右於同席、列座同前、同人申渡之、

○水戸藩御城書海防部・高麗環雜記ニモ、マタ本書ト同一内容記事アリ。

〔日付〕岩瀬忠震書翰〕○橋本景岳全集所載

○五月二十八日　福井藩士　橋本左内宛

復

拜展、如諭新霽至喜、○中略、

念八

安政五年五月二十九日

松懶畏契

明日は小普請之向、大勢御番入有之候、是は尋常之事、文武格別出精之者、明日不時に部屋住より大分被召出候、是は此節の盛擧、○下略、

○本書翰ノ全文ハ、之ヲ五月二十八日ノ條ニ、收錄ス。

〔本間大學日用雜記〕○續新史料編纂會所藏本

五月廿九日、癸卯、天氣晴、

○中略、

今日小普請組ゟ八拾人、兩御番入被　仰付、其外講武所・學問所掛り役幷御役人・部屋住之者共、同斷ゟ百人餘之、

京都所司代本多忠民　美濃守○岡崎藩主　京都ヲ發シ歸府ノ途ニ就ク、

〔曇華院日記〕○續新史料編纂會所藏本

五月廿九日、癸卯、晴、

一所司代本多美濃守殿、關東ゟ御用召、今日發足也、

〔雅俗日簿〕○山科言成日記宮內省圖書寮所藏本

五月廿六日、晴、○中略、









一傳聞、本田美濃守(忠民)所司代、一昨日自關東達書來、○中略、廿九日發足云々、

〔小倉藩京都留守居三澤十太夫書翰〕○伯爵小笠原長幹所藏本　○小倉藩記錄所藏

○五月二十九日　在國同藩家老　小宮四郎左衞門等宛

一筆啓上仕候、

殿樣益御機嫌能被遊御座奉恐悅候、然ゝ、本　美濃守樣御儀、御用召之御奉書、去ル廿五日御到來ニ付、今廿九日京都被成御出立候、此段爲可得貴意如斯御座候、恐惶謹言、

五月廿九日　　三澤十太夫

四郎左衞門樣

監物樣

〔小倉藩京都戊午日記〕○伯爵小笠原長幹所藏本

五月廿九日、晴、

一本　美濃守樣、今日爰元御發駕、大津驛御晝休之由、

但、江戶・小倉御家老中へ申上候、

江戶御用人中にも申越候、

福井藩主松平慶永　越前守　老中堀田正睦　備中守　ヲ訪フ。正睦、大將軍ノ繼嗣遂

ニ和歌山藩主德川慶福（參議）ニ決セシコトヲ告グ。慶永、歸途高知藩主山內豐信（土佐守）ヲ訪ヒ、前內大臣三條實萬ニ賴リテ、一橋家主德川慶喜（刑部卿）ヲ大將軍繼嗣タラシムベキ內勅ヲ幕府ニ降サレンコトヲ議ス。

〔佐倉藩戊午年集〕（○伯爵堀田正恒所藏本）

五月廿九日、晴、

○中略、

堀田正睦松平慶永ト會ス

一八半時、於大書院松平越前守樣ニ御逢有之、

〔福井藩主松平慶永書翰〕（○侯爵伊達宗彰所藏本）

○五月二十九日（宇和島藩主）伊達宗城宛

敢呈研北、暑熱礫石、御動定御佳安、躍然賀上候、今夕櫻閣へ逢申候、爾後又々景況可及縷陳候、容堂一昨日櫻閣へ面晤、頗宏嘆、寂早不可藥之事と申來候、今夕ハ夫ゟ鯨海へ登館之筈ニ御座候、委曲明後日可申上候、

松平慶永山內豐信等堀田正睦ト會ス

○先日拜借之冊子完趙、御收手可被下候、

○昨日一溪へ文通、未ゟ裁答無之候、

廿九日

二白、時下御自玉、今日老、對柳卸鞍之趣、昨日世子ゟ申來候、敵ゟせぬさめ、機嫌をとる爲ゟ、一書差遣候、余程過賞申遣候、我道の妨害をせぬ用心ニ、足下必御油斷不可有、呵々、

北陸迂史

〔封筒〕「伊遠賢公　几下　　宋　錄」

〔松平慶永書翰〕（○侯爵伊達宗彰所藏本）

○五月晦日伊達宗城宛

夏色流金、御嘉勝、躍然大賀、扨昨日申上候通り、櫻老へ面晤之処、寂早明日發露之趣、尤兩・卿・三家・溜りへ出申候、是ノ口上ニハ、御筋目之御方養君云々と而已、橋・紀ニ沙汰ハ無之、賢稚分判ハ、來月下澣、七月上旬之內と申事、是眞之發露ニ、此內ニ（賢稚內々分判、外洩無之ヲリ、まさも幸ふれ、）回天之施策肝要と奉存候、大略如斯、委曲家僕爲御相談差上候、御聞取　高明之賢考御垂教候、

建儲六月朔日發表トノコト

○水筑ゟ、我ゟ所謂之布恬廷之大響銃、先日差出置候、小道具も付屬、是華邑へ被遣候哉相伺度候、當地ニ有之候ハヽ、小道具丈ケ御返〻被下、家僕雪江へ御直ニ御渡可被下候、右之段早々、只今他適前、閣筆不具拜、

安政五年五月二十九日

晦　　迂　憬

龍館公閣下

二白、時下御自玉専一存候、已上、

昨日醉俟へ參り、歸り初更、醉俟不醉、呵々、

（封筒）「密　　迂憬」

〔伊達宗城御手留日記〕○侯爵伊達宗徳所藏本

五月廿九日、晴、七十六、夕八十三、

一六半過、目覺、朝飯二ツ、水かゝる、一大膳參る、○中略一昼飯二ツ、一ぬかく、もつのひ候、一八時奥へ參る、一越前・土州ゟ參り、返事遣ス、一藤堂と若狹守へ、自書遣ス、一夜食二ツ、○中略一五時過、寐、

同晦日、晴、七十九、八十五、

一六半時、目覺、水、朝飯二ツ、一かきものする、一大膳一寸參る、永も參り候、一昼飯二ツ、一ぬきりでき、一寸參り候事、一越前家來參り、出坐逢、用事承る、一八半時前、奥へ參り、くゝ〜茶のむ、一七半時過出坐、かみ月代入湯する、○中略一五時、出坐やすむ、

松平慶永山内豊信ヨリ來狀

福井藩士來リ訪フ

堀田正睦松平慶永ニ將軍繼嗣ハ紀州慶福ニ決セシヲ告グ

堀田正睦ノ立場

〔昨夢紀事〕

五月廿九日、此夕、堀田備中守殿へ御出ありて、御相對の上、廟堂頃日の景況如何と御尋ありしに、備中殿愧チたる面持チにて、最早是非もなき事にて、紀州殿と決し、來ル朔日に八、三家・三卿・溜詰衆へ、御内意被仰出、表向の御弘メハ、朔日の御内意、京師へ御伺濟にて、六月末・七月始にもふるへき歟と申さる、公も御失望の極にハあれと、ふさるへき樣もあらせられねハ、每度申上候如く、かゝる御時節ニ當りて、御參謀にならせらるゝと申にもなき幼冲の御方を、何故に左樣に御差急き御立に相成哉と仰せらる、備中殿、されハ御急きにも及ばぬ事に候得と、兎も角もはやく紀州殿に御決定なくてハ、人望愈刑部卿殿に歸し、事六ケ敷なるへけれハとて、ケ樣に急速の次第となり、大變の事にこそ候へと申さる故、公仰に、足下の左程に大變とまて御心得ある事を、何とて御傍觀候哉、御持論御主張あつて議合はすんハ、急流勇退の時にハ無之哉と詰らせらるゝに、幾度か左樣にも存候ひしかと、夫にて天下の御爲になるへき見詰もなく候ひし故、今日迄もかくて候なりと申さる、さらはありかひに、今一度反覆挽回の手段あるまじきかと問はせ給ふに、中〳〵六ケ敷候得とも、尾張殿抔より嚴敷仰せ立られなハ、夫に縋りて又周旋の致しかたも有へきにや、何につけても唯壹人孤立の事候へハ、行届くへくも候ハすと力ラなげに申さる、

對京都善後策

公京都への御伺は如何なる御振合にや、御名指にも候哉と問はせ給ふに、イヤ御名指には候はす、御養君被仰出候思召の旨、御伺になり候へハ、目出度思召と計り御返答ある御先格にて候と申さる故、其節京都ゟ御名指の御沙汰なとにはならさるやと宣ふに、さる事も候はんかと苦心致居候と答へらる、若しさる事になりなは、條約の事も、建儲の事も兩な

堀田正睦ノ進退

から達

勅となり、其罪悉く足下に歸し可申候へハ、其時足下を貶黜して、申譯の料理種にせんとの事なるへしと被存候へは、しかし唯今十分に正論を御押張、御物別となられなハ、天下の有志も足下の有識に服し申へく、又建儲を遷延する計の事ニハ成ぬへし、さるをおめ〳〵と御勤めあられなハ、遂に奇禍を來たさるへくと、甚笑止千萬に存候と仰けれハ、僕も約る處ハ身の上ともふるへくとハ存候へと、引くにも引かたくてといへる如き優柔無斷の有樣にて、更に奮發の氣色もふし、公も今日はおもほす儘に御激勵ありて、引退もせられん樣にとの御心算なりしかと、かくさまなれハ仰せらるへき樣もあらせられす、紀の跡式ハ如何と問はせらるゝに、こハ何とも申かたく候と、含糊の体にあられしとそ、永井鴻臚・岩肥州の危ふかりしハ保全を得、鈴木藤吉郎ハ追々鞫問にも及はるへき運ひのよし、大和殿關係の筋もさしたる事もなくて、近き程にハ出仕せらるへき抔の事も御物語申

永井岩瀬鈴木ノ進退

上られしなり、

一公、備中殿の申上られし事を御熟考あるに、内儀已に定るに似たれとも、動きなきにもあらさるや、尾張殿被仰立の事をも申され、又朔日の御内意も、京都の伺も御名指の事はなけれハ、未定の形象ふきにしもあらす、且

一橋慶喜ヘ御指名ノ策

天意の在る處も昭々なれは、猶人事を盡さすしては九仞にして井を廢すといふへしと、今一層の御奮激にて、御歸殿の折、土佐殿へ御出ありて、備中殿云々の次第御物語ありて、京師へ御伺成りたらん時、刑部卿殿に御定めあるへしと、公然降

福井藩上下一橋慶喜ノ爲メニ盡力セント決ス

勅あらせられん樣御周旋あるへしと、三條殿へ御申越あられん事を御相談被爲在たり、一御歸殿の上、執政初例の面々召出されて御評議ありしに、公の思召す如く、機を見て手を拱すへき時にハあらす、殊更に人事を盡さるへきに御決評なりき、紀州の御跡の事を備中殿物あり氣に御答へに及ひ兼られしにつき、此頃世に申はやす如く、田安殿の御相續にもふるへきか、さらは田安ハ　公の御相續ともなるへき歟、左ありては爲すへき事共の爲し得ましき歟なと、種々思召煩はせ給ふ事限りなし、

五月晦日、〇中略

一、昨日備中守申上られたる次第につき、さるとき御存分あらハ被爲聽度との御内書御渡